

フレック・トリック

北原白秋

青空文庫

フレップの実は赤く、トリップの実は黒い。いずれも樺^{からふ}太^とのツンドラ地帯に生ずる小灌木の名である。採りて酒を製する。所謂樺^{いわゆる}太葡萄酒である。

揺れ揺れ帆綱よ

心は安く、気はかろし、

揺れ揺れ、帆綱ほづなよ、空高く……

おそらく心からの微笑が私の満面を揺り耀かがやかしていたことと思
う。私は私の背後に太いロツプや金具の緩ゆるく緩ゆるくきしめく音を絶
えず感じながら、その船首に近い右舷の欄干てすりにゆったりと両の腕かいな
をもたせかけている。

見ろ、組み合せた二つのスリツパまでが踊っている。金文字入

りの黒い革緒かわおのスリッパが。

心は安く、気はかろし、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

私の今度の航海は必ずしも物の哀れの歌枕でも世の寂さびし葉しおりを

追い求むる風ふうき狂子きやうしのそれでもなかつた。ただ未だ見ぬ北方の煙

霞たましに身も霊たましいもうちこんで見たかつたのである。ほとんど境涯的に

まで、そうした思おも無いよこ邪しまなしの旅ごごころを飽満まんさしたかつたのだ。

南国生れの私として、この念願は激しい一種の幻疾ですらあつた。いまこそ私は年来の慾望を果し得ることを喜んでいい。私はまさ

しく樺太観光団の一員として、この壮麗な高麗丸こままるの甲板上にある。

心は安く、気はかろし、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

ハロウとでも呼びかけたい八月の朝風あさなぎである。爽快な南の風、空、雲、光。

なんとまた巨大な通風筒の耳みみあな孔あなだろう。新鮮な藍あいなと白茶しらちやとの群立だ。すばらしい空気きの林。

なんとまた高いマストだろう。その豪壮な、天ちゆうに沖ちゆうした金剛こんごう不ふ壊えりき力の表現を見るがいい。その四方に齊整した帆綱の斜線、さな

がらの海上の宝塔。

ゆさりともしせぬ左舷右舷の吊り短艇ボートの白い竜骨。

黄色い二つの大煙突。

あ、渡り鳥が来た。耿こうとして羽裏はうらを光らせて行くその無数の点々。

煙だ。白い湯気だ。その無尽蔵に涌出するむくりむくりの塊り。しかも、見るものは空と海との大円盤である。近くは深沈としたブリュウブラツクうしおめんの潮の面に擾乱する水あさぎと白の泡沫。その上を巨おおきな煙突の影のみが駛はしつてゆく。

北へ北へと進みつつある。

ハロウ、ハロウだ。

心は安く、気はかろし、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

そこで、私は支那服をつけているのだ。初めてつけたこの麻の支那服の著心地きんこちのいいことは、実に寛々かんかんとしてさばさばしている。その薄藍いろの上衣には唐草模様の釦ボタンどめが鮮かな黄の渦巻をなしている。五つも六つものポケットだ。それから雪白せつぱくのだぶだぶとしたズボン、利休鼠りきゅうねずみのお椀帽わんぼう。

今朝から変装して見て、すこしく気恥かしいが、私には却ってこの方がしっくりする。悠々とくつろげている。

なんと青い深い耀きをもった空の色だろう。私はマッチを擦る。
 抓^{つま}みの厚い土^{トル}耳^コ古煙草に火をつける。

香炎、香^{こうげ}華、香雲、香海。

心は安く、気はかろし、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

いい旅だなど、私は思う。

こうして海洋の旅を続けるのは、私としては小^{おがさわら}笠原渡航以来

十三年ぶりのことである。だが、かつての南の空は明るかったが、
 私の^{まぶた}睨は重かった。今の^{うしお}潮は暗いようでも、私の心は晴ればれし

い。人生の浮沈というものは一向に測りがたいものではあるが、とにかく今の私は平穩である。少くとも幸福である。

今度という今度、廉物やすものではあるが私は腕時計というものを初

めて購あがなった。それからこまごまととのえたものには洋杖ステッキ蝙蝠こうも

傘りがさ、藤いろ革の紙幣入かみいれ、銀鎖製の墓口がまぐち、毛糸の腹巻、魔法

罫、白の運動帽、二、三のネクタイ、艾もぐさいろの柔かなズボン吊、

鼠いろのバンド、独逸製ドイツのケースにはいった五、六種の薬劑、爽

かな麦稈帽むぎわらぼう、ソフトカラアにハンカチーフに絹の靴下。白麻の

シャツに青玉サファイアまがいのカフス釦までつけ換えて、これはどう

だいとうれしがった。私は山莊の住人で、平生へいせい生竹や草や昆虫ば

かりの中に立ち交っているので、身のまわりなどは清潔にはして

いるが、少くとも野趣そのままにちがいはなかった。それがアルパカの黒背広に黒の小さな鞆かばんを肩から引き掛けて、「さようなら、行つてまいります。」だから、それは瀟洒な、（色が黒くて肥つてはいるが）さぞ好紳士に見えたことだろう。

ましてや、誰よりも私のこの長旅行を喜んでくださったのは私の両親であつた。その前夜には、二人の弟もその妻たちも妹もそろつて大森の両親のもとに集あつまつた。そうして一同が私のために盛んに杯さかずきをあげてくれた。友人としては私のいわゆる隣国の王と称する（それは童話国の王だからだ。）「赤い鳥」の鈴木すずきの三重吉みえきちが、それこそ上機嫌でぴちぴちして、「ええのう、ええのう。」で意気が昂あがつたすえには、それはまことに枯淡閑寂どじょうな鱒ますすくいを

踊りぬいて、赤い農民美術の木の盆と共に危くひっくり返りそうになつたほどだ。それから私は両親の寢床の間にもぐりこんで、長い白髯はくぜんを引つ張るやら、皺しわくちやの乳房にかじりつくやら、ひとしきり困らしていたようだが、いつの間にかぐつすりと眠りこけてしまったらしいのだ。

当の七日の正午には、私は桜木町から税関の岸壁を目ざして駛っている自動車の中に、隣国の王やアルスの弟や友人たちに押つ取り巻かれて嬉々としてゐる私自身を見出した。それから高麗丸の食堂ではそろつて麦酒ビールの乾杯をした。驚いたのは同行すべきはずの庄亮しょうりょう（歌人吉植君よしうえ）が解纜かいらん前五、六分前に、やつとりボンもつけない古いパナマ帽に尻端しりはしよ折りで、「やあ」と飛び

込んで来たことである。「アツハツハ」と豪傑笑いをして一寸^{ちよつと}頭を搔くと、首をすくめて、

「なに、いや、そのう、銀座でこれをやつていたんでね。」と左を利かせる。あくまでも飄々^{ひょうひょう}としていたものだ。

「こりやあぶないぜ、吉植君、これから上陸する時には、よほど気をつけないと、それこそ鬼界ヶ島^{きかいしま}の俊寛^{しゅんかん}ものだよ。」
誰やらが一本参つた。

「いや、大丈夫、僕がついてるから。」

「その兄さんがまたあぶないからな。」

「そこは俺が引き受ける。」

「どうだか、二人ともさぞきこしめすだろうな、こいつあ、どつ

ちも劍呑だ。」
けんのん

また後ろで奇声をあげたのがいた。

ジャランジャランジャランと銅鑼どらが鳴ると、税関前に降りた一同はしきりに万歳をとなえてくれた。それから各自にカメラを向ける。活動写真を撮る。私たちは帽子を振る。次第に遠く遠く、小さくなってしまった。

イツテクルヨ、ランランラン

こう私は小田原の妻子へ打電するように弟に頼んだが、船が出ると船員が私の前に「電報がまいつております。」と私を探しに来た。

イツテラツシヤイ、バンザイ、パパ、バンザアイ

私は微笑した。そうして竹林の中の草深い私の家を、土間の籐竹を、また紅い芙蓉ふようや黄のカンナを、妻と二人の子を、その一人は生れてやつと一と月にしかならぬ篋子こうこのことを、夜はまた満天の星座と浪の音と虫の声々とにふ闌けてゆく壊れかかった二階のバルコンと寝室とを私はまた心にふり返った。

健在であれ。

心は安く、気はかろし、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

とにかく、さいさき幸先はわるくない。私はまた紫の煙草に火をつけ

る。

や、鯨だ鯨だと騒ぐ声がする。下甲板したかんばんだろう。

まあいい。そこで、今度の話は印旛沼いんぱぬまの庄亮君の宅を訪ねた

時に初まるのだが、彼は鉄道研究会員の一人で、新聞聯盟の外報部長であるところから、鉄道省主催のこの観光団に五、六人の同ど勢うぜいと乗り組むはずになっていた。そこで私も勧められたが、そ

の時には何故か浮きたたないで、行くとも行かないとも確答はずに酒ばかり飲んで帰った。が、妻に相談すると、連れはいいし、またとない好機会だから是非行らしたがいと、しきりに煽りあお立てた。と、急に足元から鳥の立つような騒ぎになって切符を申込む、印旛沼へ電報をうつ。それでももう締切にぎりぎりとかで

二等の最後の切符がやつとしか手に入らなかつた。ところを、研究会の同勢が沙汰止みになつて、庄亮君一人となつた。で、私はいい工合にその寢室として当てられた最上の特等室に割込ませてもらった訳なのだ。無論増金は出したが、私のために庄亮君が宣伝これ努めたお蔭であるといつていい。

何といつてもこの船一の特等室である。談話室と寢室と便器附きの広い浴室と、三室続きの豪華なものだ。つい前まで関釜連絡船としてのこの船のこの特等室は朝鮮総督の使用室だつたというのである。私の親愛な友人は私を大きな寢台に寝かしてくれて、自分は談話室のソファを仮寢台にこさえさして寝た。そうして、さて改まつて私を朝鮮の王様と披露した。

朝鮮の王さまもおもしろい。万事のんびりとやってやる。

そこでこの支那服だが、これはむろん私のものではない。昨夜、
そうだ、この船での第二夜、一等の食堂で、期せずして私たちの
間に童謡音楽会が開かれた。どうせみんなが酔っていた。私の周
囲にはいつものまにやら三等客の学生たちが有りつたけの蛮声を張
りあげていた。ピアノを弾く者もいた。踊る者もいた。それをま
た覗きに来て、そろそろとはいり込む人々で食堂がいっぱいにな
った。方々の窓にはまた黒い^{あか}赭い白い顔と手とが鈴なりにぶら下
った。その時、大柄ののっぽうの、それでいていつも棗^{なつめ}のような
顔をして眼の細い、何か脱俗している好々爺^{こうこうや}が著て来たのがこれ
であった。

「これはいい、僕が貰つとく。」

そこで、私の麻の浴衣と脱ぎ換えさしてしまった。すると、背の低い小さい小さい実直そうなお爺さんの頭にのつけた鼠の頭巾が目についた。

「お爺さん、その帽子はいただきますよ。」

小さなお爺さんはちよこちよここと私の前に来て、その頭巾を「へい、どうぞ。」と差出した。

「朝鮮の王さま出来ました。」と誰やらが頓とんきよう狂きやうに叫んだ。

一同礼拝、ハハツ、であつた。

こうして身につけてしまったのであつたが、朝になると、浴衣と帯とは談話室の椅子の上に畳んでキチンと載つけてあつた。と

なると、支那服は返さねばなるまいが、どうにも欲しい。で、朝から両手に桜麦酒ビールをかかえ込んで遊びに来た九州は福岡の読売新聞の支局長だというY君に、

「どうだね、これは貰つときたいが。」とやった。

「かまいませんさ。私が話しときますたい。著ておいでなさい。」
欲しいものは貰つたがいいだろうと私も思った。

「ちよつとそういつて来ますたい。」と、とつかわY君は飛び出した。やっぱり九州人はいいなと思ったものだ。

「大丈夫、くれます。」

「しめた。どうしたい。」

「何ですたい。」と、どかりとソファに身体からだを弾はねかえらして、

薄い口髭をちよいとひねった。円まるいはじきれそうな赭あから顔のすこしく釣った眼尻を仔細らしく細めると、両腕をテエブルに、そして肩を怒らした。どう見ても快活な佐賀男だ。

「話して見ましたもんな。あの爺さん、何でもあれを神戸で買こうて来て、たった一度しか手をとおさないちいいましたけん。なに、ちつとぼっかり惜ごしか如ごとしとりましたたい。そげんかこついうたつちやでけん、あげなさい、何か書いてもろうてやるけんよかたい。そげんか支那服いつでん金ば出しや買わるつじやろが。よかよか、俺が善ゆうしてやるち、うんと恩着せて置きましたたい。そしたら喜んで進上しますといつとりますばい。」

「しかし、惜しがってるのを無理に貰うのはいけないな。」

「うん、よかよか。とつときなさい。短冊でんくれてやんなさり。そつでよかたい。」と片手を仰ぎょうさん山さんにうち振ると、それからまた麦酒をグツとひとあおりだ。

「あん爺さんもおもしろか。何でん、下の関で車輛会社をやつとるちいよつたが、うん、やっぱり變つとる。いまに酒でん提げて来させまつするたい。」

元氣旺盛である。

「そりから、まだえれえ奴がおりますたい。肥前の呼子よぶこち知つとんなはろが。彼あつこ処こん王ぎんさままん如ごとつとたい。よか親子おんこですもんな。三等に乗つとりますばつてん、そりや貴族院議員の資格もあるちいいよりましたばい。鯨くじらんくわん詰じばこさえとる。全国に出しますも

んな。彼ありば引つ張つて来くう。今度呼子においでたなら、そりやよか、学校ん生徒でん何でんお迎むかい出すちいよる。」

「鯨ひげの髭ひげさ。ありやうまいや、粕かすづけ漬づけだろう。君。」

「鯨ほねん鼻ほねん骨ほねですたい。輪切がえらかもんな。そりや珍めづらしか。好しいとんなはるなら送おくらせまつしう。うむむ、後で連つれて来くう。」

ここで話が一転して、もう一人の支那服の白髪のお爺さんの噂へ移る。

私はそのお爺さんが初めから目についていた。日本人には珍めづらしい、若い時はさぞ秀麗しゆれいだつたらうと思える、禿はげ上あつた頭のそこらに、真まつ白しろい縮ちぢれ髪かみがもじやもじやして鼻はなの太おくて高たかい威風堂々とした朱面の持主である。タゴールそっくりといつていい。

いや、それよりも厳いついかも知れぬ。それが白い麻の支那服を着て、一等の談話室の、ラジオの黒い喇叭ラッパが二つ背中合せに立っている緑の おおテエブル大卓を前に控えて、ポケットから大きな眼鏡を取り出すと、白髪頭をひと振り振って両耳へ掛ける。何か書類をいっぱいに拡げて、それは精密に書いたり調べたりしている格好を見ていると、まるで白い牡牛のような活気と精力とが充ち満ちていそうであった。

「おい。」と、昨日きのうの朝だったか、庄亮が私の袖を引いた。

「あのお爺さんどうだい。みんながね、白秋さんはどの人だろうと探している様子だから、ひとつ、あのお爺さんがそうだといってやろうかね。おもしろい。」

「莫迦ばかいえ。あんな白髪しろがのお爺さんにされちやあ困る。」

「いや、いいよ。あれだあれだ。」と頭をかかえて笑い出した。

その話がまた出ると、

「まあいいさ。ゆうべですっかりお里がわかつちまつたんだから。」

「あのお爺さんも余程おもしろかつたと見えて、おしまいまで、一緒に飲んだり跳ねたりしていたぜ、君。」

「知つとる、知つとる。ほんに酒好きけんな。飲ます事ごとちなか。

とてん偉ええお爺さんの如ごとる。」

「それでむしようにうれしがつていたぜ、君。そして君のことをまるでやんちやの赤ん坊だ、あれでなくちや詩も歌もできまいと

」。

「君の稲葉小僧の新助もだろう。」

アツハツハツと、政友本党では幅利はばききの吉植庄一郎しよういちろう氏の令

息で、法学士で、政治ぎらいの、印旛沼は出津でづの開墾家の、お人

よしの、どこか抜けている坊さん風の、歌人の、わが友庄亮が頭

を叩いて、「閉へい口こう閉口。」と元から細い眼尻を一倍細くして、

赤い顔をした。

何でも、今度の観光団は面白そうだととなった。一同で選挙した

団長が日露役の志士沖禎おきていすけ介の親父さんで、一等船客の中には京

大教授の博士もいれば、木下柰太郎きのしたもくたろうの岳父しゅうとさんもいる。中学

校長もいれば有名な富豪もいる。銀行の頭取、牧畜家、材木業者。

それに二、三等にも山持ち、汽船ふね持ち、芸術写真のKさん、小学校長、学生、西洋画家、宿屋の主人、等の種々雑多の階級の人たちが全国から三百幾人と集まったのだ。それが、まだしつくりとはとてもうちとけないで、何かしら気づまりで固く鯪しやちこぼっていったのが、昨夜ゆうべの童謡音楽会でさらりと流れ、ふわりと和らいでしまった。

「とにかく、あれでよかったんだ。」

そうだと私も思った。

と、「先生はおいでですか。」と誰やらがいきなり飛び込んで来たものだ。

「明日あした仮装会をやるんだそうで騒いでいますが、皆さんに御賛成

をお願いします。なんでもこちらに出ていただかないと、どうもなりません。二等船客総代という格で伺った訳なんです、是非どうかひとつ御声援を。ええ。」

「うむおもしろか、やろ。」とY。

「これでいいんですか、この支那服のまま、それならかまいませんよ。」

「やあ、結構です。ではお願いします。どうせまた明日引つ張り出しに來ます。」

「いやあ。」といっているうちに、またポンと飛び出してしまった。

心は安く、気はかろし、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

まったく汽船ふねの旅はいいなと思う。ことに夏の海上くらい爽快なものはないなろう。

第一日は室内の整理やら、入浴やら、何かとそわそわとして暮れてしまったし、明るい食堂の晚餐をも度つましく片隅に寄って済みました。それから一等の談話室を覗いたり、甲板の籐椅子へもたれて見たり、自分の寝台へ帰って仰向いたり、まだ十分の落ちつきは得られなかった。甲板での活動写真の催しも、いたずらに人寄せの技師が不馴れで、ただ急造の白幕に白い円ばかりを出して、

そのままコチコチコチコチで中止になってしまった。

ただ、J・O・A・K、こちらは東京放送局であります。と、はつきりと大きくは唸うなったものの、すぐとその後から、ゴウゴウゴウと何処どこかの無電がしつきりなく邪魔をしかけて、それからの義太夫も太棹ふとも聴きいてる方で頭やすりを鑢やすりでこすられるようで苦しかった。

翌朝はまだ暗いうちから取り騒さわいだが、大洋の黎しの明のめは何ともいえずすがすがしかった。そのうちに珈琲コーヒーが来る。謄写とうしゃばん版刷ばんの高麗丸新聞が配られる。この第二日もいい風であった。私は午後無線電報を続々と諸方に打って貰った。昨日の御礼である。

妻子には、

トクトウニカハツタ、イマヨコハマヨリ二〇〇ノツト、

イチロヘイアン、アア、ヒロイウミ、アライウミ

また、ある東京の友人にはこうも打った。

アア、ソラトウミ、ナミヲハシルハエントツノカゲ

私はまた環^わ投げの遊戯に加わった。それに正午にはまだかなりの間^まがあるうちから、しきりに腹が空いて、昼餐の合図の銅鑼^らばかりが待たれて困った。ベルを押すことベルを押すこと。

「紅茶を二つ。」

「こんどは珈琲だ。」

「菓子、菓子。水菓子。林檎^{りんご}林檎。」

遠い、いささか薄紫に煙った北方の空を鷗^{かもめ}が幾^{いく}むれも翔^{かけ}った。

ひろいひろい大うねりの黒い波間には、小さな鴨かもほどの海鳴うみしぎが揺られ揺られて浮いたり沈んだり、すべこつたり、落ちたりしている影も見た。何という落ちついた叡智の持主であつたらう。その羽は黒く紫に、その嘴くちばしは黄色く、よく横向に尻尾をあげあげこつた。

それに船側に添つて乱れて駛はしりのぼる青い腹の、まるで白はくりよ竜うのような新鮮な波の渦巻と潮しお漚なわとをつくづくくと俯瞰みおろしては、何とか歌にまとめようと苦吟もして見た。

午後になつて、左舷の遙かに金華山きんかざんらしいのが眺められたが、航路というものは、海岸線には添いつつも、なかなか近くに寄れないと思えて、おおかたは空と海とのかぎりない大円盤ばか

りを周りにして進んで行くのだ。

「ここまで来れば、何も彼も忘れてしまいますね。」とある船客は幾度かの深呼吸の後で、哄然としてその笑いを放った。

「無だな。」とまた誰かがその言葉を飛ばした。

「ロウリング、ロウリング、ロウリング。」と、ある少年は両手と両足を思うさま踏鳴らして舞って廻った。

何処やらでは、のうのうと、声をそろえて羽衣はごろもを謡うたっていた。笛を吹く人もあった。

まったく、大洋はいいなと思った。

何が世の騒壇であろう。幽人高士のあまりに少い今の乱脈さは、その気品の低く、香気の薄く、守ることの浅い不見識は、あの市し

井無頼せいむらいの徒たりとも口にすることを恥ずる暴言と態度の賤鄙せんびと

(いや、それよりも下俗な覆面の残虐と私情の悪罵と)あの卑劣

とは何事であろう。あの狭隘さは、あの某々雑誌の喧々けんけんごう囂ごう

々ごうはいったい何事であろう。あの無秩序な、無差別な、玉石も

真贋も混淆したあの評価は、あの妥協は、あの美に対する放恣ほうしな

反逆は。

私がもし秦の始皇帝ならば、焚たくべき書、埋うずむべき坑あなはいかほ

どあるか。私は相応に知っている。決して文芸に就いては風俗壊

乱のみを狙ねらうべきでない。しかもその行使はほとんどが美への冒

流が多い。むしろ秩序紊びんらん乱の罪悪がどれだけ芸術の正しい品位

を破るか。近代は澆ぎょうき季ぎなりと時の人が嘆いたあの戦慄すべき保

元平治時代よりもまだまだ今日の芸術界の一部は浅ましい。墮落しきつてるような気がする。

芸術とはあんなものでない。大^{だいじょう}乗^りの、大雅^{たいが}なものだ。

この空を、この雲を、この風を、この海を、この光耀^{かがやき}を見た
がいい。

私は今日も、空を吸う、雲を吸う、風を吸う、海を吸う、この
光耀を吸う。

ハロウだ、まさしく。

心は安く、気はかろし、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

また、腹が空いた^す。もう昼餐^{ひるめし}の銅鑼が鳴るのもじきであろう。
どれ、ケビンの甲板に下りて見ようかな。
や、ゴルフをやってるな。

誰だ、いったい。あの桃いろのスカートを跳ね跳ねして、まるで乳房の張った馴鹿^{トナカイ}のように踏^{おど}っているのは。
すばらしい、すばらしい。

心は安く、気はかろし、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

海上の饒舌

銀の雄弁といたいたいが、これは銀鍍金の饒舌だ。

またなんと恐ろしくしゃべる、ちよつぴり髭の赤いぺらぺらの舌であろう。

私は呆れて見入っているのみだ。

時は八月の九日午後二時——三時、ところ処は横浜を北へ去る少くとも五百海渾かいりの海上、今やまさに津軽海峡つがるの中間を進行しつつある観光船高麗丸こうかんぼんの後甲板。

演者は誰ともわからぬ。

俗間に濶歩するお一二いちにの学生帽に紅あかの帯紙を貼りつけ、黒い髭をぴんと生やし、詰襟つめえりの黒服の右肩には緒繩おなわか何かのまがいの金モウルを巻きつけ、両の筒袖つつそでにはまた銀星をちりばめた幅広の紅紙べにがみを巻き、腰にはブリツキの手製のサアベルをさえ吊るし、さて、そのサアベルの柄頭つかがしらに左の手を後へ廻りうしろ気味に当て、腰をかまえ、りゆうと胸を反らすと、右の手で黒骨くろぼねの金かねに大きな朱の日の丸の玩具おもちゃの軍扇をサツと拵げて、口元近く煽いだり裏返したり、上げたり下げたり、時には「えへん。」と声づくろいをしてからに、得意気に、やや諛おもねつて、ええ、さてと、帽子の鰐つばを一つ叩くと、

まず、初めは、「近頃流行の安来節やすぎぶし」と手前口上で、一歩ひとあし

退ると、えへんとやったものだ。さて、この海軍参謀、ちよんがらちよつぴりの小男でござい。

安来千軒、名の出たところ、

コラサツと、この時、箆を前のめりに、ひよろひよると、横つ飛びに躑けかかった黒んぼがある。此奴の面の黒いこと、鍋墨と墨汁とを引つ掻き交せて、いやが上に、処きらわず塗り立て掃き立てたと見えて、光るものはただ両つの白眼ばかりの、部厚な唇だけを朱紅に染めてから、てっぺんから孔のあいたお釜帽子に、煤いろの檻樓の腐れ鯨の臭気でも放ちそうなのに、縄帯をだらしなく前結びにして、それも画きちらした髯むじやの黒い胸をはだけ、手も足も、それこそ真つ黒々に汚ごしきって、すなわち

早速さそくの鮪じょうすくいと来た。

コラサツ。

それは頓狂な、両肩両腕を大袈裟に振り立てる。爪つま立ち、蹲かがんでくるりとやるかと思うと、ひよくりと後あと足あしで跛びっこをひく。とんとんとんとと箒を拍子で、スツと掬すくうと、また腰を使う、右を見たり左へ傾かしいだり、眼を剥むき、でんぐり返すと、そのまた、反そりあご頤ごを突き出し、突き出し、またひよくりとやる。鼻はこする、水つばなはかむ。箒の中は掻きまわす。嗅いで見る。おくびはする。穢きたならしいの、厭いやらしいのといったらぬのだ。淫猥とも俗悪とも、それがその悪わる達だ者しやなだけにととも見るに堪えない代物なのである。

社しゃ日にちざくらとがみらに十神やま

やんややんやと、観衆が笑いこけこけ喝采する。手をたたく。それをいいことにして、

「ええ、今度は詩吟入り、おなじく安来節。」と日の丸の軍扇が胸を叩く。

「よし来た。コラサツと。」

黒んぼの奴、すっかりお調子に乗って、いよいよ出でていよいよ妙ちきりんな姿しな態をする。跳ねる、飛ぶ、眼で媚こび、股でひねる。日の丸も負けず劣らずである。味をやる、きいきい声を出す。

ああ、日は小さくもないのにな。夜になれば夜で、月も星も光るのにな。

考えると、踊にも高下こうげがある。それは踊る人の気品によるのだ。すぐれた気品は表現以上の心法しんぽうの鍛錬たんれんから来る。つまりは内から映発するのだ。奥の奥の人柄の香気だ。芸は道なり。深く心を潜めてこそ行為にも光る。詩を生むのも踊に現わすのもその精神とするものは凡てすべは一つで、二つではあるまい。この流通こそはおのずからに現われて来るものだ。だからたとえば、私も踊る。ではあるが、私の踊は父とも母とも妻とも子とも弟ともおどれる踊だ。三重吉の鱒すくいも、あのままがあの人ひとの芸術と同じ高さの心で現れる。踊の玄人くろうとにしろその心の鄙いやしさをその巧妙な手振りでは蔽おおいかくせぬものがある。だから、これは教養だ、人だ。

鱈すくいはそのらの百姓が踊ればそのらの鱈はすくえるである。だが、月の光は、星のまたたきは、田水たみずの、または根芹ねぜりのかおりは、土の香かは、青い鱈の精霊は、品の低いともがらにはすくえない。

月の光を切々とすくう鱈すくいの端たんごん 巖いんさはかつての鏡花散きやうか人も見たものだ。

それに、何ぞや、この日の丸は、黒んぼは。

さて、それでも黒んぼの鱈すくい、流石におしまいにはへとへとに疲れたと見えて、くるくるくると小鼠のように転廻すると、右手に並んで取澄ました仮装団のまん中へとどたりわアところげてしまった。と、白粉おしろいべたべたの洋装婦人の立膝たてひざがもろくも

ぶつつぶれて、「あ痛つ、こん畜生。」となる。大笑いだ。

ところが、金モウルの日の丸の意気はいささかも衰えないから呆れたものである。

「さて、このたびは追分。」

やや仰向き加減に眼を細め、口をすぼめて。それでも美しい声は出る。

大島ア……………小じまアの……………

あいとお……………るウ……………ふねエエエは……………

江差し……………がよ……………いかアよ才……………

なつかし……………イイ……………や……………

「もうひとつ。」

帯も……十勝^{とから}……に……

その……ま……ま……ねむ……ろ……

落石^{おちいし}……イイ……なみだ……は……

ほろい……ず……ウウウ……ウ……み……

「うまいぞツ。」と声がかかる。拍手拍手。

「ええ、今度は新潟甚句。」「ええ、さてその次といたしまして

三がい節。」「関の五本松。」「さのさ。」「喇叭^{ラッパ}ぶし。」「キ

ンライライ。」「へらへらへ。」「八木ぶし。」

鈴木主水^{もんど}というさむらいは

女房こどものあるその中に、

きょうもあすもと女郎買いばかり。……

カツタカタア、カツタカタ。

「ええ、こんどはストトン節、籠の鳥、枯れすすき、鴨おうりよつこう緑江、まったく以て休憩なしのぶつつづけとごさい。」

それがやつと済むか済まぬに、また姿勢を立て直すと、やりもやったり、

「ええ、さて、今度も一人で代りあいまする事なり、流石さすがに代りばえもいたしませぬが、えへんのえへんのえへん、烏賊いかとりくどき捕口説とどうじやいな。」

励む、サーイ、励む励むと烏賊釣商売、今日はよい風、日も入りござる。勝浦、法木ほうぎの島しまぶね船、小船、浦の真船まふねの出鼻でばなを

見れば、あねいもと 姐も妹も皆乗り出して、ろ 艀をおし押し、にまきの先に、おせなおせなとさぶかぜ通れば、凧もいし、かつまを通れば、せじた宵鳥賊、せがらし宵鳥賊、ながせながさき流れ通れば、風は南風みなみで、下り帆さがが早い、おしやく沖いかりから錨を下ろす。波も静かだねぶりすりすり、みのさや 蓑鞆はずす。空のすんばり、荒崎沖よ。あけほしいず 明星出れば船ふなあし足遅い。遅い船足たのしり沖よ。これでなるまい、かじ 楫をかきかきおとじをはずす。おとじはずせば法木の前よ。あけからす ちかちか明の鴉の鳴くこえきけば、首尾えい首尾えいと島中に告げる。内の婆ばさまたち早や目をさます。にまにつきたる子供のはても、遊だぶひまなく大

いりよう

漁 繁昌で暮らす。ヤンレ。

「ええ、地蔵舞まい歌うたとはどうじやいな。」

なにかかにか出そうだ。なにかかにか出そうだ、何舞とかに舞と、地蔵舞を見さえな。地蔵舞を見さえな。地蔵よ地蔵よ。地蔵は尊そんだから、何して鼠にかじられべ。鼠こそ地蔵よ。鼠こそ地蔵なら、何して猫にくわれべ。猫こそ地蔵よ。猫こそ地蔵なら何して狼に負けべ。狼こそ地蔵よ。……

「さて、東西とざいとうざい東西とざいとうざい、魚さかなづくしはどうじやいな。」
 「野菜づくしはどうじやいな。」
 「鱈たら捕口とりのくちぎ説はどうじやいな。」
 「何とか何

とかどうじやいな。」 「謎々何とかどうじやいな。」

何とか何とか何とかで、何とか何とか申すなら、何とか何とかべいしやらで、何とか何とかがべえしやらで、そのまた何か
が何とかで、ええ、何とか何とか何とかじやあ……………

立板に水というが、これはまた コウリヤン 高 梁 畑に榴散弾でもぶち撒

くように、パラパラペラペラと、よくその舌のまわることまわること、一人で二時間立てつづけの、早口の、とても目にもとまらねば耳にもとまらぬ薄っぺらの赤い舌の先きのプロペラではある。「えろう、早^{はよ}うおまんな。何というてやはるのやな。」

「へへん、雲雀ひばりの生れ代りだつせ。あかん。」

「あやつアくさい。気狂きちげじやろうのう、あんまり饒舌しゃべらすもんな

」

「どうしましたい。まだやってますかい。やれやれ。」

「驚いたね。よくもあの舌が廻るもんだな。ハーン。」

「えれえ、えれつちや。」

「ヤハハイ、ヤハイ。」と少年たち。

「止よしやがれ。」ピーと誰かが口笛を奔はしらす。

「ああ、ああ。」

「ああ、ああ。」

「ああ、ああだ。」

「はあ、へえだ。」

初めはその諧謔、淫靡いんぴ、精根たぐい、類たぐいの無い饒舌の珍らしさに、後から後からと黒山のように群たかつて、盛んに拍手し喝采もしていた聴衆も、あまりの目まぐるしさに、それに長い時間をたつた一人あで遮しやにむに二無二押しとおすその単調さに、ぼつぼつと、ああああと欠あ伸くびし出して来た。

「誰だい、いつたい、彼奴あいつは、船客かい、船員かい。」

「誰だか、何だか、海坊主でも匍はい上つたもんらしいぜ。これからそろそろ韃だつたん鞞だつたん海だからね。」

誰ひとり、その銀鍍金の饒舌家を知る人はなさそうに見えた。

何でもうまく変貌していたにちがいない。

ところで、前に書くはずなのを、うっかりしていたが、ちょうど、この日の昼ひるめし餐が済むと、直ぐから、二等船客発起の仮装行列なるものが、それこそジャランジャラン騒ぎでケビンの甲板を一周し二周したものだ。私までが幾度いくたびも幾度も引つ張り出されたが、今更となると、どうにも気恥かしいのだが、後からただ蹠ついてまわるには蹠ついてあるいた。おそらく、何の工たくみもなく、ただ支那帽に支那服のまままで、いつもの通りに自然にあるいていたのは私一人だったろう。だが仮装といえはいえるであろう。素面すめんといえは素面であろう。粉飾するのみが仮装ではないのである。

壊れバケツに金紙の両眼を貼り、金の髭をつけ、それを一人が冠かぶつて、その頭から青毛布の波を躍らしうねらし、一人がその尻

にもぐつて担ぎあげて、飛んだり跳ねたり、それが日本医專の獅子舞であつた。このバケツの獅子を先頭にして、ほうき箒を負うもの、すみとりばこ炭取函を首から掛けるもの、例の黒んぼ、赤い風呂敷のスカ―トの紅毛婦人、支那人、宣教師、あんま按摩、軍人、ヤンキー、アイヌ、似ても似つかぬ世界各国の人種共がそれは滑稽百出で練りあるく。見るから汚らしくて乱雑で愉快でないところの非美術的な一列であつた。それが、観客のなだれに押しまくられ突きまくられて、とどのつまりが船尾の一端に坐り込みの、芸づくしということになつたのである。

だが、青毛布のバケツ頭の金の眼の獅子の勇氣は譬えようもなかつた。まことに獅子こそは百獸の王だと見られた。しかしだ、

それも二度か三度か跳ね廻ると、意外にもくたくたと解体して、青毛布は尻尾の方にずるずると持つて行かれてしまった。それから黒んぼの鱒すくいだが、これも汗みどろの大吐息で、顔から手から白斑しろまだらになつてしまった。ヤンキーでもアイヌでも歌わせれば歌えそうにも立ちつ坐りつしていたが、それもただ千年も万年も続けば続きそうな日の丸の独り口説にいよいよ氣を腐らしたもののか、または八月の暑熱うんに倦うんじて軽い眩暈めまいでも起したもののか。うとりうとりと、傍そばから傍そばから寝ころんでしまった。

それにもかかわらず、「何とか何とかどうじやいな。」はたつた一人でもおかまいなしの、ペラペラペラで、いつになつたら止やまるものか、そうした氣配の微塵でも見えぬ根氣よさには、いか

な辛抱づよい静観者の私とてもひた呆れに呆れて、ただもうおとなしく引き退るよりほかはなかつた。

で、私は甲板をひと周りめぐした。どうにも頭が病めてしかたがなかつたのである。

が、私はその後甲板へ帰って見ると、それこそ眼をみは瞠まはつて驚かねばならなかつた。

あのペラペラが、日の丸がフツと掻き消えていたのである。そればかりではない。仮装の連中も観客の一人の影さえ、もう其そこ処こには見られなかつた。ただ、一面に日の照らしが白く明るく、板と板との継ぎ目の塵埃屑ごみくずのにじみさえが光り耀きらいでいた。午後四時過ぎの涼しい静謐せいひつが其処にはあつた。帆綱や欄干てすりやケビンの

何かの影も映っていた。

それは一時間と経つことか。たった十分か十五分のほんのちよつとした短時間のことである。それがどうだろう。あの恐るべき饒舌の何の名残も、あの金扇や日の丸の朱も、チョビ髭も、サーベルも、金モールも、お一二の帽子も、何一つとして、其処には影の影だに止めて居らないのだ。初めから何の踊りも口説も演歌も、あの淫靡も悪趣味も、其処には起らなかった、そうしたこと
を夢みるのはまるで痴人のたわいもない幻想としか考えられなかつたのだ。

「何と驚いたお饒舌り家しゃべだやつたらう。だが、何と驚いた雲散霧消だらう。まるでお饒舌りの神様見たいな奴だったが。いや、お饒

舌りの神様だったかも知れんて。」

私はまたあたりを眺めまわした。

津軽の連山は幽かすかであつた。だが、北海の丘陵は右舷に近く迫つていた。何という雑草の青の新鮮さ。海はまたかぎりなく明るかつた。やや紅べにと金とを交えた牛酪バタいろの一面のはるばるさざなみしい漣なみであつた。いよいよ夕風だなど、私は私の船室ケビンの方へ、穏かに、また安らかに歩みを返した。

小樽

旅にまで来て、十五、六年前の幽霊をかついでまわるのは何と
いう愚かなことだと、私はつくづく朱筆しゆふでを投げてしまった。小樽おたるの色内町いろないちようのキト旅館の二階での歎息である。私は処女歌集
の、「桐の花」の改訂をやっているので、その校正刷をここまですげかばん
提鞆さげかばんにしこたま詰め込んで来たものである。しかも私の校正
なるものは普通の校正ではない。ともすると改作になる。改作と
いうより全然の新作が加わる。

にゆうりよく
乳 緑 のびろうどの河豚ふぐ責めふくらし昨日も男涙ながしき

こうした歌を校正しているうちに

さみどりのちひさ河豚の子上げ潮のしほさる安く群るるこの
頃

という風の歌が出来る。そうした時には、私はきつと二十七歳の夏に私に還っている。ちようど第二詩集の「思ひ出」を上梓した頃だ。私は筋肉炎という未だかつて聞きもしなかつた病気にとりつかれてかきがらちよう蠣殻町は岩佐病院の一室にほとんど五十日余も入院

していた。大手術を受けたのであった。その病後の療養に、私は小田原の御幸ヶ浜^{みゆき}へ一と月ばかりほど転地していたことがあった。ああ、あの頃だったなと思うと、私の追憶には青い青い^{ひろしげ}広重の海の色や朝夕の潮騒の音が響いて来る。何かにつけて涙ぐましい自分であつたなと思う。

あかしやの花さく見れば水の上^へにはかなき夏の夢もやどりぬ
片恋のわれをあはれと鈴麦の花さく^{そひ}傍を通ひ来にけり
夕青き微光の中をあがりゆく足長蜂は足を垂らせり
玉赤き蠟マツチする草のなかすでに螢の臭気^{にほひ}むせべり

こうした所縁しよえんの深い新作が増補として、「第二桐の花」としてでも加えられねばならない恋々たる気持にもなる。何という情痴であろうと果敢はかなくもなつた。

ああ、あの頃だ。私は若かつた。木下奎太郎も吉井勇よしいいさむも長田秀雄ながたひでおも若かつた。ゲエテの門番の孫で、伊上凡骨いがみほんこつの弟子の猿づ

らの彫刻家独逸人ドイツのフリッツ・ルムプも若かつた。桐の花とカステラの時代だ。緑りよくきん 金暮春調きんぼくしんの時代だ。紺と白との燕つばめや骨牌カルタの

女王の手に持った黄色い草花、首の赤い螢ほたる、ああ屋上庭園の青い

薄明、紫の弧燈にまつわる雪のような白い蛾、小網町こあみちようの鴻の巣

で賞美した 金 粉 酒 のちらちら、植物園の 茴香ういきようの花、

大蒜にんにくの花、銅版画は司馬江漢しばこうかんの水道橋の新緑、その紅と金、小

ばやしきよちか
 林清親の横浜何番館、そうして私たちの「パンの会」、永代
 の一銭蒸汽と吊橋、小伝馬町は江戸の白い並倉と新しい東
 京の西洋料理店、椅子に三味線、紅提灯に電灯。切支丹伴天
 連の南蛮趣味。

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草に日の入る夕べ
 歎けとて今はた目白僧園の夕べの鐘も鳴りいでにけむ
 鐸鳴らす路加病院のおそぎくら春も今しかをはりなるらむ
 草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝て削るなり
 いつしかに春のなごりとなりにけり昆布干場のたんぽぽの花
 手にとれば桐の反射の薄青き新聞紙こそ泣かまほしけれ

横網に一銭蒸汽近よるとまはるうねりも君おもはする

こうしたわかき日の抒情歌にうき身をやつした軽い背広の私ではなかつたか。

あかしやの金と赤とがちるぞえな、

やはらかな秋の光にちるぞえな。

あの小唄は私の爾後の歌謡体の機縁を開いた。永井荷風氏が褒^ほめ、新しい「白樺」の人たち、武者小路、柳、志賀、里見、萱野の諸君までがロダン号の巻頭に寄せ書して、あれを読んで片恋の

身に相あいな成なり候そうろうとか何とか盛んに慇いんぎん懃ぎんを通じて来たものだった。そうだ、あの少し以前に、私たちの雑誌『屋上庭園』は私の官能の色濃い新詩「おかる勘平」で発売禁止になったものだ。ちようどその晩に、小伝馬町の三州屋さんしゅうやの階上で、荷風、有明両氏をはじめ私たち「パンの会」の一連が集つて盛んに鬱うつ憤ぶんを晴らしている、その席へ有島生馬君ありしまいくまの携えて来たのが『白樺』の創刊号であつた。それから時代が次第に浪漫派から人道主義に転々して行つたものだったな。それにいわゆる新感覺派の芸術といえそうな開放運動はあの以前木下杢太郎や私なぞが夙とうに済まして来たものだったな。

だが、時は過ぎた。赤い蒸汽の船腹の過ぎゆくごとくである。

「かお、かお、かお、かあ、くるつくるつ。」

や、鴉だなど私は向うの電柱の頂^{てっぺん}辺を眺める。無数の白い碍^が子^{いし}と輝く電線、それに漆黒の鴉が四、五羽も留っている。紫に見える。

「くるつくるつ。」

これは鴉の独^{ひとりごと}語である。実に円い音^ねをころがす。上機嫌の場合にそれが限るのである。

鴉は並んだり、向きを換えたり、上へ跳ねたりする。子鴉だなど私は見ている。と、葛^{かつしか}飾の生活が目^めに浮んで来る。私は子鴉とよく話をした。よく遊んだ。しかし、それが今に何の係りがあるろう。

この現実の灰色の亜鉛屋根ばかりの、それでいて尖った旧式の
装飾頭かざりをつけた棟の連続、汽船の煤煙、薄ら寒い輝かぬ海港、雲
の群れて曇った空、そうした見馴れぬ北ほっこく国の風物に直面してい
る私である。埃ほこりと雨との沁みついた硝子障子ガラスはことごとく閉めき
ったままだ。習慣とは恐ろしいものだなと思う。それにどの敷居
にもただ一筋しか開閉の途がついていないのだ。それでいて、流
石に夏は夏である。暑い、蒸される。それでいてまた、硝子障子
がガタガタと響く、風が吹きつける。

だが、せめて北の方でも一枚ぐらひは開けてもよきそうだと、
私は卓上電話の受話機を採る。とその埃りっぽい薄膜うすかわの耳がポ
ロリと落ちる。それを慌あわてて継ぎ合せて「もしもし」である。

鳶とびのような大鴉がまたしつきりなく屋根から屋根へとわめく。
 「小樽というところは鴉の多い港だよ。」私は小田原の我が子へ
 書く。

スイカダ、スイカダ、ランチ、ランチ

つい、着いたばかりに発信したが、あの高麗丸から海岸の西瓜
 の山を瞥べっけん見してそれこそ子供のように小躍りした鮮新さや、青
 や白や鼠色ランチの馳せちがう、やや煙で黒っぽい油絵風の画趣
 からも、今はもう午前十時の観想は離れてしまった。

そこだ、現代の未来派でやっつけければ、

鴉、鴉、鴉、鴉、

灰色、灰色、灰、灰、^{トタン}亜鉛、^{トタン}亜鉛、^{トタン}亜鉛、

尖塔、電柱、線、線、線、

+×△□、!!!

2 幽霊、H₂O 過酸化マンガン。チリチリチリン。

である。

私はまた「桐の花」の校正刷に目を移す。船中でもこれのお蔭で随分と陰鬱にもされた。弟の書肆^{しよし}では急いでいる。初版通りで済ませば済むものを、旅先まで昔の幽霊を背負ってあるく自分も自分だなど深い心の底から溜息も出る。それでも、何とか一、二字を生かせば生きるあの頃の真実も目につく。青春は二度とない。

見果てぬ夢の香気と色とは今だに連想の林に薄紫の桐の花をあ鏝い々と匂わしたくなる。考えるとまだまだ歌い残したものがおびただ夥しい。かといって、あの現実と空想との限界もつかなくかつた年少の恍惚とほの甘い感傷とは、この頃の集には入れられないのだ。正面から歌えもしない。昨今の私の詩歌はくんせい燻製にしんの鯨だ。燻製の鯨と桐の花と一緒にされるものか。ほんのかりそめの煩惱であるが今のうちに一寸でも昔に還つて見たい。いい機会だ、この機会を取りはずして永遠に寂しい私になりそうな気もする未練である。ないしよで、こつそりと、こつこつ、ほのぼのである。やっぱり夢は見たいのだな。

が、何という鴉だろう。話にきくと、北海のにしんば鯨場には三角眼

の不良鴉が跳梁ちようりようしているそうである。子供の頭には乗つかる、突き飛ばす、赤銅色の漁師の腕はすり抜ける、かかあ鼻衆の洗濯物はばたつかす。猾智で放埒ほうらつ極まるものだそうである。まるで鴉の王国といった風だそうである。初めて私はこの小樽でそれを思い当った。

今の私は以前の私ではない。現実という黒い鴉が私を見ている。燻いぶし鯁いぶの私を。

白き猫膝に抱けばわが思ひ音なく暮れて病む心地する

この浮薄げんきと銜げんき気とを省みると、何が音なく暮れてだ、何が病む

心地するだろうと赤面する。そこで朱線を引いてしまう。

白き猫ひそけき見れば月かげのこぼるる庭にひとり戯れぬ
あざ

これと換えよう。どうだと、昨日も船の中で庄亮の方きのうへ向くと、それは観想が深過ぎるといふ。昔の歌ではない、今の君の歌だといふ。それでも越前堀の月夜の庭で、真実に同時に見たものだ。私が答える。ただあの時は見てはいたが歌えなかつたのだ。それが今の技巧で出て来たのだ、構やしないだろう。と私は意地を張る。だが、ちがったのは技巧ばかりじゃないよと彼はいう。ふむ、あの頃の生活ということを考えて、今度の新しい歌集にも

入れられない、かといって、「桐の花」ともちがうとすると、仕方がない、逆戻しかとまた私が折れる。その方がいい、過ぎ去った昔の歌集に入れるのは惜しいじゃないか、今更誰だつて新しいものとは見てはくれまいと庄亮君がいう。それから、幼稚でも済んだ昔なら仕方がない、諦めるさとまたいう。それもそうだ、一旦吐いてしまった自分の息は取り還せるわけではないからな。ではいつそ、何も彼も初版どおりにまた遣り直しだな。それも大変だな、印刷所が今度は怒るぜ、さんざん直させてまた逆戻しとは人を莫迦にするのも程があるというにきまつている。呆れはてたものだなと私が頭をたたいた。それでおしまいかと思うと、まだ、上陸するところからこのキト旅館で、あの無数の意地悪鴉を恐れ恐

れ、それこそ極内密ごくでまた、こつこつ、ほのぼのである。何の因果かと思うのだ。

*

「種馬の交尾でも見に行つた方がよかつた。」と私はまた灰色の空と海とを眺める。

それはこういうことなのだ。

いよいよ高麗丸が錨を下ろすと、船中が一斉にざわつき出した。私たちもすっかり身支度を済ました上で、ともかく甲板の腕椅子うでいすへ凭よつて、初めて見る小樽港の眺望を物珍らしく取沙汰している

と、「やあ。」と麦稈帽をとった紳士があつた。名刺を出すのを見ると、札幌鉄道局の電気課長のA君だ。庄亮とは学友なのだ。うだ。そこで庄亮がまた「やあ。」と立ってゆくと、その人は一寸物かげへ引つ張つて行つて何か手真似していた。

「やあはつはつ、」と庄亮が頭をかかえて、顔を赤くしながら笑い笑い出て来た。「どうしたんだ。」と訊くと、

「そのなんだよ。」と生真面目になつて、「種馬の交尾をないしよで見せたいといつてゐるがね。君、どうする。」

「ほう、何処で見せるんだ、それは。」

「道庁の牧場だといつていたぜ。すばらしいんだそうだ。」

「そりやそうだろう。だが、今晚の歓迎会はどうか。」

「それもだが、君が校正を済まさない、僕は鉄雄さんに申もうしわ

訳けがないがね、昼間中は勉強してくれたまえよ、上あがつたらすぐ

旅館に鎮座ちんざさして、誰一人寄せつけないことにするからね。」

「籠ろうじょう城じょうかい。だが君、今日一日引籠ひろうつたところで、とてもで

きそうにないよ。だから。」

「だが、僕は困る、ちゃんと仕事させますと約束して来たんだからな。」

「驚いたな。君の監督も怪しいもんだぜ。」

「あつはつはつ、僕だけは一杯やりに行く。君の邪魔になる。」

「置いてきぼりかい、いやだなア。」

で、種馬見物は帰りにでもということにしてもらって、そろぞ

ろと出迎いの歌人たちに交って階梯はしごを下りかける、すぐにランチに飛び移ると、

「兄さん、おい、兄さん。」と、別の大型のランチから、遅たくましい面かおの浅葱あさぎの背広が呼び立てた。

「やあ、〇かい、いたのかい。」

「いたのかいもないでしょう。わたしが小樽に来ていることは、兄さんだって知っているはずだ。もう一年にもなるじゃないか。のんきだな。」

「のんきだといっても、すっかり忘れていたんだ。あつはつ、いたのかい。」

「いたのかいもないもんだ。さつきから二度も三度も呼んでいる

じゃないか。」

「そりやあ誰か呼んでるとは思ったさ、だが、俺を呼んでるとは思わなかった。君だったかい。」

「そうさ、ランチまで持って来ているじゃないか、早く此方こつちへお乗んなさい。」

庄亮は「あれは僕の甥でね、やつぱり印旛沼だよ。あつはつ、すっかり此処ここにいたのを忘れていたんだよ。」と笑った。甥といつても大きい甥御さんだった。元気はつらつ澆刺としてござる。

そこで皆が大型の方へ乗り移ると、ぼうと汽笛が喚わめく。揺れる。揺れる。煙が吹きまく。

壮快壮快、海岸には西瓜の山だ。丘だ、煙突だ、レールだ、そ

して防波堤だ、浮標だ。^{ブイ}

波を蹴立てて、風の薄寒い港内を一まわりすると、ランチが岸へ着いた。横浜を出て四日ぶりで陸地を踏むのである。うれしくないことはない。気が軽い。それが一、二町も歩くか歩かないうちに、旅館へ送られてしまった。

「実は、その、白秋君はね、仕事を持って来てるんで、非常にいそがしいんだ。で、一人で置かないと勉強して貰えないのでね。とにかく奉って、夕方の歌会の時に迎えに来てほしいんだがね。実いうと折角A君が種馬の交尾を見せるというのを断ったくらいなんだからね。」

早速にその社中の歌人たちを帰すと、庄亮自身も飛び出してし

まった。

やれやれと私は思った。それからくるつくるつの子鴉の啼声になつたのである。

私は浴衣の肩や膝や畳の上に巻煙草の灰ばかり落して、手は赤インキだらけになつて、それで何一つ片づきそうにもない。

^{ひる}午も過ぎたが、連れも歸つて見えない。電話はきらいだし、手

はたたいてもきこえず、やつと廊下を通る草履ぞうりの音を聴いて、そこで昼飯の支度を命じたが、待てども待てどもお膳は出ない。いったい、北海道の旅館は悠長だとはきいたが、これには驚いた。

上陸する匆々そうそうから一人でぼつんと膳に向うのは寂しいものだ。

ビフテーキの堅いことがまた切れるはずのナイフさえ徹らないの

だ。女中はつつましいが、想像していたような東北弁ではない。楣間びかんや床の置物などを見まわしてもやっぱり東京だ。で、寂しいが旅情というほどのものは起らない。もつと違った意味で寂しがりたいたいの心もちはずっかり裏切られた。

全く私は北海道の旅館といえ、もつと暗鬱ろくで、女中などはアイヌ見たようなのがいて、言葉も碌ろくに通じはしまいと、迂闊にも思っていたのだ。それがまた非常な興味を予想させられたものだ。これは幼年時代の恣ほしいままな童話的空想がそのままに頭の何処かに残っていたらしく思える。

二十一、二の頃、そうだ、私が石川啄木に逢ってまだほんの二、三度目の時だったと思う。

「君のお国はどちらです。」と私が訊いたら、

「盛岡の在です。」と彼は答えた。

「そうですか、奥州や北海道は、僕の国では鬼でもいそうなところだと思つていますよ。五、六百里も北だからね。」それはほんの何の気もなく、むしろ親和の心で私は微笑していったのが、それが彼の性来の癩癬かんぺきにきつく障さわつたらしい。私には答えないで、すぐに、隣りにいる人に向つて、

「I君、君も鬼のいる国の人だね。」

と両肩をスツと怒いからしていった。それで私は吃驚びっくりして、

「君、君、僕の国だつて熊襲くまそだからね。」

と大真面目であつた。

「じゃあ、鬼の一種だね。」

「うむ、そうだよ、君の方から見れば鬼の一種だろう、やっぱり。」

あの頃も何かといえれば反抗心の強い、負けずぎらいの少年だったな、啄木は。もつとも細君は持っていたが。

「姐^{ねえ}さん、一寸、このビフテーキを切ってくれないか。」

と今も私は頼んだ。女中はカチカチやっていたが、その皿がお膳から反^そりかえりそうになっても、コチコチで、そのうちカチヤカチヤ、くるりと皿ごと廻^{まわ}ってしまった。

「牛肉と馬^ば鈴^{れい}薯^{しょ}」といえは、独歩の小説から連想しても、北海道には野となく丘となくふかし立ての馬^{じゃ}鈴^{がい}薯^{いも}が雪のように積り、

熊の毛皮を着た髭むじやのアイヌやシャモが、その中に群居して埋^{うず}まつて、それらの窓や戸口から、手や頭やを出すとむくむくもぐもぐ馬鈴薯ばかりを食べているような気がした。いったい誇張は芸術なりで、私は何でも大袈裟に物を考えるのが好きな方だ。だから、牛肉でも、あの牛^{ぎゆうや}屋に吊したような赤と白茶の片脚だけのが、内地は百姓屋の軒や周囲の荒^{あらかべ}壁にぐるりと掛け連らねた唐辛子、唐^{とうきび}黍、大根の如く、いや、それを十層倍にしたぐらいの大きさのものが、まるで牛肉の祭礼のようだといひと思えたものだ。それがすっかり幻滅してしまった。

それに口^{くちとり}取も猪^{ちよく}口もお碗も、何から何まで、貝類ばかりなのも弱った。これでは夏の江の島へ行つたよう、北の小樽とは思

えない。

やっと食膳を片づけさして、またぼつねんと一人となると、やっぱり札幌の牧場にも行って種馬の見物でもした方が、よっぽど有意義だったろうと悔しくなる。雄大な自然の中で、奔放な種馬が跳躍し交尾し歓喜する壯観は、それは稀に見るすばらしさだろうとも思える。それに光り輝く光線、風、草いきれ。

それに私は幽霊の二乗を背負って、折角の真夏の旅の一日を引つ籠っているのだ。

たまたま下の洗面所に顔でも洗いにゆくと、目に入るものは、赤錆いろの鉄分の強い坪ばかりの池の水と、萎なえきって生色のない八やつ手での一、二本である。

*

二時頃になって、庄亮が、小樽新聞社のM氏と連れ立って帰つて来た。二人とも相当に酔っている。氏は三木羅風君の義父おとうさんだと紹介される。そこで羅風君の話が出る。ついこの出発の前夜に私たちが逢つたことも私は伝えた。M氏は庄亮のお父さんの永年の乾分こぶんだと自身をしきりに私に知らしていた。酔眼朦朧もろうろうとしていられた。

「何処で飲んだのだい。」と私は庄亮をふり返つた。

「いや、つい近所の洋食屋だがね。」といっているうちに、女中

はトマトにマイナスソースをかけたのと、蟹のコキールとを二皿持って来た。これらは感心に勉強していたので御褒美だそうである。

牛肉はコチコチだったが、トマトの新鮮で美味なものには驚いた。流石に北海道だと思えた。

これは素敵だ、これは素敵だで、とうとう私一人で食べ尽してしまった。

そうして光りがやく紅くれないのトマト畠を想像して見た。そうした北国ほっこくの野菜畠の外光はどんなに爽快だろう。そうした畠の斜面は。

かつて小笠原の父島ちちしまにいた時、私は朝となく、夕べとなく、

この赤いトマトを食べ惚れていたものだ。だが、亜熱帯のそれは何かしら熱気が深く籠っていて、これほどの冷えびえとした舌触りは無かったような気がする。

ただ、あの島の日光は全く金色こんじきに照り輝いていた。午後二時三時になると、まっ白い雲の光までが底深い金色にぎらぎらした、どんな油絵具でも、あの強烈な光は出せなそうに思えた。それに犬の男根のような若芽ゴムの護謨苗や、浅緑の三尺バナナや、青くて柔かな豆の葉や、深い緑のトマトの葉、褐色パイナップルの鳳梨やが、朱紅色の土の上に、まるで印度更紗インドさらしのように、いやそれよりも生々しい極彩色の絵模様として綴られてあつた。その中に鋏くわ打つ人もその朱紅色の土の香かを深く嗅いで、悶絶しそうであつた、素っ

裸で。

と、島独特の黄色い円い面かおをした童子が赤いトマトの累累るる々々いとつまつて盛り上つた竹の籠を両手に擁えて、山坂などを上のぼつて来る。その髪の毛に円光が立つ。私は或日、とある山道の曲り角でそうした童子と、突然に遭遇であつて実に驚いたものであつた。行き過ぎてからでも私は後ろを幾度振り返つたか。礼拝したくもなつた。

だが、小樽や札幌のトマト畠が果してどうした香氣の風景であるか。その漿しょうすい水の発散は、光線の層積は、まだ私の目には浮んで来ない。

「吉植君。君も印旛沼を開墾したらトマトをこさえろ。」

「ごさえるとも。」

「五十町歩すつかりトマト畠にしてしまいましたまい。」

「やああ、それでは飯が食えなくなる。」

*

私の語法は現在格で進める。この方が楽だからである。

そこで、ファイルムが変る。

夕方、庄亮の主宰する橄欖かんらん社の小樽支部の人たちや、此処で

出している『原始林』の同人たちが五、六人で迎えに来る。私の仕事はそこでひとまず明日の出帆前のことにする。入浴して、さ

て晚餐を済まして、会場へ行くこうというのだが、宿の方の支度がなかなか整わない。

「どうも北海道は悠長ですよ。」と誰やらがいう。

「それも何処か雄大でいいさ。」と私が笑う。

「雄大は妙ですな。」

八時半にやっと総勢で自動車に乗る。

はし
駛る、駛る。私は早朝上陸して、この夜になって初めて小樽の市街を見るのだ。

「や、明るい明るい。」

全く、通りは広いし、電燈飾は華美だし、雑踏する群集も真夏の軽装だし、一々にそれらが鮮やかな発光体となって遊泳して、両

側のシヨウウインドウの中までが、まるで水晶宮のように水々しく照り反すと、花屋がある、植木屋がある。それから活動小舎がある。絵看板がある。幟のぼりが並ぶ。銀座と六区とを一つにしたように殷賑いんしんである。

「縁日だね。」

という間に何か公園の入口らしいところで自動車が停まる。矢野倶楽部クラブである。

二階の広間へ上ると、四十余名の会者がすでに集つて三方に居流れている。床とこばしら柱の前に二人が据えられる。みんなが一斉にこちらを向く、そうして堅くなつている。

潮音の古い社友で、土地の歌壇で元老株のお医者さんの山下やました

ひでのすけ 秀之助 君が 一いちじょう場の 歓迎の辞を述べて、これが済むと、また
皆が私の方を向く。講演は嫌いだから初めからお断りしてある。
それにどうも挨拶といったところで、私などは結論が序論と一緒に
になってしまうので一言二言いえばいつもそれでおしまいになる
のである。

まあ、立ち上って大広間のまん中に進んで見た。

「エー、今晚は偶然の好機会で、こうして皆さんにお目にかかれ
たことを愉快に思います。何かいろいろお話したいと思えますが、
どうも私には結論が先きへ来て困る。皆さんも顔だけ見ればいい
といわれる。で、とにかくこれが私——白秋です。よく見て下さ
い、一寸と廻って見よう。」

そして三遍同一点でぐるぐると廻ったが、廻っているうちにおかしくなつて笑い出してしまった。

座につくと、「今のは踊の手が交つたようですね。」と誰やらがいう。

「そうかな。踊じゃないよ。」

庄亮はと見ると、本来が雄弁家だが一人で喋舌しゃべつてもわるいと思つたかして、簡単に「皆さん、ありがとう。」と頭を下げてすました。そこで一同が急に寛くわぎ出した。笑い声が方々に起つた。

それから歌会に移つたが、一方の壁に半紙一枚に一首ずつ歌を書いて、四十余枚の歌を一々に批評するのである。庄亮君は坐つたまま、

「このお歌を拝見いたしますとお。」と一々に演説口調でいう。私は貼紙の傍まで行つて、朱筆で、難点に傍線を引いて、何かと指摘しては、こうむつかしくしてはいけなかなとも考えさせられる。庄亮は馴れているが、本来私には歌会の形式が好きでない。

思うに運座とか互選とかは、こう大勢ではともすると無意義になるのである。一視同律であまりに酷きびしく批判すれば、初心の人は怖おじけ、または恨むであろう。また真に熱意の無い人が二、三あるとすると、そうした人にいかにこちらから説話しても真実に要を得させることはむつかしい。で、先方の心が真に道を求めようとして動きかけるまでは、黙っていた方がいい。と私は常に思つ

ている。一つには自分にも出来もしない癖に差出るまでもないと思ふからである。

だが、この晩の歌会は非常に静肅に了おえた。よく統一されてい

た。二次会は新中島しんなかじまという宏壯な家で有志の人たちだけで催された。煌々こうこうたるシャンデリヤの下で、置酒交歓、感興成つていつ果つべくも見えない。土地の美妓びぎも数多あまた見えた。半折はんせつや短冊を後から後からと書かされる。初めには忸怩じくじとして差控えたが、酔うに従つて書くに従つてただそのことがうれしくてならなくなる。踊もおどつた。伊奈節や麦搗踊むぎつきおどり、一同が輪になつて踊つて廻つてゐるうちに夜がほのぼのと明けてしまった。

「あまり書いてはいけないよ。」と庄亮から叱られる。帰り途の自動車の中ではO君から

「あまり踊ってはいけませんよ。」
とまた叱られる。

「おもしろくてしようがなかったんだ。やあ。」
一寸と頭をかかえてしまった。

*

「や、すばらしいトマトだな。」

若紳士戸塚君が実に清新なトマトを一籠さ提さげて来た。

「これはいい、船で十分に食べられるぜ。」と庄亮が喜ぶ。

「大きいのは俺が食べることにする。」

「や、そりやとにかく、君は仕事はどうしたい。」

「もう止よした。幽霊の重荷は御免だよ。それにとっても間にあいそうにない。第一昔の歌ばかり改訂していたんでは、何のために旅行に出たかわからなくなる。陰鬱になる。君の監督はこれで辞任してもらいたい。将来に生きることをしてしないでどうするのだ。僕はこの旅行を全然楽しむ。」

「そうか。わかった。もう何にもいわぬ。」

さあ出かけようとなる。決断してしまうと、心から晴々しい。

口笛でも吹きたくなる。往来に出る。

心は軽く、気は安し、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……………

「やあ、先生。」と九州男子のY君が胸を反^そらして髭をひねって来る。

「やあ、どうしました。」

「定^{じょうざんけい}山溪へ行^いたて来ましたたい。団員は誰^{だつ}でん行た。そりやあ面白かつた盆踊が、ほんによか温泉ですばい。そりから、誰^{だつ}でん知らんばつてん、わしだけ上^{かみ}の方に今朝^{はあゆ}早う行^いたて見ましたもんな。よかつたあ。川に白い鳥が二羽浮いていましたたい。短艇^{ボート}

も貸さすもん。お帰りなつとん行たて見なはるとよか。そりばつてん、熊ん出ますもんな。うむむ、まだ今は出んちいいよつた。」

日本医専の生徒の美少年のSがまた角帽で、絵具函を片手にぶら提げ、小躍りしながらやって来る。

「先生、札幌はいいです。あかしゃがいい。大通りの中に花畑があつて、子供が遊んでいて、実際美しかったですよ。東京よりいいです。それに大学や植物園の楡エルムがいいです。素敵。」

「ほう、いいな。画いて来た。」

「ええ、沢山。」

京都の若い警部さんで温厚で真撃な紳士A君がまた眼鏡を輝かし輝かし帰って来る。

「牧場はいいですよ。月つきさつぷ寒つむぎの牧場は、雄大しゅうだいで羊シープがいて。ええ、行つて来ました。向うに野幌のっほろの原始林が見えましてね。それに地平線までが緑ですからね。もつとも月寒の夕方がいいそうです。夕日の頃が、羊シープを追つて帰る頃が、まるで日本ではありませんよ。」

惜しいことをしたなと思う。

と、飄ひょうひょう々として下の関の車輛会社ちゆうがいの中、爺じいさんが来る。

「先生、ようべはお楽しみ。お盛んでしたな。へへへ。」

「や、あんたもあの家へ行っていましたかね、向うで騒いでいたのはきつと、そうだ。」

「先生、鎌かけよつとばい。そげんすぐ欺されなはんならでけん。」

こん爺さん嘘しつこつ言いいたいたい。なあん、小樽で遊あそぼか、定山溪いに行いたらしたですたい。」

「ふふ。」と爺さん笑わらい出でした。

「わしあ、よか事ことした。今日けふたい。小樽へ帰かえつて来きつと馬車ばしやん一いっ台居おつたもんな。そこで五円札ごえんば、うんち投なげ出でえて、何ど処こつちやよかけん、五円ごえんがつ汝ぬしがよか事こと駈かけさせちいうて、じやらんじやらんじやらんじやらんじやらん駈かけ廻まわつたもんですたい。愉快えんげきでしたもんな。大臣だいじんになつたごたつた。」

ランチだ、ランチが出るぞう。

ぼうう……。ランチラン、ランチ、ジャン、

「やあ、高麗丸こうらいがんだ、高麗丸こうらいがんだ。」

「幽霊退散万歳。」

「そうだ、万歳。」

心は軽るし、気は安し、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く。

おおい、
おおい

光り耀かぬ波、一面に滑らかな乳黄色の波、何かしら薄ら寒い
遠い眺めの海。明るいようでも、それは燻いぶされている。何かしら
また空にも寒い靄もやがかかって、窮みもなく日の光が光らずに流れ
てゆく。小樽を出てからの展望はいよいよ北海らしい感じを深め
て来た。それに幾分は曇天でもあつた。ともすると明日あしたあたりは
雨になるかも知れないとさえ私にも思えて来た。

「見たまえ、あんなに日が当つても、波の面一つ光らないんだか
らね。」

私の友はこういつて、甲板の籐椅子から延びあがって見て、またのそりと腰を下ろした。ノートにしきりに歌を書きつけている。

「そうだな、何だか急に昼が短かくなつたようだ。」

私も隣の籐椅子に凭よりかかつて、しげしげと何か白い鳥の飛ぶのを眺めていた。

「お腹も空いたようだな。君、何か食べないかい。」

「それより、お湯にはいりたいね。」

「そうだな、夕飯でまた一杯やるとして、その前にはいつとくかな。それにしても紅茶でも取ろうや。」

「よく、君はいけるね。よつぽど健康な胃ぶくろだと見える。」

「健康だとも。いいかい。呼ベル鈴を押すぜ。」

私たちはまた自分たちの談話室には入り込んでしまった。

と例の九州男のY君が、一人の実直そうな白^{はくめん}面の若者を引つ張つて来た。

「やッ、先生、この仁ですたい。松浦王の息子さんですもんな。ほんによかけん。」

「ほう。」と私はその方を見た。「さあどうぞ。」とクツシヨン附きの華^{きやしや}奢な椅子の一つを指した。

Y君はどかりと窓際のソファに腰を下ろして、グツと後ろへ凭^{もた}れ気味になる。

「出して見なはり、その鐘詰ば。」と、それから此方^{こつち}を向いて、

「こつですたい、鯨の鼻骨は。粕漬ですもんな。まだ野菜漬もあ

つたろが。うむ、そりそり。」と、またもう一つの罐詰を新来の客に出させる。

「こりば、先生に上あぐつちいいよらす。食べて見なはつとよか。そりやうまか。小樽で買こうて来こらしたたい。自分の家の罐詰ですもんな。うむ、日本中の何処どけ行いたつちや売つとる。」

小松浦王しやうはまだ立たつたままだが、温和な微笑を面かおに漂かわして、謙遜に、しかも何処どかに闊達な意気をひそめている。口数が極めて少い。やさしい眼だ。

「それは難ありがと有あう。それではウイスキーでも抜ぬくかな。」

そこで、角罫の栓せんがポンと鳴る。鈴ベルの釦ボタンを押す。ボーイが来る。煽風機せんぷうきが廻り出す。

「へへへへ。」と赤ら顔の車輛会社のS爺さんがひよろりとやつて来た。もうだいぶきこしめしている。

「お酒盛ですかい。先生、わしはお恨みを申しに来ましたがな。へへ。」

「どうしたのです。まあ、お掛けなさいよ。」

「ええ、難有う。」と、ソファの尻、Y君の隣に、ぐにやりとして、両膝に手をついた。眼がとろんとしている。鯨の赤肉あかみ見たいような顔の皮膚だ。

「支那服ですがな。支那服。あれは喜んで進上申すと、このY君にもいとうきました。先生の御希望じゃ。それはありがたい。結構じゃで、喜んで、進上と。」

「こん人酔うとる。もうそげんか事こついわんちやよか。」Yは元氣だ。

「いや、お恨み申す。それをそのお返しになつた。これは理窟じやが、折角の志。」

「そりやあ、僕も欲しかつたんだがね、ちよつと惜しそうに、あんたがしていたというから、お返したまでさ。人が物惜みするのを貰つたつてしようがない。」

「物惜しみ。これはおかしい。いったい、どの仁がそう申したか。怪けしからん事じやな。」

「俺がいうた。ほんな事こつじやろが。」とY君が口髭をキウと一つひねって、

「うん、よかたい。一杯飲みなはれ。」

「いや、いただきますまい。わしがボーイを呼ぶ。そういう事なら、一倍お恨み申す。わしの面目めんぼくが丸つぶれじゃ。先生、御用心さっしやれじゃ。今度こそはどえらい仕返しをし申すで。」

「よし、よし、わかった。わかった。」

「わかりやしませんがな。わしの子分を連れて来る。ボーイ、麦ビ酒ールだ、麦酒だ。——おおい。」

ふらふらと立ち上つて、そのまま甲板へ出たと思うと、
「おおい、おおい。」

おおい、おおいと、海あざらし豹しも

海のなかから呼んでます。

どうせ、薄雲、北の海、

おおいおおいで日が暮れる。

*

とうとう日が暮れてしまった。

いかにも何かしら物寂しい風と煙である。色と響ひびきである。光の

ない上の世界と下の世界、その間を私たちの高麗丸のスクリュウ

が響く。機関が熱ほてる。帆綱ほつなが唸る。通風筒の耳の孔あなが僅かに残照

の紅みを反射する。

あ、書くのを忘れた。あの後、私は専用の雪せつぱく白ゆふねの湯槽の中に長々と仰向きになった私自身であった。船中でも入浴ほど心の安まるものはない。私は湯にひたり、薄紅い角かくの石鹼をいつまでも私の両りょうて掌もての中に弄もてあそんでいた。なんと温かな、いい匂であろう。私はまた蓮の実型の撒水器の下に立つて、頭からさんさんと水を浴びた。新しい浴衣の下に、改めて薄いメリヤスの襯衣シヤツを着こんだのはそれからであった。思いなしか、ひえびえとした気流が昨日とは何か変って感じられたものだ。

私は船室ケビンの前に出て、空いていた籐椅子の一つに凭れて見た。一列にみんなが並んで、誰もが蒼茫と暮れてゆく北海の薄明りを眺めていた。全く物寂しい風と煙であったのだ。

フネガデルデルカラフトへ

小樽を出る時、私は小田原の妻子へ、こう打電したものだ。つ
い三、四時間前のことであつた。私たちは一旦着換を済ますと、
しばらくは右舷へ集つて、応接に違いとまもない鮮緑色の海岸線を物珍
らしく楽しんでいたが、一人減り二人減りすると、私もまた左舷
の自分たちの甲板へ還つて来た。其処には先きにいったように遥は
るばる々とした大洋があつた。あの光のない、ただ明るいだけの波濤
の連続が。

その波濤の面おもの金と紅とが乳黄となり、やや寒い瓏ろうぎん銀となり、
ブリュブラツクとなり、重く暗くなり、そうして今は舷下の飛沫
と潮しおなわ漚なわとがただ白く青く駛つて、擾みだれて、機関部の汚水がタツ

タツと吐き出されてゆく。

ちよつと

一寸したウイスキーの酔は、すぐにも発散したし、湯上りの
はだざむ
 やや肌寒を感じるところへ、明日はいよいよ樺太だと思つと、
 何か気もあが昂れば、引きしま緊つても来る。

「おい、何を考へてる。」

こうした時、ぽんと肩でも叩かれたら、私は恐らく顔をあから赤めた
 であろう。

「郷愁だな。」

そうしたものだろうなと私は私自身にも答へても見た。

私ばかりでなく、これは籐椅子、木の椅子、安楽椅子のこれら
 の一列の人々の凡ての顔にも表われている。

おおいおおいと誰やらが

海のはてから呼んでます。

どうせ、ぬか星、北の海、

おおいおおいで日が暮れる。

と、一斉に燈あかりが点く。ジャランジャランと銅鑼が鳴る。

*

煌こうこう々たる食堂。それが却って明る過ぎて、何か今夜は堅苦し

い。誰でもが緊張して、以前とは様子が違っている。それは、札幌鉄道局の役人たちと、小樽からの新来客の二人とが加わったための、やや油に水をそそいだ気配もあつたかも知れぬ。その人たちにとつても初めての晩餐ではあり、そうそう寛げもし得ないであらう。それに一同の郷愁である。とはゆかなくとも、近づいて来る目的地への期待と何とない或種の武者ぶるいもある。

ここで、この一等船客の食堂について、多少の説明をして置こう。先ず食器棚の両方の入口からはいると、奥の正面にはピアノが一台装飾的に据えてある。ピアノの上にはどす黒いラジオの喇叭ツバが載っている。その室内には白いテーブルクロスを掛けた食卓が三列に流れ、中央のにはピアノを背にして船長が腰かける。

船長はいかにも穏かな温顔の人で、先ずは無口に近い。やや前かが踏みでいつも黙々としてナイフとフォークとを使っている。それに向つて事務長が末座に位置する。長身の、まだ若いが、職掌柄だけに凛として気の利いた顔貌と風采の持主だ。左舷寄りの上席には門もじ司鉄道局の船舶課の、かなりの上役らしい人が据わる。この仁は鼻も高いが、いくらかけんだか権高のすつかり官僚風にできている。これらの三つの座席は必ず極っている。船客の座席はどれと定つてはいない。自由ではあるが、中央部には、下の関や神戸から乗ったO・M・A・K・D、それにH夫妻その他が既に早やお極まりのように両側に居流れている。O氏は日露戦役の志士沖禎介氏のお父さんで、肥前は有田の弁護士である。もう六十を越えて、

それで前まえびたい額は禿かげているが、鬘かくしやく鑠やくとしたシャンとした老人である。郷里ではその子の禎介氏の記念図書館の館長をしていられ、老後を全く壮烈な忠死を遂げた、その子の名誉を己れの円光として生きている人である。親としてはこれほどの光栄もなからうが、その子としてはこれほどの孝行もなからう。この人が团长に挙げられたのも忠孝並びたる禎介氏の功績あずかが与あつて力がある。少々は酒がいける。Mさんは神戸の縉しんしょう商しょうである。いうところによると、美術院の大観たいかん観かん山さん等の極めて親しいパトロンだそうである。飄逸な反り型の赤ら顔だが、どこかに俗っぽい。好きで酔うと贅ぜいろく六句調で、変な唄ばかり歌う。A博士は電気学者で京都の大学教授である。髪をキツと分けて、角あじばった頤いの、

眼鏡の奥に謹直らしい眼を光らしている。絶対に禁酒家である。もとはかなりいけたそうであるが、今は何か病後でもあるという。一、二度はその夫人も並んで見えたが、すっかりこの頃は影をひそめてしまった。同行の令息とでも一緒かも知れぬ。令息ははっきりと覚えぬが三高の学生らしい。建築家のK氏は我親友の木下柰太郎の姉さんの夫にあたる人で、彼を準養子にされている。胡麻塩頭の、金縁眼鏡をかけた、顔の白い、一寸学閥風の老紳士である。もつともらしい態度でやや中脊だ。少しは飲めそうだ。津軽海峡あたりからそろそろよい機嫌になって来られた。これは内密だが、一寸長唄に懸腕けんわんちよくひつ直筆で富士山の画がお得意だ。D中学校長は温厚そのものといつていい。円い眼の笑えば眼尻が細く

なる。なつめづら 棗なつめづら 面である。酒にはすぐに赤くなる方である。団員名簿に会社員と記されたH君夫妻は小倉こくらから出て来た、土地では相
当の資産家らしい。夫君はまだ若いが代議士の候補にも一、二度
は立ったとも誰かの話であつた。船員を除いて、この人ばかりは
いつも黒の背広を着て来る。浴衣がけなぞにはなつたためしがない。
髪をオールバックにチツクで反らして、美髯びぜんの、瀟洒な風姿
であるが、何か気取つて、笑うにも声もさして立てず、肯うなずき肯うなずき
する。腕を拱くむ。ボーイに麦酒ひとつ呼んだことがない。夫人は
先ず船中一の美人であろう。細っそりして、色が白い。身みおも重で、
時には面おもやつれがして見えるが、そのせいか何かコケチツシユに
も感じられる。童謡音楽会の時はこの奥さんが、私の「あわて床

屋」をピアノで弾いたのが導火線になった。だが一曲弾いただけですつと居なくなつてしまった。若い学生たちの乱酒と騷擾とに驚いたのだろう。食堂ではチンと澄ましている。それが今夜は鼠色の眼鏡をかけて、急に寂しくなつた。

私と庄亮とはO氏やA博士やH君夫妻を向う斜めに見わたせる、船舶課側の窓際のクツションに凭れる、末席の方だが、このテエブルには若い船医や京都府の警部さんのA君やと大概は同席である。だが、今は私たちの前には某銀行の重役のBさん夫妻が並んでいる。私たちの隣室の客だ。Bさんは下り眉さがの濃い眼尻のたるんだ中老の恵美須えびす顔だ。サイノロジイらしいなど誰かが噂した。妻君は桃いろのスカートで、歩くときには、その健康そうな円い

お腰がくるりくるりと弾む。これも誰かが手真似をしては怪しからぬ笑い声を立てた。顴骨かんこつが高くて、さほど美しくはないが、近代的ともいえない魅惑力を持った顔だちだ。頭取さんは甲板ゴルフが好きと見えて、午前も午後もぶつ通しの、相手を集めては莞爾かんじとして杓子棒で玉を突いたり飛ばしたりしている。下戸げこでその方は話にならぬ。ただお二人はいつも御一緒である。だから若い者がやきやき騒ぐ。

右舷寄りのテエブルには、音楽会の晩、私に利休鼠の頭巾を貸してくれた、小さな小さな商人風の、若山牧水に似た顔のお爺さんと、その連れの須田町のある旅館の主人だという、これも江戸っ子式の快活な中爺さんと、例によって酒が賑やかだ。これは珍

らしく向うの隅っこで氣勢を挙げる。

私たちの席はいつも私たちだけが残されてしまう。時には外のテエブルに鞍くらがえ替して見るが、何処へ行つても残されてしまう。つまらない事おびただしいのだ。船舶課の側へずり上ったところで、何だかお役所風で話が堅くなるし、中央は占領されているし、たまには例の白髪の、牧畜家の、活気縦横な和製タゴール氏と対い合になることもあるが、まだまだ十分には双方からうち解けない。

こう見渡したところ、その他の船客たちも何れも相当な紳士ばかりで、至極至極におとなしい。

それが申し合せたように、今夜は不思議に静粛である。庄亮ま

だが、風邪気味で咽喉のどを痛めたというので、さして左が利かない。

「止すか。」

「うむ。御飯にしよう。」

何とまたH夫人の鼠色の眼鏡が寂しいことだ。

*

、こちらは東京、ゴウゴウゴウ、放送、ガバガバガバ、局であ、
グワウグワウ、す、す、す、す、す、ジャオジャオジャオ。

「何だ、いったい、こりやあ、しようがないな。」

と、誰やらが、心細い声を出した。まだ宵のくちの一等談話室のソファである。

「今頃は半七さ、グワウグワウグワウ。ジャオオ。」

「ああ、ああ。」とまた一人が立ち上った。

「ラジオにもいよいよ見放されるのかな。」

と、また一人が、しみじみと、眼鏡をはずして、浴衣の袂たもとで拭き初めた。

と、また新来の若い中脊の背広の紳士が、その台の方へ行つてしきりに二つのレシーバーを耳に嵌はめては、針を動かして見たり、^{かが}跼かんだり、透かしたりして見ていたが、それも諦めたように、耳のをはずして、カチャリと置くところを向いた。美髪のどちら

かといえ^{まるがお}ば円顔の眉の凛々しくつまつて、聡明な眼の、如何にも切れそうな態度でいい。余程^{よほど}のラジオ狂らしい。

「もういけない。ひどい無電だ。」

私はラジオはどうにも好きでない。ラジオを聴くといらいらして来る。ああ、化物じみた、非音楽的の非人情の音響で、神経を刺戟されてはとても坐っているに堪えられないのだ。一つには私が文明化された電気というものとあまりに交渉のない生活をして来たせいかも知れぬ。この四、五年こそ電燈の下で創作もしているが、この十五年来、ほとんど縁がなかった。いや、ずっと以前にも、そうだ、明治三十八、九年の早稲田時代にも、私たちは下宿から下宿へ引越車の後を躓^ついてゆく時にも、ニツケル製のラン

プを片手に捧げて、とぼりとぼりと歩いたものだ。大正の一、二年にも相州の三崎ではランプであつた。小笠原では無論のこと。

その後葛飾でも初めはそうだつたし、小田原へ移つてからも、二、

三年は煤すすけランプの油煙くさい臭気をいつでも徹夜の暁には嗅がされた。それに電話は身ぶるいするほど嫌いだし、田舎に引き籠

つてからは、あの雑ざつと鬧する東京の電車にはとても飛び乗れそう

にない。ラジオ流行の時節にも到底救われない旧人だと見えて、

酒の座などで、いきなり、ワアワアワアと唸られると、それこそ

カツと疝かんしやく癪やくが起つて来る。何で周囲に当り散らすのかわから

ぬ立腹が、たちまち私の眼先を真っ暗にしてしまう。それがまた、

地球外の不快な何かの囂ごうごうおん々音らしい無電の妨害までが挟まつては、

まるで悪魔の洞窟にでも堕ちたような気がする。見放されてこそ
仕合せだと思うのだ。だが、日本内地からいよいよ私は離れつつ
あるのだ。それを思うとまた、頼りない郷愁も湧く。

「や、活動が初まったな。」

総立ちに出て見ると、もう、左舷の甲板は観客でいっぱいにな
っている。自分の船室への通路も全く塞がれてしまった。それよ
りか、丸窓もはいり口も燈ひが消されて、ほの青い光の中に、密集
した低い高い黒い頭の壁際になってしまっていた。

で、私もその前に踏かんでしまう。

チカチカチカチカ、コチコチコチコチ、パツとまた幕面が白く
明あつて見出しの円が出る。思いがけない樺太風景である。

「や、にしん鯨だ。すばらしいすばらしい。」

現れたる青い画面には澆刺とした鯨の数千数万本が翻る。小蒸汽とモオタア船の甲板である。日光、漁夫、モリ、舷側の飛沫。

影、影、影、光、光、光。

鯨だ、眼だ、腹だ、尻尾だ、なだれ雪崩だ、そうなだれ総雪崩だ。や。

密集、重積、氾濫、迷眩、混乱。

帆だ、帆だ、帆だ、

運搬、駛走、海洋、卷雲。煙、煙、煙。

と、砕氷船。

「大きいぞ。」と声がかかる。

と、たちまち、船影は消えて、一面の氷結した極寒の海峡が真

白く、白く、暗い影の底から遙かに遙かに光る。輝く。寒い寒い雲だ。あつ、樺太だ、確かに。

と、来た来た、氷を蹴^け砕^{くだ}き蹴^け砕^{くだ}き、さっきの碎氷船が。
ピー。

あつと、一同が振り向くと、それは白髪の白い支那服のタートル爺さんだ。吹きも吹いたり。とてつもない鋭い口笛だ。「あつはつはあ。」「ヤハイハイ。」

パツパツパツ。「大^{おお}泊^{どまり}の光景でござい。」

雪、雪、雪、煙突、倉庫、店看板、防寒帽子、毛ごろも、手袋、
が^はんじき、橇^{そり}、橇、橇。スキーだ。スキーだ。

駛^はる駛る駛る、樺太犬が、一匹二匹三匹、五匹六匹、二列だ。

パルプだ。突進、突進、突進。

と、牛肉だ、肉塊だ、犬だ、頭だ、うおうおつうおうおつ、頭、頭、頭、口、口、口、口、や、舌、舌、舌。

食慾だ。争鬪だ。血だ、血だ、血だ。

「氷上の魚獲。」

静かな月光、声のない声。雪白の幌ほろ内川ないの氷上に、ただひとつ穿うがたれたばかりの黒い穴。

ついと、こちらを見て笑ったギリヤアク土人の顔、しよぼしよぼの眼。毛皮の帽子。

や、また、一人、二人、三人。

砕く砕く。一心に、懸命に、こつこつこつこつ。

振り上げた手、手、手。

跳ねた。水だ。や、魚だ。うお。魚だ。魚だ。

黒、黒、黒、穴、穴、穴、穴、穴。

「馴鹿。トナカイ」

飛躍、飛躍、

角つの、角、角、

雪だ。パツ。「今晚はこれきり。」

ほつと、みんなが吐息をついた。

そうだそうだ。これから今夜にも宗谷海峡そうやを過ぎるであろう。

その先は韃鞅だつたん海。

*

「今夜は妙に湿っぽいじゃないか。」

「うむ、僕もどうも工合がわるい。あの、それ、いつか煽風機を
かけっぱなしで寝たことがあるだろう。あれからのらしいのだ。

咽喉が痛くて、悪寒がする。これはどうもいけない。」

「寝たまえ。今から病気だと大変だよ。お、いい薬がある。」

私は立つて黒皮のケースを取り出して来る。

「独逸製の薬品だがね。バイエルアスピリンというんだ。こうい
う時はありがたいね。」

「そりやいい、貰って見るかな。」

「そうしたまえ。それから王様の寝台は君にゆずるよ。交代だ。」

「しめた。俺も王様になるかな。あつはつは。」

「ははは、その元気があれば大丈夫。じゃあ寝たまえ。僕は少し仕事をしよう。何だか、やっぱり弟の方が気になる。とにかく

「桐の花」だけは済まそう。」

「そうだな。そうしてくれるとありがたいな。僕も申訳がたつ。」

じゃあということになって、一人は別室の廁かわやへゆく。一人は談話室のテエブルを引き寄せる。

卓上には、水芋のような、青い縞入りの葉が大きいのと小さいのと二枚。南洋植物の一鉢である。電燈の光も静かである。

「おおい、おおい、ボーイ。げっぷ、うえっぷ、げっ。」

ひよろひよると、車輛会社が、セルの着流しで。

「や、御免。御勉強ですか。これはお邪魔で。」

困ったと思つたが、そうもいえず、

「や、まあ、おかけなさい。」

「へえ、御邪魔なら、どうも失礼で。——帰りましょかな。」

「まあ、いいさ。」

「坐りましょかな。」

「どちらでも。」

「どちらでもとはおひどいな。そのなア、支那服の一件じやで、夕方、申しとききましたろが。お恨みに存じ申すと、面目がつぶれた。わしの一分いちぶんが相立たん。おおい、ボーイ。そこできつとし

返しにまいると。なア、そうでしたろがな。いけませんかな。げえつぷ、うう。」

「やりましたね。また。」

「へえ、どうもなア、いやにその浪の音がな。どもならんというておりますわい。」

「ははあ、弱ったね、それじゃ。」

「弱りやしませんがな。支那服のし返しじゃ。飲みましょかいな。おおい、ボーイ。」

ほんとボーイが飛び込んだ。

「抜け、P公。先生、これはわしの子分だな。いい男でしょうがな。おおい、抜け、コップを三つ持って来おい。」

「持ってまいっております。」

「そうかあ。えらい奴じやのう。注^つげ。」

「へ、お注ぎいたしてあります。」

「やああ、これはどうも恐れ入る。よしよし。おつとつとうと。」

「君はSさんの付きかい。」と私はボーイの方を見た。

「は、そうであります。」

「軍隊式だね。」

「へ。」

実直そうな、それでなかなか^{はしっこ}伶俐^{はしっこ}そうだ。まだ二十二、三だ
ろう。小綺麗でいい。知識的な眼もしている。

「これはな、先生。わしの子分じや。国のものでな、P公、うう、

P公と申す。先生にお願いがあるそうじやで、わし、引つ張つて来申した。」

「どんなことかね。」と私も笑つた。

P公は、「は。」といつて、チラとSさんの方を見た。

「申し上げ。なんで黙つておるのじやな。よし、わしがいうてやる。ええ、何かひとつ書いておもらい申したい。そうじやろ、何か書いて。」

「は。」と直立不動で、ニツケルのお盆を持って、白服の詰襟である。髪を立てて撫で上げている。

「持つておいで、短冊でも、明日でいいだろう。」

「は。小樽で買つてあります。」と、ありがとうとはいえないで、

頭を垂れた。

「そこでと、吉植さんは、おいでならんのかな。吉植さん。」

「吉植君は風邪で弱ってますよ。」

と、「やああ。」と寢室の方から、我が庄亮が浴衣の胸をはだけて、ぬつと坊さん頭を突き出した。ちよつと此方こちらを見て眉を顰しかめたが、何思つたか、ついと出て来て、私の傍に腰を下ろした。

「どうもそのね、北原君は已やむを得ない仕事があつて忙しいんで、困つてる。麦酒は明日あしたにしてもらえんかね。」

「これは御挨拶、痛み入る。しかしじや、先生はよろしい、飲もうというてござるじやて、ようござりましようがな。お邪魔ならおいとま申す。それは失礼。だがな、どもならんそうじやて、ど

もならん。」

「浪の音だそうだよ。」と私はまた笑った。

「ええ、浪の音。そうじゃ、あつはつは。いやにその。」

「まあいい。君は寝ていたまえ。障るとわるい。」

私はこれはやはりどもならんと思つたので、麦酒のコップを執りあげた。

「困るなア、それではね。僕がお付き合ひしよう。よし、かまわぬ。さあ飲むぞ飲むぞ。」

「これはありがたい。夜あかしじゃ。」

「夜あかしや困るよ。」

「あつはつはあはあ、そりや困る。」と庄亮が両手で頭を引つかか擁かか

える。やああとその上で手先きを揉み上げる。

「や、Sさん、何処どくさん行かしたかと思つとつた。此処こけえ来とらし
たたい。」とY君だ。はいるとどかりとソファの端に腰を据えた。
愛嬌のある円顔の髭をちよつとひねつて、仰向いて目を細めた。
もう赤くなつてゐる。

「どうも。」と眉を顰めるとまた、赤つ面を振つて、

「さびしゆうしてならんけん。誰だりも彼かりもぐうぐういびき軒げんばかりかいと
つて、始末におえん。甲板さん出て見たつちや、真つ暗闇で、歩
けもせん。星も出とらん。雨でん降りまっしゆごたる。」

「どもならんというておりますわいだらう。Sさん。」

「へ、浪の音がな。その浪。」

「もうよし、飲もう飲もう。吉植君、君は王様の寝台だ。」私も観念した。だが、何か私とてもまんざら寂しくないことはない。キリキリキリキリと帆綱の錨かんも鳴っている。

「や、僕も少しやつつけよう。飲むよ。飲むよ。」

そこで、三本にまた追加が五本。さかな肴は鯨の鼻骨に野菜の辛子漬。キリキリキリと帆綱の錨。

浪の音がな。浪の音。

*

「おや、車輛会社はどうした。」

と、私は南洋植物の青縞の葉の下を透かした。

「や、行はってか去した。オートバイででん逃げ出でえたそな。」

「P公、P公、や、彼奴あいつも行去はってたかな。」

「車輛会社にやかなわん。護謨輪ゴムでん何でんチャアンと持つとる。

はっはっは。」

「おや、吉植もいないじゃないか。寝たかな。」

「寝ましたくさい。弱つとらした。」

「弱るなア、僕も、寝ようかな。」

「でけん、でけん。行いたて見まつしゆう。まだ誰だりか起きとるか知

れん。」

「ぐうぐういびき鼾かいとつたというじゃないか。」

「うん、あん時やぐうぐう云いよった。ぼってんが、もう誰だりか醒めとろ。車輛会社もパンクしとらすか知れんくさい。行いたて見いう行いたて見いう。」

「行つてもいい。だが、ちよつと待ちたまえ。」

私ももうかなりに酔っていた。ふらふらする足取りで、隔ての青いカーテンを寄せると、いわゆる王様の大きい寝台に近づいて見た。この寝室は全く広くて贅沢な、それで清すがすが々すがしいいい室へやである。向うは浴室との戸ドアになっていて、その横の壁にマホガニー色の装飾を凝らした鏡付きの古風な化粧台があつて、それに相当の空間を置いて、相對した壁に洋銀のダブルベッドが備えつけられ、それには前面と裾とに卵色の薄いカーテンが掛つている。天

井も同じ絹布で張つて、壁には網棚もある。平時は関釜連絡船で、このベッドには朝鮮総督とか師団長とか最長官の用に供せられるのだそうである。私は幾晩もこの白いシーツの上に白毛布を包んだ白いカバーを引っかけて眠つた。今夜は親友が寝ている。

私はそつと帷とぼりを開いて差し覗いて見た。すやすやと庄亮が眠っている。少し斜めに壁の方に身体をねじ曲げ気味に片手枕で、毛布を蹴ぬいて、何かしら弱々しそうな息づかいである。

私は白カバーの毛布をはだけた彼の浴衣の胸まで引き上げて、それから、そうつと、その二分刈りの坊主頭の汗じみた額の上へと私の左の手を当てて見た。熱はない。が、私の掌てのひらには、その時、私の友の薄い眉毛の幽かなむずがゆさが染みついた。

私はまた差し覗いた。何という無雑作な酔態だろう、この眠り
ぎまであろう。

私は、ふらふらと、その足元に匍い上った。そうして向き直る
と、両足をブランブランさせた。

眠ねている、眠ねている、眠ねています。

酔よってる、酔よってる、酔よってます。

「先生、何なんしとんなはる。行きいまつせんか。先生。」

「おつ、ちよつと待ちたまい、眠ねってるよ、吉植が。」

「よか、三等へ行こう。あつちも眠ねてしまおうじゃいわからん。」

「行こう行こう。」と私はそつと寝台を飛び下りると、談話室を抜けた。

「吉植はよく眠っているよ。なんだか俺は泣き出しそうだよ、よう、おい。」

ザザザザ、ザアツと浪が舷側を撃った。外は暗い。キリキリキリと帆綱の環かんが鳴る。

「先生。」といきなりYがかじりついて来た。遅ましい大きい両手だ。

「先生。わしも泣く。わしは、わしは子供を棄てて来た。見殺しにして来た。どうなつとるじやいわからん。わしが出る時なア、もう危篤じやった。とても助かつとるめえ。行かにやならん、仕

方んなか。死ぬなら死ねちいうて出て来た。葬式は嬪かかアに頼たぬうで来た。もう死んどろ、死んどるかも知れん。わしはこの胸ん中が張り裂きゆごたる。先生、泣ねえたつちやよかろ。」

「うむ、泣ねえたつちやよかぞ。泣け泣け、おれにつかまれ。」
きようきようと、何かが翔る。

*

「もうよし、君のところへ行こう。」

「ええ、行こう行こう。」

「や、ちよつと待て、一等の船室ケビンを廻つて見よう。みんなが眠ねた

かどうか見て来よう。」

「よかよか、人ん事心配せんちやよか、金持ちどもは卑俗くしな
ん、構いなはらんがよかたい。」

「だが、心配だよ。ちよつと覗いて見よう。さあ手を握れ。一緒
に行こう。」

眠ねている、眠ねている、眠ねています。

酔よってる、酔よってる、酔よってます。

え、おい、歌おう歌おう。」

「眠ねているですかい。」

眠っている、眠っている、眠とらすたい。か。
 酔っぱらって、酔っぱらって、梯子はしごぎけ酒か。」

「おい、

眠ねてない、眠ねてない、眠ねやしない。
 醒めてる、醒めてる、醒めてます。

「こう聞えないかい。眠っている、眠っているが。」
 「歌うて見なはれ、もう一度、きこえるかも知れん。うむ、きこ

えるような気もしますたい。」

眠っている、眠っている、眠っています。

酔ってる、酔ってる、酔ってます。

「おや、まだ起きてるようだな。いや、風かい。」

私たちはもう、一等食堂の前の階段を下りかけていた。幾度か二人はつんのめりそうになった。両腕を互の首根つ子に廻わしてお互にまた引きずったり、凭れもたかかったりしていた。

「お、よく眠っている。」

私はすっかり燈ひを消した暗い暗い寢室の間の廊下をそつと差し

覗いた。そうして、盗^{ぬすびと}人のように足音をひそめた。

「叱^しつ。」

「Hさん夫婦は眠てますかい。」

「莫迦。叱^しつ。」

その長い両側につぎつぎと並んだ浅葱の重いカーテンは何れもしつとりと垂れ下つて、そよとの音もしなかつた。すやすやとしたいい寝息がした。

「よく眠ている。万歳。あつ、誰だか寝返りした。そうつと、そうつと、いいか、すり抜けるんだ。そうつと。」

私たちはまた肩を組んで甲板へ出た。

「今度は二等室だ。おい。」

「もうよかる。もう起きとらん。」

「眠ていりや幸さいわいだ。何だか、それでも寂しいな。行こう行こう。」

私たちはまた船尾の方へ廻った。

階段を下りる。と、突差とっさに白い白い電灯の光がパツと眼に当たった。私たちはくらくらした。

危からうく転びそうになって、私たちはやっと私たちの身体からだを階段の欄干てすりに支えた。そうしておずおずと下を差し覗いた。

其処は通路を中にした広い広い雑居の寝室であった。通路には紅い緒の草履や、スリッパが脱ぎ散らしてあつた。

両側の雑然たる寝姿、それは白い蒲団は両側に整列しているが、足元や枕元には旅行案内、地図、トランク、雑囊、水筒、ゲエト

ル、浴衣、洋杖ステッキ、蝙蝠傘こうもりがさ、麦藁帽などがかなりに、ほうりつ放しになつていた。

老いたるもの、若きもの、更に稚おきなきもの、商人、学生、教員、画家、牧畜家、官吏、玄人筋らしい老婆と娘、各種の中流階級の人々が、仰向き、横向き、斜め向き、手を曲げ、足を蹴ぬき、潜くぐまり、反り出し、齒をむき、眼をあけ、品よく、或は露わに、卑しく、または素直に子供のように眠りこけていた。

「よく眠っている。よく眠っている。」

「あつ、起きた。」

と、左側の中央部に、互に蒲団をきつちりと引きつけて、そうして、近々と向き合つて寝ていた一組の若い夫妻の、その妻君の

方が、ふっと眼を開けて、驚いたようにくるりと背を向けてしまった。

「あ。」

といったまま、私は階段を駈けあがった。

「いけない、いけない。早く早く。」

私たちはまた暗い甲板の上を歩いていった。

「や、無線電信が起きている。だな。じゃないかな。そうつとそうつと。」

幽かな、それは幽かな金属性の音律が、げきじゃく 闇 寂とした夜ふけ

の暗黒の中に、コチコチとカチカチと、それは遙かなびやつきんこう 白金光

の小都会の何かの点音のように、絶えては続き、続きでは絶え絶

えしていた。だが、技師も今は眠っているはずだし、無電でもあ
るまい。それでは何の音であろう。幽界からの音いんしん信でも、何か
が触知するののか。何か生きた者が、眼を開いてる者が、紙か、ペ
ンか、受信機か、卓テエブル子か、椅子かの中にいる。

「あ、きこえる、あ、きこえる。」

＊

「おおい、誰だつでん起きろ、おおい、先生が来た来た。来こらしたぞ
。」

船首へまた大迂回して、測量室の下まで来たところで、Yはい

きなり大声を挙げて、三等船室の階段を駆け下りた。

「居る、居る、パンクしとる。先生、車輛会社が居りますたい。

早うござり。」

成程、車輛会社は、三つ四つ並べた食卓^{テーブル}の、とある隅つこと後ろの白ペンキの壁にもたれて、ぐにやりと、全くのところパンクしている。

「どうした。Sさん。」

「ううむ、どもならん。」

「浪の音、ソリヤ、どっこい、浪の音ウか。どんこつ、おいか。」

「ううむ、お恨み申すじゃよ。」

「はっはっはっ、P公はどげんどんしたかな。P公。」

向うつ側かわの食卓テエブルの一つに、白服の詰襟のボーイ連、P・Q・Rが腰かけたままの突つ伏し姿で、どれもが一同にひっそりと、声ひとつない。

三等の食堂は一段上になつていたので、下の雑居室は真上からそのままみおろ瞰望せるのである。

「おおい、起きろ。や、起きとんな。しめた。先生が来た。さあ起きた。」

と、また、

「医専、慶応、早稲田ア、二高、日本歯科、青年団、写真班、鹿児島ア起きろ。」

と、起きた起きた。二等よりもより雑然たる諸相の中から、湧

き出る、溢れ出る、転がり出る、飛び出る、それらの如く、蠢しゅん
々しゅんとして、哀々として、莞爾かんじとして、突兀とつこつとして、二人三人
五人の青年たちがむくりむくりと起き上つて来た。

「やあ。」

「やあ。」

「やあ。」

「やあ。」

「ほう。」

P・Q・R、もまた叩き起されてしまった。

「酒だ、酒だ、やろう、おい。やりまっしゅう、先生、万歳だ。」

「やろう、やろう。」

祝杯。

「T君、君たちは起きていたのか。」

「え、なに寝てはいたんです。こんな晩にはしようがないんですからね。でもねむってはいなかつたんです。助かった。」

「僕も何ですよ、ねむったふりしていたんだ、つまらないんですからね。」

「俺だって、そうだ。Sさんのパンクだって知ってらあ。P公が弱りはてていたぜ。」

「そうだ、そうだ、どもならんどもならんだらう。」

「浪の音ウさ。ふっ。」

「や、まあ、いい、それじゃまあ飲もうや。」

「有難い。」

「歌おう、歌おう、や、やれ。」

関の五本松、一本伐^きりや四本、

「や、誰だ。」と下を。

「おうい、こつちだ、こつちだ。」

「起きて来い。」

「行っていいか。」

「おいで、おいで。」

また一人が、むくりと飛び起きた。

「出よう出よう、ね、諸君、僕のところの甲板に来たまえ。ここは安眠妨害だよ。さあ、出よう。」

出ましよう出ましようで、一同がどかどかと階段を駆け上る。

それ、^{ビール}麦酒だ、コップだ、いいか。

でかんしよ、でかんしよと、^{やまが}山家の猿は、ヨイヨイ。花のお

江戸で芝居する。

ヨウイヨウイ、でつかんしよ。

でかんしよ、でかんしよで、半年や暮らす、ヨイヨイ、あとの半年や寝て暮らす。

ヨウイヨウイ、でつかんしよ。

青年はいい。活気そのものである。風の音も、大海の浪の響も、今は彼らの感興を煽るばかりに、暗く暗く輝いて来た。

「さあ、ここだ。とうとう還つて来た。そこで、そこらの籐椅子

をすつかり集めた。そうだ。一列に、みんなくつつけて。よし、さあ、歌った、歌った。」

一同はこれに勢を得て、歌ったも歌ったり、「春爛漫」から「都の西北」「春は春は」のボート歌、「城ヶ島の雨」「あわて床屋」「かやの木山」「りすりす小栗鼠」「煙草のめのめ」「さすらいの唄」みんなが知ってる限りの校歌民謡童謡流行唄は一つも残さず唄い終つてしまった。

「ああ、もう知らねえ。」

「草臥くたぶれてしまった。」

「寝ようや。もう。」

「万歳。」

どっこいしよと腰を叩く奴、ううむと唸る、ああと一人が両手を高く差し上げて欠伸あくびをする、眼をこしこしとこするのもある。「泣きたくなつたよ、おい。」と、また一人が駈け出してしまつた。

「じゃあ、これで解散だ。君が代君が代。」

流石は、そこで、肅として、並んで唱えた。

ほろほろと涙が滾こぼれ落ちそうになる。

「万歳さよなら。」

「万歳さよなら。」

「諸君。また明日だ、さよなら、さよなら。」

後はしんとした。

キリキリキリと帆綱の鑲^{かん}が鳴る。大海の暗黒の、風の、浪の響が、そうそうとして、急に凄く高まった。

「先生、わし、先生の裾の方へ泊めてもらいますばい。よかる。」
Yだけは跡に一人残った。そうして談話室までまたはいり込んできた。

「泊る。泊れ。だが、どうかな、君は九州つぼうだからな。」

「莫迦いいなさい。」

「俺はまだ美少年だし。」

「ふつ。なんちゆうこつじやい。」

「いうにいわれぬ、その。」

「へつ。莫迦いいなさい。わしあ、そげん卑俗^{げさ}きこつ知らん。」

そんなら泊れと、私はソファの一つに寝て毛布を引つかぶる。

Yは鍵の手なりに、私の足へその毛むくじやらの両足を向けると、すぐに、そのまま、ぐうぐうと深い鼾をかき出した。

私もまたそれなりぐつつすと眠ねい入いつたらしい。

ふつと、眼を醒ますと、まだ夜は暗かった。足元を見ると、いつの間にかYの姿は掻き消えていた。

ああ、浪の音だ。

宗谷海峡も過ぎたであろう。もう夜が明ければ樺太だが。

キリキリキリキリと帆綱の鏝。

空はまだ暗い暗い暗い。

おおいおおいと何やらが

海の底から呼んでます。

どうせ、くらやみ、北の海、
おおいおおいで夜もふける。

安別

薩^{サガ}哈^{レン}噠州。ピレオ 北方二里

アレキサンドロフスク 北方約三十里

海岸の白木の角標にはこう記してあった。日露境界第四方とまた一面に大書してあった。

十三日の午前のことである。どうにもひどい強雨であった。

*

本来からいえば、小樽を出て翌朝、私たちは樺太西海岸の本斗ほんどに上陸して、真岡まおかより野田のだへ汽車で行き、一晩泊つて、それからまた海路を国境の安別あんべつまで続航するはずであつた。ところが、ちようど摂政宮殿下の行ぎようけい啓けいと差さしあい合あひになるので、急に模様換えになつて、そのまま北へ北へと直航することとなつた。その十二日は全く薄らさみしい日であつた。右舷にはいつでも鮮かな緑と寒い黒くろとど楸とどの丘陵とが眺められて、何となく樺太らしい物珍らしさが感じられたものの、いよいよ北緯四十五度の線を越したかと思つと、曇天の日の円までが、ただ白くぼやけて寒ざむと、頼りなく仰がれても来た。海は黒く、滑らかな大きいうねりが続いているばかり、やっぱし明るいようでも輝きはしなかつた。それ

に午ひる近くになってぽつりぽつりと雨さえばらつき出すと、風までが、これに加わって、どうにも怪しい雲行きと変つて来た。

「今夜はともするとひどい時化しけになりますよ。」

すれちがいに私に挨拶した事務長の言葉がこれであつた。

「明日あしたはうまく上陸できましようかね。」

「さあ、どうも、ちとむつかしそうですね。ここの海岸線はかなり荒いようですからね。」

そうして帽を一寸脱いで、向うヘスツスと行つてしまった。

これまで、私たちはあまりに恵まれた航海を楽しみ過ぎて来た。

少しくらいは時化にでも遭つた方が面白そうな氣もしたが、夜に入つていよいよ本ぶりになると、誰もが言い合わせたように晩飯

もそこそこに済ますと、早くからてんでの船室ケビンに引っ込んでしまつた。その中で一人、お能の笛を吹いている音色がしていたが、それもすぐに止んでしまつた。

終夜が波の響と風の音と、それに雑多の——それは帆檣ほぼしらに降る、船室の屋根の上じようかんばん甲板てすりに降る、吊ボートに降る、下の甲板に降る、通風筒に吹きつける、欄干てすりに降る、——雨の音であつた。船の揺れはますます激しく、私のいわゆる王様のベッドの洋銀の欄干、網棚、カーテンの鍔かんなどは、しつきりなく音を立てて鳴つた。

「おやおや。」と私は思った。だが、いつのまにかぐつすりと眠入ってしまったものらしい。夜が明けると、早くから飛び起きて、

すぐにメリヤスの襯衣シヤツに浴衣で、ドアを押して見たが、颯さつと来る雨霧に慌てて首をすつ込ますと、早速さそくにレインコートを引つかぶつてしまった。

「なるほど、樺太は寒いな。」と。

オートミルとフライエッグスと一、二杯の珈琲コーヒー。どうにも洋式の朝飯は日本人にはしっくりゆかないものらしい。そこで、その朝は船室ケビンに籠りきりで、番茶に梅干で温まると、ないしよで味噌汁に飯をあつらえた。酒の翌朝はどうしても味噌汁に限るのだ。白い飯からはほかほかと湯気が立つ。

「どうにもこれがいい。」

「うむ。やっぱりな。」

私と庄亮とは、自分たちの談話室のソファに凭りかかって、それこそ水入らずで、また沢庵たくあんをかりかり噛んだ。

「咽喉はどうだね。」

「まだどうもいけない。妙にそのお、ここが痛んでね。」と反対にぼんの凹くぼを片手で叩いて見せた。

「湿布でもするといいいんだがな。」

「いや、僕には按摩あんまがいちばん利くんだがね。」

「あのアスピリンはどうだ。」

「やあ、あれも君のをもう半分もいただいたんだがね。熱は下つたようだが、腹の工合がどうもよくない。」

「西洋の薬はそうしたものだよ。局部的なんだからね。利くには

利くんだが、何かの反応が外へ禍する。いわゆる全科的じゃないんだね。だから僕はそうこんもくひ草根木皮主義だ。漢法の方が東洋人には適しているよ。」

「そうかなあ。」

「そうだと思うね。煎薬というものは微妙なものだよ。たとえば風邪の薬にしたって胃の薬も腸の薬も適度につまんで入れるし、十種も二十種も調合して、それは丹念に刻み込むんだからね。あれがまた同じ処法でも、やはりコツがあるそうだよ。極めて精神的なもので、それは創作的なものだそうだよ。芸術にしたところで、何といつても東洋精神に限るよ。」

「じつそうかんにゆう実相観入かい。」

「近頃の歌壇の慣用語でいえば、そうさ。だが、写生の語義を伝神とか実相観入とかに転用するのはちよつと変だね。写生は普遍化された語義としてはやはり単なる写生だからね。子規の写生にしてからが、空想味の深い浪漫的ロマンチックな詩歌に対しての写生説だったんだからね。一種の反抗運動として見るべきだろう。写生文にしてからがそうだ。ありのままの平面描写ということになる。南宗画などの象徴的省略とは違う。もし写生という言葉を文字どおりに生命を写すと解して、伝神にまで深めて来るとすると、写真でも写実でも、おなじ意味にとつても差さしつかえ支つかえないということになるね。だが、写真といえは写真器械によつて撮影され現像されたもの、ハイカラにいえば印画のことだろう。写実といえはまた

ゾラ以降の観法だろう。応挙あたりの精緻な写実もそうだ。だから写生ということも語義としては在来の写生であるはずだ。実相観入にまで及ぼすくらいなら、もつと外の適当な言葉を持って来るのが正しいだろう。殊に写生の語義を内観にまで利用するのは考えものだよ。サンボリズムとリアリズムとは楯の両面だからね。それも主客円融ということは渾然として境涯的のものであつて、写生は ひつきょう 畢 寛 写生に過ぎないからね。実感に即する抒情までも写生とするのは、少々 けんきょうふかい 牽強附会じゃないかな。そんなこといつたらまごころでさえ歌つたものは何でも写生歌ということになるね。だが、芸術上の語彙には一々特殊の色も にお 香いもあり、習慣もあるのだから、伝統的に意義づけられ差別されたものは在来の

意義や差別をおとなく受け継いで置いた方が、混雑しなくてよさそうに思うね。それにむしろ東洋の芸術精神は実を徹して虚に放ったところにあるのだからね。隠約いんやくとか省筆しょうひつとかだ。で、実相の観入といったところで、単なる平面描写の写生とは少くとも格段があるのだからね。もつと立体的な内観的な象徴的なものだからね。ところで、話はまた草根木皮に還るよ。聴くかい。」

「あつはつは、こりやおもしろい。聴くよお。」と庄亮は、両肩から首を振って、豪傑笑いをすると、両手を蠅のごとくに頭の上で揉もみ上げた。

「いったい、この頃は芸術でも教育でも何でも彼かでもあまりに專科的分業的になり過ぎている。で、いよいよ偏狭になり不統一に

なりやしないかと思うね。我々にしたところで、詩人とか、歌人とか、やれ民謡作家だとか、童謡詩人だとか、一面からばかり見て、手っ取り早く何かに片づけられてしまおうが、これは少々くすぐ擦つたいものだな。何故一個の芸術家と見ないのかな。とにかく迷惑至極なものだよ。人体からいっても解剖的にばかり見るのは近代医学の悪弊だな。だから肥厚性鼻炎の切開をすると肺や肋膜を悪くしたり、——それはどちらに基因があるかわからないがね——感冒の薬を飲めば胃をこわしたりする。体内の各種の機関は凡てすべが連絡なしには作用しないのだからね。病源といったところで、それからそれへと繰ってゆかねば、一局部の兆候だけですぐに極めてかかるのは飛んだことになりやしないか。漢法では全的に見

るのだ。むしろ直覚的にだね。僕の知っているH老先生などは、患者の顔色を見ただけで投薬してしまう。病気の器が面前にあるのだ、何で手を執って診る必要があるというんだ。理窟だね。そういうえばそうに違いないさ。それで百発百中だから驚くさ。その先生は観相もやるし、仏典にも通じている、易学などは大家だというんだがね。人体を宇宙と観ずるといふ漢法医の道は術でなくてやはり道であるのだろう。単なる学理でなくて、創造的な直感的なものだろう。つまり心で観るのだ。」

「歌とおんなじだね。」

「そうだ。実相観入だね。あははは。そこでその先生は自分でコツコツと刻むのだ。一人前の薬を三十分もかかって彼かれこれ是と調査

するのだね。僕らが詩や歌を作る時のように、コツコツとやっている。その事に遊びほれるのだ。色々の草や木の香いを嗅ぎ分けるがらだよ。そこがうれしいじゃないか。いったい感冒の薬は杏きよういんすい仁水いんすいが何グラムで何が何グラム、一日三回分服といった風に、すつきりと極きめてもかかれまいじゃないか。もつと薬剤の配合は靈感的なものだと思ふね。そこで面白いのは、こういう青年があるんだよ。もと僕の家にいたのだが、外国語学校の英文科を苦学して出ると、語学の先生になったところで莫ば迦か莫ば迦かしい、漢法医になるというんだ。今時には変っているだろう。学生時代にすっかり日先生に傾倒してしまったのだ。そこで易などに凝り初めて算木さんぎを寄せたり筮ぜい竹ちくなどをジャラジャラやり出した。や、なか

なか当るよ。」

「あ、あれか。僕も知ってる。それ、君のところで何時か逢った、あのT君だろう。ありや、うまく当てたよ。副業線が莫迦に発達しているから、家業は継げなさそうだとか、結局親父の腰巾こしぎんちや著くだとやったね。どうも、やあ、閉口しちゃったよ。」

「そうそう。あの時は君も参ったようだったね。」

「ところで、何かい、T君は今どうしている。」

「台北へ行っている。中学の英語の先生さ。止むを得ない事情があつてね。だが、すぐに帰つて来るだろう。H先生の内弟子に住み込む覚悟でいるんだからね。何でも台北で病気をした時、総督府の病院へは行かないで、ないしよで土人の医者のところへ礼を

厚うして診てもらいに行っていたとかで、同僚たちからすっかり愛想をつかされてしまったらしい。いや、みんなが呆れてしまつて、旧弊も旧弊、頑^{がんく}愚度すべからずと笑われていると消息して来た。それがまだ二十三、四の青年だからね。おもしろい。だから構わない、やれやれとこちらも激励しているのさ。ところで僕の方もこの頃はすっかり草根木皮で、ぷんぷんさしてる。薬でも日本酒のようにお爛をした方がほんとうの薬らしいからね。ピーターミンAがどうのBがどうのものもあるものかい。ほうれん草のひたしでも食べたがずつといいんだぜ。」

「そりや、こつちでいう事だよ。俺んところの蒜^{んにく}肉や大根のうまさはどうだ。君はいつたい美食すぎるよ。あんなに肉ばかり食

べては危険だぜ。胃癌だとか糖尿病だとか、おしまいはきまつてる。」

「そりゃ、君のところの野菜はすばらしいさ。印旛沼は格別だよ。ところで、僕にしたってこの頃はすっかり調味法が変ったね。ほとんど生のままの味で煮出している。それにだんだん菜食党になつて来た。そりゃ年齢にもよるだろうが、やはり東洋精神への還元だね。」

「なるほど、そこで水墨集ができたわけかね。」

「僕ばかりじゃないよ。画の方だつて、だんだん還元して来るからおもしろい。とにかく東洋は東洋だよ。真の象徴芸術は東洋にあると思うね。」

「ウイスキーより、俺あ日本酒だ。」

「だろう。だから芭蕉の句なぞが、毛唐けとうにわかってたまるものか。

童謡だってほんとうは境涯のものだよ。極めて単純化された。むしろ禅でなければなるまいと思うね。実相はあくまで深く観みての上のことだよ。ステイヴンソンとかウオタア・デ・ラアメエヤだとか、大したものではあるまいじゃないか。殊にステイヴンソンの童謡などは常識的で、大人が推測した童心らしいものであって、ひっきょう

畢 竟 の境涯的の童心じゃない。毛唐でさえあれば新進作家だ

ろうとヘボ詩人だろうと忽たちまちにどえらい偶像にしてしまうのは悪い癖だ。

日本語が世界語でありさえしたら、古来からの日本の詩歌人たちの方がどれだけ偉らいかわからないと思うね。よくは知

らないけれども。民謡にしたところで、「外国の牧歌が素朴で快活だ、日本のは消極的でお座敷趣味だ。淫蕩だ。享樂的で無智だ。」「なぞと、すぐに日本を打ち消してしまいたがる人があるが、それは記紀から万葉、催馬樂さいばら、田樂、諸国の地謡じうたというものを真には研究して見ないからだ。すばらしいぜ、田歌たうたなぞは。でなくとも、今の信州その他の青年たちが作る短歌はどうだ。立派に歌壇の水準を出ているじゃないか。それもほとんどが耕作したり、養蚕したり、繩を編んだり、馬を追ったりしている。それぞれに自己の生活を凝視みつめている。しかも彼らの歌がただに素朴な農民の歌謡だぐらいのものでなからう。立派に短歌道の上からも教養があり鍛練も経ている。人数からいっても歌人としての価値から

見ても、恐らくこれほど高い民衆芸術は西洋の田園にはあるまい
と思うね。何故もつと日本人は日本の芸術を内省して見ないかと
齒痒はがゆくなるな。一にも西洋二にも西洋だ。それに昨今のアメリカ
化はどうだ。」

「だから、俺は印旛沼を開墾するというのだ。よかろう。やるぞ
やるぞ。」

と、「安別だ。安別だ。」と誰か走ってゆく声がする。

「や、安別だな。」

「おお、そうか。着いたな。」

驚いて、二人は立ち上った。

激しい雨の音と、波の響だ。

*

鮮かな緑の低い丘陵、そのところどころの黒と立枯れのうそ寒いとど松林、それだけの眺めの下に、ぽつぽつと家が五、六戸。冬ならば、とても荒まじいであろうところの辺土である。

これが日露国境の安別かと思うと、鬼界ヶ島にでもまざまざと流されて来た感じである。

いや、それでもまだ平らかな丘の端れに白い小さな洋館が見えた。測候所でもあろう。そのまた北寄りのこれはやや小高く^{すべ}に上った傾斜面の中程に、鼠いろの天幕^{テント}が一つ角錐状に張られて

ある。

見ていても激しい荒波である。それも強雨の霧しぶきの中の浜辺で、あちこちと奔走している黒い人影までが、つきつきと吹き飛ばされそうに撓たわんでいる。

ぼう、わう、わう。

あ、犬が吼ほえてる、吼えてる。

と、小さな鈍にびいろのランチが高く低く、のめりそうに高く低く、その荒浪を乗りあげ降り下ろして来る。ぼうぼうぼうぼう。汽笛ばかりがけたたましく弾みをつけながら、横さまに倒れ倒れ起き上つて来る。と、後に曳いた大きな舢はしけに、洋服や半纏はんでんぎ著の二、三人が立って、何かしきりに帽子を振っているが、とても凄まじ

い揺れ方である。

その時、私たちは思い思いの防水用意をして、既に右舷のブリッジのそばに犇ひしひし々と詰めかけていた。

ランチは程よい距離に近づいたところで、曳綱ひきづなのロップを放すと、代って舳がひたひたと近づいて来た。巡査と村長さんらしいのが直立している。いかにも素朴な風をしている。此処にもそうした人たちが住んでいたのかと思うと、何かしら心強くなる。雨は幾分かずつ小降りになるようであるが、波のあおりはいよいよ激しくなるばかりである。ともすると、舳が舷側のブリッジの中程まで糺せり上って、ガチガチとやると、すつと墮ち込んで離れてしまう。

「そおれ、あぶないぞ。放せ、放せ。」

「やいやい、そのロップを投げろ。」

「それつ。ちえつ。駄目だ駄目だ。」

「莫迦、こつちへ寄越せ、なあんだ。あつはつは。」

それも、やつとのことで、どうにかブリッジに繋ぎ留めると、

第三班からどかどかと気早きばやの連中が降り出す。「あぶない、あぶない。」である。

と、ランチにまたロップほうを放る。ランチはまた波飛沫なみしぶきを上げ、半弧をえがいて、ぽつぽつぽつと引き返してゆく。

「万歳。」と艦上から誰やらが麦稈帽を振る。舳からは、タオルをかぶるもの、マントの頭巾に眼ばかりのもの、蝙蝠傘、ハンチ

ング、誰、誰、誰、誰、いつも見知っているそれらが一斉に「万歳。」である。弥次る、はしやぐ、手を振る、顔で笑う。

すばらしい波と雨と霧。舳は見えつ隠れつ、思わぬところに帽子の幾つかを見せてまた波の向うにずり込んでしまう。そうして割合いに早く小さくなってゆく。その間にも浜ではもう一つの団だ平んぺいが騒いでいるのだ。

「これは大変だな。命がけだな。」と笑っていると、つい傍にH夫人が小豆色あずきのコートをつけて、タオルで頬かぶりの、鼠いろの眼鏡をかけて、ちらと愛嬌笑いをした。

「や、あなたもいらつしやるのですか。驚いた。」

「ほほ、えらいでしょ。この恰好。」

「えらいな。タオルはいい。僕もかぶって見ようかな。もう一つこの上から。」

「そうなさいませよ。これ、浴室のタオルですの。」

「しめた」笑っていると、いきなりぴしやりとズボンのお尻を叩かれた。

「白秋さん、しつかりなさいよ。」

ひよいと振り返ると、旦那様のH君だ。

「やあ、しつかりしている、している。」

これには驚いてしまった。

ところで、私たちの第一班がようやく艇に乗り込んだ時には、第三班のそれらより恐らく一時間は遅れていたろう。

と見ると、もう先発の一群は黒蟻のように、北寄りの緑の斜面を、黙々と螺旋状らせんにのぼっている。角錐形の天幕テントが一つ。その上の頂ちかくまで匍はい上っている影も二、三は見えた。

「あれが国境だな。」と私は見た。

波のなだれが颯さっと頭からかぶつて来た。雨がまた勢いきおいを盛り返して来た。

*

それから、白木の角標の薩哈噠州サガレンピレオ北方二里に遭遇であったのである。

そこで、さきほどからの強雨はいくらか細めになったが、細身ステッキの洋杖蝙蝠傘をとおして、私はまったくのずぶ濡れになってしまっていた。私は黒の背広の上に薄緑のレーンコートをつけ、白の運動帽をかぶった上から、浴室用の厚いタオルをかぶり、それも吹き飛ばされないために、その首根っこを、また一つの手薄なタオルで、後ろからキツと引き締めて、首で結んで、あまりを長く垂らした、まるで白い兜を冠った川中島の信玄といった風である。

こうして私は国境安別の砂浜に立ったのであった。

上って見ると、沖から見た通りの、それは荒涼たる寒村であった。

先ず目についたのは罐詰工場らしい、ほとんど吹き曝^{さら}しのバラツクだ。大きい、犢^{こうし}ほどの樺色の樺太犬がのそりと、その前には出ていた。ざくりざくりと薄墨色の砂を踏むと、昆布や赤い大きな蟹の殻や流木の碎片や、何かの脊椎骨が雨にじつとりと濡れて、北海の漁村らしい臭気が鼻をついて来た。

とうとう国境まで来たのかと思うと、ひえびえと私は雨の湿りに顫^{ふる}えたが、また、子供のよう^ふに其処らを駈^おけ廻りたくもなつた。「や、車前草^{おおぼこ}だ。素敵素敵。」

それは樺太事前草とでもいうのだろう。すばらしく大きな葉だ。それが踏めば実に柔らかな緑をしている。砂浜から一段上ると、その車前草に縁^{こみち}どられた径^{こみち}が続く。大勢通つたのでひどい泥^ぬ濘^{かるみ}。

になつていたので、私は草の上を歩く。

「や、驚いた。馬鈴薯じゃがいもの花だな。」

内地では五、六月の薄紫の馬鈴薯の花だ。蕊しべの黄色い新鮮な花。

「や、菜の花だな。これは驚いた。」

とある漁師の家の窓からは女の子がたった一人面かおを出していた。

その前の畑には、いかにも雨に濡れた黄の菜の花が咲き群れていた。それに豌豆えんどうの花、背の低い唐黍とうきび。葱坊主ねぎぼうず。

この国土のはてに来て、この鮮かな野菜の花を見ることは。この暮春ぼしゆんと初夏との色。

私はまたびしゃびしゃと緑の上を歩いてゆく。この車前草の踏み心地は。

雨がしだいにあがりかけて来た。が、まだ横なぐりに吹きつけるものがある。

砂浜には、細い丸太の長方形の高い柵が、その雨と風との中にさびしくわびしく続いている。網小屋のようなのも目につく。私は道連れのの巡査さんに訊ねて見た。

「これは何です。」

「にしんかんば鰯乾場であります。これは廊下と申しまして、ここへ鰯を乾すのであります。」

「この小屋は。」

「これは納壺なつぼであります。網や雑具を入れるのであります。」

その外そとに大きな釜が二つずつぐらい据えっぱなしで、何れもが

激しい鯨の臭気でとろんでいた。釜の中のは鯨粕であろう。粕の上には雨が降り溜り、脂がぎらぎらと浮いている。そのにおいだ。季節はずれだし、無論そこらには鯨らしいものは影も見えないで、たまたま昆布などがヒラヒラとしていているきりであった。

からす
と鴉が飛んだ。大きな黒い鴉だ。

そろそろと汚らしい男女の童わらべどもが出て並んだ家の戸口には、軒ごとに紙製の日の丸の旗が掲げられてあつたが、それも紅が流れにじんでもうピラピラになっている。髭むじやの男の顔も、そけ髪みだの淫みだらがましい女の顔も、むさくるしい二階の窓から好奇心らしく私たちを眺めていた。それはたった一軒の旅館兼料理屋らしかった。からかみ襖かみの染点しみまでが浅ましかった。

大きい納壺の一つは戸が開けっぱなしになって、とてもすばらしい黒熊の毛皮がその形なりにぶら下っていた。その黒い黄の交った粗々しい毛並には雨霧が降っかかり、内側の白い皮までがすべすべと冷えきって何か無気味な、その納壺の奥には網が網臭く積まれ、土間には赤子を負った赤い髪目の大きな女の子が、ただむっつりと時化波しけなみの荒海を眺めている。団員の二、三はその中へずかずかとはいって行つた。吊るされた熊の毛皮がくるくると、顎あごから廻り始めた。

駐在所があり、郵便局があつた。間まを隔おいてぽつりぽつりと、それはバラック式の果敢はかないものであつた。以前に、国境守護の駐屯兵が住むために急造したという小舎こやのままであるらしかった。

東洋風の簡素なものだ。

だが、何という巨大な虎杖いたどりであつたらう。それらの小舎のうしろ、丘の崖から下の裾まで、叢生した虎杖の早くも虫がついて黄ばみかけた葉の間には、今まさに淡黄緑の花盛りであつた。それに丈の高い女郎花おみなえしに似た黄色い草花の目ざましきは。私はまた佇たち停つて、これらの初めてみる樺太の景趣に目を円くした。

それは燃え立つような細い赤い実のつやつやとむらがつた名も知らぬ木の藪やぶがあつた。

「あれは何の実。」

「ななかまど。」

と一人の男の子が私の問に答えた。

風と雨とがまた激しく音を立て初めた。

「おおい、おおい。」

前から、後から、わが団員の数々が、その風と雨と、しぶきで飛んでゆく霧の中から呼び応える。

こうして、私たちは国境の天測点へと、草ばかりの一つの丘の頂^{てっぺん}辺を目ざして、泥^ぬ濘^{かるみ}のひどい小径をうねりうねりして登りにかかったのである。

*

既に天測点を見極めて続々と降りて来る誰彼は、頭の上に大き

な驚くべき^{ふき}蔭の葉を傘代りにかざしていた。杖にしてついでである。

「ほう、それが樺太蔭ですか。」

「ええ、大きいでしょう。」

「何処に生えています。」

「やたら一面です。」

ほうとまた驚きながら私は登る。靴に巻きゲエトルだが、わざわざと普請して土もまだ柔かなところへ、大勢で雨の中を踏みくずしたのだ。靴も何も泥まみれになる。それに足がかりも悪く、坂は急になるので^{すべ}はることおびたしい。私はとうとうのめりそうになって、強く突き立てた蝙蝠傘に思わず全身の重みを托した

ので、それが弓のように撓たわむと、その柄えからボキリと折られてしまったものだ。柄がらにもない華奢きゃしゃな洋杖ステッキ蝙蝠傘などを買って来たのがそもそもその通りであつた、私は苦笑して、その柄えと尖さきとを両手に持った。

斜面の中腹に出たところに、例の天幕テントがあつた。天幕の裾ははたはたと風にあおられていた。人声がしきりに笑つていたので、濡ぬれぬずみ鼠ねずみのまま飛び込むと、それは私たちのために村の青年団の人たちが番茶の接待に出てくれているのであつた。

ビール
麦酒にウイスキー、キャラメル。

まことに赤いシトロンと草の緑は天幕の内部を明るくする。

私は麦酒を抜いて貰つたが、凄まじい強雨と荒海の潮鳴りと共に

耳傾けながら、この国境の山上で味あじわう麦酒の味はひえびえとしてそれもいい記念になるだろうと思えた。その色も泡も。だが、私は金を払うことを忘れて、一気に斜面を駆け上っている私自身をその後で見出した。

*

そこらは虎杖の花盛りであった。樺太虎杖の花は内地で見るとうなほのぼのとした淡紅とぎいろを含めていないが、その緑がかつた薄黄は却かえつて度つつましくてあわれであった。それが雨と霧とに濡れしずくになつているのである。

太い丸太の無雑作な二坪ばかりの周囲の柵があつた。その柵は朽ちかけて、既に外皮のところどころはボロボロにくずれかけていた。その中に日本と露西亞ロシアとの境界標石が厳然と立っているのだ。正方形の台座に据えられた鼠いろのその標石は高さは二尺にも満たないであろう。北面に驚わし、南面に菊の御紋章が浮彫りにしてあつた。私は露西亞領の虎杖の草叢くさむらにもはいつて見た。

北を眺めると、その海岸線は南と同じようなさして高からぬ丘陵が続いて、立枯れのとど松の疎林が、しきりなく流るる雨雲の下にほうほうとうち煙つて見えた。寂せきとした国境であつた。

露西亞人村のピレオはつい、一つ二つ向うの丘の蔭にあるのだと聞いた。時々出猟する彼らの或る者の姿さえ見かけることがあ

るともいう話であった。国境とはいえ、警備隊も監督官もいるわけではなし、出入自在であるようにも見られた。簡単なものだと私たちはまた顔を見合せた。

ここでカメラを向ける者がかなりパチパチやった。

私と友とは、ここで一つ撮ってもらった。武田信玄と国定忠次という奇異な恰好である。

誰だか露西亜の方を向いてつくづくと放尿していた。

天測点はいその上にあつた。海上一キロメートル若干の地点である。

其処にも虎杖の花は今がまさに盛りであつた。

この虎杖は露西亜領の花

歌の四五句が口をついて出た。だが、一二三句はどうしても出
来ないで、私はまた帰路についた。

そこで天幕テントに再びもぐりに行ったものだ。

「麦酒の代は払って置きますよ。」

それからシトロンを一本あけてもらったが、また金は払わずに
飛び出す私を私は見出した。

慌ててまた引き返した。

すばらしい斜面の緑、すべるるるるるる。

*

ワレラコクキヤウニアリ

妻子を初め東京の諸友に、その安別から打電した時には、私もまた意気軒昂たるものがあつた。

小学校の粗末なテエブルの上で、私はしきりに頼信紙の雛しわをのべていたが、庄亮君はまた絵葉書に即興の歌などを走り書きしていた。

国くに土つちのはたてに我は来りけり薄紫うすむらさきの馬鈴薯じゃがいもの花

「これはどうだい。」と訊くから、

「そうした四五句は僕の三崎の歌にもあつたよ。」というと、

「こりや困つたな。馬鈴薯の花でなくちやならねえところなんだがな。」と、笑つて頭を搔いた。

「君も気がついたんだね。」というと、

「驚いたよ。全く。あの馬鈴薯の花の新鮮なことつたらないじゃないか。あつはつはつ、こりや困つたな。とにかく。」となつて

ことごとく名は知らぬ草ばな

と訂正した。

駐在巡査のYさんが、そこで扇面など拵げて来る。が、しかたなしに私も筆を執った。

この虎杖は露西亜領の花

「半分しか出来ておりませんよ。」

この時こそ、泥靴の、びしょ濡れの、異様奇体の団員の群集で、いっばいに充たされた校舎であつた。騒々囂々たるものであつた。熱い熱い湯気のたつ番茶の土瓶を持ってしきりに奔走していた人の中で、まだ若い都会風の色の白い夫人があつた。郵便局長の奥さんだということであつたが、誰だか、

「こうした処においでになってお寂しくはありませんか。」とそぞろに同情している者があつた。

「おほほ、それは寂しうございますけれど、馴れればそれほどでもありませんの。」

「でも、冬はたいへんでしよう。」

「ええ、それはもう。」と流石に肩をすぼめたものである。

見まわすと、窓の上、四方の板壁には、フランクリン、リンコルン、ビスマークだ、西郷南洲、そうした世界的英雄の廉物やすものの三色版がさも大業おおぎように掲げられてあつた。なるほど、此処は明治の二十年代だなと思うと、果してどんな教育が行われているものかと微笑された。

「童謡はやっておいでですか。自由詩は。」

「いや、一向にまだやらしておりません。内地にいました時は、考えてもいましたが、こうした辺鄙な処では、ごくごく程度が低いのですからな。お恥かしい次第です。」と教員さんの一人がすつかり恐縮してしまった。

生徒といえは、あの納壺の熊の毛皮の傍にいた赤毛の大目玉の女の子や、アイヌ式の、または劉りゅうせい生式の童男童女どもだろうと思うと、それもあわれであった。

はしけ 舩の幾度かの往復に、自分たちの順番を待つ間を、私たちは、そのとつつきの罐詰工場の中へはいつて見た。仕事は休んでいると見えて、その板敷きの広間はガランとして、例の大きな樺太犬

なるものが獅子のように傲然とその真ん中に蹲うずくまつていだけであつた。ただ、これも大きな一つの溜桶に透明な掘貫きの水がなみなみと溢れ、こんこんと湧き出ているのが珍らしかった。奥では燻製の鯨や、蟹の罐詰の罐や、シトロン、麦酒の瓶などが、売品として、二、三の卓上に飾り立ててもあつた。相間びかんの即製のビラを見上ると、

黄ストロン

一本参拾銭

赤キング

一本参拾銭

水雷サイダア

一本式拾五銭

と拙ますい字で、しかも赤インキで丸々をつけたのが、「なるほど此処は樺ただわい。」とおかしがられた。

その黄ストロンをまた一本あけてもらった。

*

本船へ帰ると、私たちは初めて自分たちのねぐらの厩ねぐらに戻ったような気安さを感じた。何かさびしい、あつけないような国境の印象であった。

午後には、やや西の方が霽はれかかって、時が経つにつれて、赤いぼやけた雲の色になった。日が短くて、薄ら寒い空気であった。能楽の笛がまた何処かの甲板に鳴り出した。

人々はまた椅子を持ち出し初めた。ずらりと外洋を向いては並

んでいる。

「赤化^{せつか}は絶対にいかんです。」と誰やらが叫んでいた。

「とにかく、現代はあまりに無秩序です。学生間にでもですな、この際大いに尊皇の精神を鼓吹せなくちやならぬ。そこでですな。私は天照皇太神宮と、阿弥陀仏と、我が皇室と、この三体を一つに祭つて、いやその祭壇を私の家庭にこさえたのです。私は神でなければならぬ仏でなければならぬというような偏狭でなしに、それに皇室と、つまり神を敬い仏を信じ皇室を尊むという、この主義信念を持って毎日礼拝している。家人にも礼拝させる。訪ねて来る学生にも礼拝させる。これが実に日本人であるところの。」

「あれは誰だい。まるで中学生の演説口調じゃないか。」と一人

が伸びると、

「京大のA博士だよ。叱つ、しずかに。」とまた誰やらが慌ててすつ込んだ。

「そうです。現代の人心は実に浮薄です。救うべからずです。」とまた頭の頂辺から火のついたような、外の声ほかがする。

「へへん。」と医専が舌を出した。「ブルジョアが何だい。階級が何だい。チエツ。」と何かしきりにスケッチをしている。

おいとをけえ
「俺が処来おいとをけえて見る。西郷先生の城山しろやまで切腹さした短刀ちゆうもんが、チャンと蔵かくしてごわすじや。手紙でん何でん持つとる。来て見ろや、そりや、えさつかぞお。」

「喧嘩あばじやないかね。びどく暴あばれてるじやないか。」と、自分た

ちの談話室では庄亮が湯上りの浴衣の胸をはだけて、濡れ手拭で、きゆうきゆうと、まだ紅みの残ったその首筋を拭き出した。

「なに、あれは地声だよ。薩摩人だよ。ほら、あのA爺さんさ。」
「そうか。あの人はたしか城山に家があるといっていたね。」

「うむ、あれで、汽船も持っていれば自動車も持っている。山も持っているという話だ。何でも富豪だと聞いている。」

「えらい元気だね。喧嘩だったらひとつ出てやろうと思ったがね。」

「ぬうつとかね。」

「あつはつは。」

「お得意の剣道も当あてにはならないよ。尾山おやまの篤二とくじろう郎と相上段と

いうところでね。」

「やあ、これは参った。いつかの歌の会のテエブルスピーチかい。失敬失敬。」

「だが、今日はずいぶんみんなが亢奮してるじゃないか。」

「草根木皮の祟りだろうよ。」

「あははは。まあ紅茶を一杯いただこう。」

私たちは、早速に船室ケビンの浴槽で、身体を温めて、さばさばした浴衣の着流しで、卓テーブルにむか対い合つた。それから間もないことであつた。

「今夜は飲めそうかね。」

「いや、どうも咽喉がこれじゃあね。」

「困ったね。大切にしたまえ。僕は三等へでも行つて遊んで来よう。気楽でいい。」

「三等も今夜は亢奮してるぜ。」

「何にしろ、あの吹き降りぶりに国境を見て来たんだからね。少々は変になるだろう。」

「だが、A博士はなかなか国粹党だね。」

「あれでね。まあいいさ。日本精神への復帰ということだろうか。僕はこれで真実の尊皇だからね。」

「そうだな。それは知ってる。」

「結局日本は日本だよ。日本人は日本人だ。」

「となるね。」

「何でも東洋芸術に限る。そう思わないのかな。」

「あつはつは、思うよお。」と、我が庄亮は、また蠅の如くにその両手を頭の上で揉みあげた。

銅鑼が鳴る。

お、夕餐だ。

船が出る。スクリユーが響く。汽笛が鳴る。お馴染の船室ケビンの揺れが、コトコトとまた笑い初はじめた。

附記

安別の小学の生徒たちのために、私は一つの童謡を茲ここに贈り物

とすることをせめてもの私の心やりとする。

海は鞋だったん鞆、

夏の暮。

犬よ、のそりと

出て見ぬか。

鯨にしんかんぼ乾場の

葱坊主、

鴉からすつついて

啼かないか。

ここはお国の
北のはて、
赤い夕日も
もう寒い。

パルプ

甚深微妙みみょうの音もなき響の響が其処にはあつた。内に黒く剛い、しかし外に灰銀の柔かな、平滑な光の面、面は縦に大きく円く、極めて薄手の幅を持って、その両面が、一方は紫の陰影をしかもまた旋転光の数かぎりなき細かな輪の線をすべにらしながら、目にも留らぬ速さで廻っていた。無論腕木うでぎの支柱があり、黒鉄の上下檣こうが横斜めに構えてはいた。その把手ハンドルを菜つ葉服の一人が両手でしつかと引き降しにおき圧えた刹那せつなである。

榎松とどまつの伐りっぱなしの丸太の棒が、一本ずつ、続々つぎつぎに、後

から後から、鱻ふかのごとく、鯨くじらのごとく、鮫さめのごとく、生き、動き、
 揺れ、時には相触れ、横転しつつ、二条のレールの間を、エスカ
 レエタ式の流れに乗って、遠い屋外の白びやっこう光こうから、一旦黄色おうじき
 光こうに变じ、黄色光から、宏壯な機関室に入つて、やや本然ほんねんの
 木地の明りにその色は沈静して、しかして、コトリコトリと首を
 もたげて来る。その一列の丸太を載せて、流れは極めて単調であ
 る。疾はやきがごとく、遅おそきがごとく、流るべくして流れ、移るべく
 してただ移る。いわゆる淡々じやくじやくたり寂じん々じやくたり、虚うつろにして無為だ。
 時にまた、レールの上、十二、三吋インチの空間をあけて、かの直径
 七十吋余の截断刃せつだんじんが、むなしくその靈妙音を放つて、ただに劉り
 嘒ゆうりよう 肅々と空からまわ廻りしているのである。その旋転光。

と、第一の丸太が流れてその閘門にかかつて来る。恐ろしい刃やいばの下に。

丸太はすでにその荒皮を剥がれているのだ。何時のまに如何なる機械によつて、かくもすべすべとなまなまと、木地も露あらわにめくられ引きむしられたかそれはわからぬ。その生肌きはだが目を瞑つむつて来る、仰向いて、観念して。うち見るところ、恰あたかも両手両足を断ち斬られた素裸すはだかの美女の首付きの胴体である。しかも生きている、顫ふるえている、わなないている、氣死して醒めて、痙攣して、極度に蒼ざめて、また赤く熱して、膨らんで、張つて、真つ白に死おちかかつてである。もはや逃れられぬ運命が、瞬間が、しんしんと、淙そう々そうと、その目前に鳴っている、待っている、澄んでい

る、閃めいている。と、ものの一尺ばかり遣り過して、

じゆう……である。

その膨れて張った、すべすべとつやつやとした美女の生肌の、丸太の首根っこに、灰銀色の旋転光の截断刃が、物の気持ちよく、それも音もなく、（恐らく澄ちようしん心の極きよくとはこうした無音だろう。）閑しずかに、無気味に、降りて、その円弧の端が触れると、
じゆう……ううである。

そのまま、じいじい……と、底無しに喰い入り、圧おしつけ、放して、すうつと空くうへまた十二、三寸あがると、流るる胴体は二つになつて、截目きりめも見せず滑つてゆく、その腹部をまた、

じゆう……である。すうつである。

幽深^{みがた}見難し、甚大無量の、また、円満無礙^{むげ}の、謂うところのお
ぎろなき物、この靈妙音は何から来る。おそろしい截断刃はただ
廻っている。

神性の惨虐、虚無。

私は息を呑んだ。

丸太はまた、次から次から流れて来る。菜っ葉服はただ、上下
槓を下げまた上へ放つ。これしも黙々と、秒をはかり、吋を見、
じいと深く、それも瞬時に圧えて、殺して、すうっと放つだけ
である。

だが、何とすばらしい截断であつたらう、虐殺で。

静かに佇^{たたず}んで、私は身じろきひとつしなかつたが、また目ばた

きひとつしなかつたが、私は確たしかに心でわなわなした。だが、何と
いう快感。恍惚たる無上の残忍感。

私はまったく美女の胴体を、その戦慄の対照として想像した。
ああ、このいい知れぬ怪異の殺人。

そればかりでない。私は流るる丸太に自分自身の肉体をすら感
じていた。

じゆう……である。

何といい気持ちだろう。ああ、一思いに殺やられたら。うんとも
すんともいう間はないのである。じいと深く寸のめりに喰い込
まれて、すうつと放たれる。その刹郡の快感。恐らく突かれ、斬
られ、射たれ、搏たたか、絞められ、毒されるあらゆる死難よりも、

どれだけ恐ろしくて、また安らかであるか。無量苦と無量喜。

廻転する截断刃は、劉唳と、また、音なき音を深める。何という靈妙な誘惑、誘惑、誘惑。

そうだ。じっと目を瞑^{つむ}って、仰向いて、観念して、流れるままに、この截断刃の下を、こうして肅々として遣り過ごされて、じゆう……うう。

あつ、私はその時、青くなって、飛びあがって、我に返って、駈け出す私を見た。

*

斧だ。

大きな部厚な斧、上の縁が黒く、中が両方から内へ反つて、また開いて煌々とした斧。

これが、ゆっくりと、寛々と、まるで象がうなずいて、また鼻を退く、そのように、立てた六、七寸ばかりの高さの丸太を、ちよいとやる。ほんのちよいと触れて退くだけだが、ぼらり、すんすんと縦に割れてゆくのだ。音ひとつ立てるものでない。

截断された丸太が、ころりころりと、ころがつて他のレールへ移ると、敏捷く菜っ葉服の一人の手へ捕えられ、重々とこの吊り下つた大きな斧の下へ立たされ、ちよいと縁を割られ、くるりとなると、また他の縁をちよいちよいと割られ、ぱんとまた、二

つ三つに割られて、ぱらりとなる。

槓こうかん杆の、片手は軽い。だが、大斧の、威力は籠る。

鼻が無くてしかもかの象の鼻のアンダンテ。

斧は重くて軽い。ちよいである。

これはまた思おもいよこしまなし無邪の惨虐。

知るがごとく知らぬがごとく、鈍重で、宏量で、斧はうなずく。

虚心平気とはこの事であろう。

斧はうなずく。

「則天無私。」 「則天無私。」

ちよい、すん、ぱらり。

漱石の非人情もここまで来ればおもしろい。

天とは、言葉を換えていえば、「絶対の冷酷」そのものである
うか。

*

囂々々々々々、轟々々々々々、

混雑、擾乱、圧搾、粉碎、散乱、微塵^{みじん}、芳香、光、光、光。

や、木っ羽だ、木っ羽木っ羽、木っ羽微塵だ。流出だ。汨濫だ。
と、私は呆然とした。

コトリコトリ、トンタんと、割られた、丸太の、体^{てい}のいい薪^{まき}ざ
っぼうが、レールの間を流れて、ゴトリゴトリガラガラと、放り

落される、と、その井堰型の粉碎機の中での、たちまちの雑音囂音、大動乱である。

何とすばらしい短時分の粉碎、まさにこれ、霹靂的へきれきの粉碎なりである。

楫松の、丸太の、美女の胴体の、今のこの無慙むざんである。

型態すでになし。楫松の生体はここに一切いっさい木つ羽微塵となつてしまった。

何とまた驚くべき強力の、暗室内の惨虐だろう。

思うに、前の大斧は則天無私のちよいであつたが、これはまた魔神の怪異である。少くとも一千人の金剛力者は、この機械の中に暴れて居る。何という破壊力だ。

「おそろしい機械だな。」と参観の誰かがいった。

「パルプといやはるのは、へえ、この木つばだすかいな。」と誰かが、その木つばの二、三片をその生つ白い掌ての上でザラザラとあけた。

ああ、そうだ。パルプ、パルプ。

高麗丸船上から、この朝、私たちが瞥べっけん見した、あの濛もうもう々々たる黒煙を吐いていた五、六本の大煙突の立つ真岡工業会社の内部に、私たちは今まさに、兢きょうきょう々然たる胎内潜くぐりをやっているのだ。

パルプ、パルプ。

*

観光団員の一人は、鼠色のセメントの壁面に挿まれた、せいしよ青

く色の急階段の半で、なかばよろよろと倒れかかった。顔が真っ蒼になつてゐる。慌てて、その男を誰かが引つ擁えて下へ降りた。

「毒瓦斯だ。」わあつと白ヘルメットの近眼鏡が、その背後かちかめがねら転げ転げ逃げ降りたものだ。一種異様の悪臭が私の鼻をも衝ついた。うむ、むむむむである。

「あははは、亜硫酸瓦斯だよ。ガス大丈夫。」という上から笑い声もした。

そこで、また、どかどかとあがった。それでも半数は階下の開

き戸から表へ飛び出してしまった。空気、空気、空気。

なにしろ、一同、生れて初めて見た截断刃、大斧、粉碎機などに仰天し戦慄し畏怖しきっているのだから、突然、しゅうしゅうと斜め下ろしに吹きまくって来た亜硫酸瓦斯の悪気流には、全くのところたじたじたじとなつたにちがいない。

蒸し熱い、激しく臭う、沸々沸々沸々とした何かが、階上に充ち満ちていた。樺太とはいつても八月の炎暑である。鼠色の壁の幾つかの煤けた硝子窓からは、ガラス流石に強烈な日光が流れ込んで、そこらの麦稈帽や烏打帽や赫あから面づらや鼈べつこうぶち甲縁の眼鏡やアルパカの詰襟のぼんの凹くぼなどが一時にくわつと燃え立って、それらがその光線を壁の影へ越えると、また後から後からと来る浴衣や、女おんな

帽^{ぼう}や桃色のスカートに明つて揺れて熾^{さか}つた。

ハタハタと白い扇子やハンカチーフが群蝶のように舞い出した。おおかたは鼻口を固くふさいだものだ。ところで、「やあ、こりやあ、どえらい羊の胃袋だなあ。驚いた。」と、頓狂な、金魚眼^めをひんむいて、また「ひやあ。」と叫んだ道化者がいる。

見ると、大きな大きな木釜のどれもが、にちやにちやと、まるで口の中で噛みつぶしたラブレターアそのままの椴松の繊維で、薄ぐろく、盛り高く、一杯に満ち溢れていた。阿刺比亞^{アラビヤナイト}魔法にかかった王子や王女たちの羊の、一千匹も捕えて来て、それらの胃袋を断ち割つて、中のどろどろを掻きさらつて、一ところに集めたら、なるほど成程^{なるほど}こうでもあろうか。

だが、片々に粉碎されたとはいえ、あのパルプの薄紅い光沢の木つ羽が、木の肉片がこのもこもことした、軟柔しなやかな、粘りの酸っぱい、繊維の、一種の木の練り粕にたちまちの間に變形するとは。

沸々沸々と、瓦斯の立つ痘痕あぼたの面めん、これがあの丸太の、美女の胴体とは。

階下はおそらく焦熱地獄の機関室であろうか。
沸々、沸々、沸々々々………沸。

*

清しやうじやう 淨じやうな、そうして莊嚴な大伽藍がらん。

空気は沈静し、天井は高く、光はほの青い何かの陰影と織り交つて、ひえびえと、そうして明るく、幾つかの室内は次から次へ見通しに広い。そうしてまた場外の外光が遠くの遠くに小さく、正方形に白く眩まばゆく切り開かれているのだ。

その取つつきの本堂といったところに、高さ百吋以上の巨大な鉄製の機械が二列に、間を広くあけて並んでいた。如何にも均齊を保った配置であつた。それらの凡てがまた極めて摩訶不思議な生命力の威嚴を顕現しているのである。

静中の動、動中の静、兼ね備えたこれらの紙かみ漉すき機械のあらゆる細部の機関、細きもの、平ひたたきもの、円まき、綱状の、腕型の、

筒の、棒の、針金の、調しらべかわ革の、それらがひとしく動いて、光つて、流れて、揺れて、廻つて、幽かな幽かな微妙みみょうな複雑音と、製紙特有の清らかに爽かに鮮かな芳香と気品とを発して、目に見えぬ電動力の表象体そのものとしての、絶間なき活動を続けているのである。

何とまた其処らに動いている菜っ葉服の人間の、そうして参観人の私たちの小さなことだ。私たちは啞然として見上げてゆく。セメントの床を踏む靴音までも畏れて謹んでそうして叩頭おじぎしてゆく。

あの固形体のパルプが、ねとねとの綿わたになり、乳になり、水に濾こされ、篩ふるわれてゆく次から次への現象のまた、如何に瞬時の変

形と生成とを以て、私たちを驚かしたか。この化学の魔法は。

あの鈍^{にび}色^{いろ}の液状のパルプが、次の機械へ薄い薄い平坦面を以て流れて落ちると、次の機械では、それが何時^{いつ}のまにか薄紫の、それは明るい上品な桐の花色の液となつて^{すべ}迂^{すべ}り、長い網の、また丸網の針金に濾^ろされて水と纖維とに分たれ、残された纖維はまた編^ばまれて、吸水函^{ぼく}に入り、ここでいよいよ水分が除^とかれると、たちまちの間に、その次では既に既に幅広の紙らしく光沢^{つや}めき固まつて来て、次のまた強く熱したローラーの幾つかに巻きつき巻きつき、そのローラーを蔽^{おほ}うた毛布の上を通されるその幾廻転をもつて、遂に最後の乾燥をおわると、はさはさ、さわさわと白い白い音と平面光とを立てながら、ここにすうすうと閃^{ひら}めき出し

て来る。すつとまた切られて同型同時の長さとなつて、一枚一枚と、大きな卓上に、寸分の謬りあやまも無く、はらりはらりと亘り止まつて、積り、積つてまたその層を高めてゆくのだ。

何とまた、あの幅の広い広い、そうして薄手の薄手の白紙が、ローラーからローラーへ、一間けんの余の空間を亘つて巻き附くその全く目にも留らぬ廻転と移動とを以てして、些いささかの裂けも破けも、傷つきもひるがえ翻りもしないことだ。何という叡智と沈着と敏捷と大胆と細心とを、秘めて、また、示していることだ。その神のごとき巧妙、靈性の作用は何から来る。

ほんのたまさか、それも奉仕（そうだ、監視ではない、奉仕そのものだ。）している人間の過失で、何か触れた手の疎忽そこつで、ほ

んの何かの裂傷でも生じた場合に、慌てて、閃めき流れて来る紙の一端を強く裂いて除^のけてる、その刹那こそはまた、如何に老練な工人どもがほとんど始末し、整理しきれない速さでもって、後からと後からと、出来たてのぶんぶんする白紙は奔^{はし}り出して来るのである。それを手に触れるが早いか、次のローラーへ、つっと巻きつける、巻きつけるとまた朗々として続いてゆく。その間の菜っ葉服の恐慌は、何とまた高麗鼠^{こまねずみ}のようではないか。

積まれ積まれる白紙は、所定の、高さに層^{かさ}むと、目の廻る速度でまた除去して、空^{くう}にし、空へまた奔^{はし}つて来て乗る白紙へ備えねばならぬ。人間の手よりも紙の迂りの迅さは、それこそ彼らを同所に同一点に、幾廻転をさせるか、思^{おも}半ばに過ぎよう。それどこ

ろでない。実に無量の、また極度の迅速生産である事実が、次の室へ移つてもまた、幾百の女の二十日鼠がいかに天手古舞てんでこまひであることか。笑えるものではないのである。

若い女たちも、実に機敏で手馴れたものである。卓の数列に向つて並んで、手頃に重ねた幅広い白紙の層を、ちよいと片端へ右の手の指を触れると、ハラハラハラハラとめくる。その速さには驚く。また、破損紙を識る直覺的の眼と指の確實さと速さにも驚く。だが、如何いかな彼女らも、後から後からと送られて来る生産力のそれには、絶えず追つ立てられ、焦燥じりじりさせられ、慄えさせられ、しまいにはへとへとにされてしまう。見ろ、彼女らは髪もそそげ、どれもどれもが面色は蒼白になっている。

ここにまた、碧い包装紙を拵げ、検査された完全紙の層を、としりとしとしと載せ、重ねて、揃えて、整えて、またパタパタと四方から包み、サツサツと糊刷毛のりはけで掃き、レツテルを貼り、押し、叩き、次の荷造場につくりばへ送る中年おんなの活躍もさることだが、彼女らもまた同じ種の高麗鼠である譏そしりは徹頭徹尾まぬか免れない。何ともあわれな女奴隷であろう。

ところでまた、見ている間に破損紙が天井に届くばかりに積まれ高まつてゆくものにも、私は目を瞠みはつた。菜っ葉服らのそれは、敗戦の実証であつて、抄紙機に駆使され頤いし使されて、周章狼狽の果ての過失から、まざまざと彼らは弱者たる彼ら自身を彼らの運転する機関の前に曝さねばならない惨めなジレンマに堕ちてしま

つたといつていい。機械は本来人間が発明し製作し運転するものであるが、一旦火力や電動力の導火みちびをつけられるその瞬間から、たちまち一の個性を確立して来る。偉大なる生命の大活動が始まる。全く、一の神秘的な人格とさえ成つてしまう。その時、人間はむしろ却つて被駆使者となり、奴僕ぬぼくとなり、これ命めいこれに従わねばならなくなる。個々としての人性は蹂躪じゅうりんせられ、生活範囲は制限せられ、遂には絶対の權威を以て圧倒されてしまう。この時、機械や機関は決して生命のない無機物ではない。現代の文明によつて生まれた機械は現代人に血と肉とを与えると共に、またこれを啖くらう。傲然として労働者の父となり王となり、富豪を額ぬかずかせ、国家の政治をも左右する。しかも知るがごとく知らぬがこ

とく淡々として無為なものも彼らである。

さて、私は一人の倭人こびとが、雪山せつざんのように高い、白い白い破損紙の層を背に負つて、この大伽藍くわらんの中を匍はうように動き出したのにも驚いた。考えて見ると空と空とを孕くわんだ紙の層はいかに高くとも、実に軽々かるがるとしたものにはちがいない。だがあまりの不釣合あいではないか。おお、紙の入道雲あが歩行く歩行く、光り輝く紙の雪山が。

そこで、原料叩解機こうかいきに移される。その山と積んだ白紙の層が、また瞬またたく間に、その大腹中だいふくちゆうに吸い込まれる、と、どろどろの綿状めんになり、繊維になり、液状のパルプになつて、また紙漉機械へ流れ入る。桐の花色の寒天体になり、乾燥し、また紙に還る。

虚心で、迅速、無常光明世界だ。その世界にだ、人間の高麗鼠が
ちよろちよろちよると駈けまわる。引つ込む、面つらを出す。

戦場のような騒ぎはまた荷造りにある。しかし此処にも誰とし
て一の私語すら発する余裕を与えられた高麗鼠はいない。事実空
気は沈静している。ただ機械力の冷酷と暴虐とはこの工場の空間
のあらゆる隅々までも及んでいるのだ。あの無量生産から寸時
の隙すきなく引きずられこづき廻まわされている人夫たちの沈黙の苦力
と繁忙とは見る目も痛わしい。彼らは彼らの意志も呼吸も圧迫さ
れどおしである。

圧搾機がある。既に包装され、レツテルを貼られた紙の数連が
送られて載る、パタパタパタ、トントンと四方に板を当てる、蓋ふた

をする。針金の位置が定まる。すうと圧搾機が下りる。ピシヤン
コになる。そら、函はこが出来た。よろし。運搬台が来る。ガラガラ
ガラガラガラガラ、走り出す。また紙包みが来る。パタパタ、ト
ントン、すうつ、ガラガラガラガラである。

また紙包みが来る。

また来る。

また来る。

また来る。

また来る。

また来る。

また来る。

また来る。

また来る。

丸太の截断から、この荷造りまで、果して何分間を要したであろう。恐らく、私たちの見た時間は二十分と経っていない。

畏怖と驚駭と感嘆と、絶大の圧迫感と、憎悪と崇拜と、私たちはあまりに苛さいまれ過ぎた。

茲ここで外へ出た。

夏、夏、夏、夏、

「ああ、青空だ。」

私はほつとした。

雲が見えた。山の緑が、そうして白楊ポプラのそよぎが燦さん々さんと光り、

街の屋根が見え、装飾された万国旗の赤、黄、紫が見え、青い海が見え、^{マスト}檣が見え、私たちの高麗丸が見え、ああそうして、白い^{かもめ}鷗の飛翔が見えた。

いや、それよりも、私たちの立っている^{ひろにわ}広庭のこの輝きは、微風は、あ、この涼しさはどうだ。

あ、白い門が見える。門の傍^{そば}の休息所が、

「あ、もし、もし、便所はどちらですか。」誰かの声が出た。
一斉に、また、観光団員の群集が、一、二丁も向うにあるW・Cへ向って、いっさんに駆け出して行った。

真岡

真岡まおかはアイヌ語の「モウカ」である。「美しい波の上」という語義だそうである。

十四日の午前、その美しい波の上に来た。

前の夜、国境安別の海岸と別れた私たちの高麗丸は、元来た南へ南へと下航して、黎明れいめいに野田の沖合五、六丁の処にその機関の運転を停めた。予定の上陸地であつたのである。だが、夜来の激浪がまだおさまらず、空しく迎えのランチも舢はしけも、煙と汽笛と駄目だ駄目だというかしましい叫び声だけを、おそろしく高く低く

上下させながら、空と浪とに掻き濁して、また跟よろけ跟けて引き還してしまったのであった。で、しかたなしに二時間の余を続航して、今度は真岡の鮮かな緑の小山の一連と、市街と、パルプの真岡工場の数本の大煙突と濛々たるその黒い煙とを、近々とその右舷しこに指呼し得る距離まで来て停った。

浪はやはり激しく起伏していた。それでも野田よりはいくらか時も経って氣勢が衰えていた。これなら上あがれぬこともあるまいとなつて、まず第一班から迎えの舳へ乗り移った。

棧橋へ上つて見て私の第一に喜んだのは、その前の広場に群たかつて客待ちしている簡素な馬車の幾つかであった。せいぜい四インチ時ばかりの波型の幌飾りが四方を取りまわして、その幌飾りの縁へりが青

で、それが八月の微風に涼しげにそよいでいた。極めて開放的で、無雑作に黒と赤との板枠をはめた座席の上の空間には細い四本の柱が立っているきりであった。

「こりやいい、ひとつ後で乗って見たいね。」と私はいった。

「よかろう。」と庄亮も御機嫌だった。メリヤスのズボン下の尻し端折りはしよりで、リボンもない台湾。パナマの帽子をヒョコツとかぶって、不恰好な大きな繻子しゆす張りの蝙蝠傘を小腋にかかえ、それから歌のノートを取り出した。

「写生しておいてくれよ。」というから、

「よろし。」と私も早速黄色い小型のノートを開いた。

空はよく晴れていた。そうして真岡の街は歓迎門が建ち、黄や

赤や緑や紫の万国旗で賑々にぎにぎしく満飾されていた。つい一日前に摂政宮殿下の行啓を仰いだのであった。行啓気分が到る処に充ち満ちて、まるでお祭りであった。で、私たちは素顔としての素朴な樺太女「マウカ」へ会える、親しい、それでも物果敢ものはかない旅人としての私たちの期待を裏切られた。そうして盛装した植民地美人「真岡」に、こちらと同じく鉄道省主催の観光団員としての挨拶と接吻を投げねばならなかった。

真つ直に一、二丁行つて左折すると広い坂になって、白い白い銀の葉裏をひるが翻えしているポプラの片側並木の輝きがまず目に映つた。近づいて見るとそれらのポプラの葉は普通の円葉まるばでない、楓のような葉であった。裏は毛ばだつて白かった。これが馬車の次

に珍らしかった。私はその葉の一つ二つを、早速に撈ぎ採っている誰かから貰った。

「独逸種^{だね}じゃないかな。」と一人がいった。

その前に普請中のなにがし新聞社があつた。やっぱり内地ではない何かが感じられた。その隣りが役場で、階上が商業会議所であつた。

その階上で歓迎の茶菓を饗せられて、『樺太要覧』という小本と絵葉書とを一同が貰つて、また少し上手^{かみて}の新築の小学校へ入つた。日は暑かつたが、校舎の内部はまだ生々しい木の香がぶんぶんと匂つて、何か度^{つつ}ましい旅愁をさえ味わせられた。

昨日、殿下の御休憩所に当てられた一室をその戸口から拝観す

ると、広い、しろぎ素木づくりの極めて質素なものであった。床には黄と緑との花模様のあるリノリウムを張りつめて、上段に正方形の壇があり、壇の上に、これも極めて素朴な卓子テーブルと一脚の椅子があるきりだった。私は敬礼をして隣室の物産陳列室に入った。

はなやさい花椰菜、千日大根、ちさ萵苣、白菜、パセリ、にんじん人蔘、穀物、豆

類。海産物でははしりこんぶ、まだら、すけとうだら、からふとます、まぐろかぜ(雲丹)、それからはなおり花折昆布などが目についた。私は売店で樺太地図を一枚買って、そこで外へ出た。裏の幔ま幕んまくの向うでは運動会のおしまい頃で何か騒いでいたがそれも聴き棄てにした。ただ出口でえびちやばかま海老茶袴の二、三と逢ったが、着こなしがいかにも野暮くさく、面相がいくらか内地とは違うなぐら

いで、それも軽く擦れ違つてしまった。

それから少し歩るいて、いよいよ例の馬車に乗った。一台にはA博士夫妻が乗つて、真岡工場の方へ駈け去り、他の一台に庄亮とA博士の令息と私とが三人、早速の市街見物である。りんりんりん、りんりんりん、いくら行つてもさした見物みものもないので、今度は工場の方へ向きを換えさすと、広い広い一本道を工場へ、駈けた駈けた。両側には裝飾電球の支柱が各戸ごとに並んで、遠い遠い正面には工場の白い門と大きな灰白色の建物ばかりが埃ほこりつぽく見えるだけで、妙に面白くない通りであつた。着いてから馭者のぼり方がひどいのにも驚いたが、そのりんりんりんもそれでおしまいになつた。

工場の参観は改めてここに書かない。此所で「樺太のパルプならびに並製紙工業」という樺太庁版の小冊子や紙の見本や絵葉書を貰って、また私ら二人は一足先きへ外へ出た。すると後ろから白髪の支那服の和製タートルさんが追いついて来たので三人になった。

真岡は原名エンルモコマブ、樺太西海岸での第一の殷賑な小都会で、鯨漁で有名だというのが、パルプ工場以外、夏にはさして興味を惹く街でもなさそうに見えた。

「つまらないじゃないか。停車場へ行つて待つていよう。」

「や、何か目めつかるよ。」

「目めつかったのは、ほれ向うの靴屋ぐらいだよ。少し内地とちがうようだな。」

「しようがねえでさあ。あんな雪ゆきぐつ沓なら何処にだってありませ
あね。」とN老人。

「とにかく、お昼餐ひるでもやるか。」

「や、しめた、蕎麦屋がある。物は試しだ。はいつて見ようじゃ
ないか。」

それは汚ない縄暖簾のれん式の、どかりと腰かけておい一杯というや
つだが、主人公なかなか風流人と見えて、一銭銅貨大の孔があい
て日の光が射し込んだその壁の上に拙ますい字で貼り紙がしてある。

貸かしきん金はならぬ都の八重ざくらけふ現金の人ぞこひしき

だが、蕎麦は不思議にうまかった。蠅はがいること、蠅はがいるこ

と。

（真岡をここまで書いたが、書いていて自ら興味のないこと
おびただしい。前のパルプ工場で緊張したので一寸気抜けの
した体^{てい}である。こうした記録的紀行は書きたくないのだが、
いったい真岡という街が雅味のない街だったのだ。此処の駅
を出てしまつたら、何とか筆はかわるだろう。ここまではま
ず、息休めのブランクページとでも見てほしい。観光団のお
つきあいで。）

多蘭泊

汽車は駛^{はし}る。

玩具のような、小さな、薄汚ない、ゴトゴトゴトゴトピイの二三輛の聯結列車である。それが私たち観光団第一班のためにわざわざ臨時に仕立てたというのである。これがまた、真岡、アイヌ語のモウカ「美しい波の上」という美しい語義を持った樺太西海岸での第一の市街から、南へ南へ、終点本斗を指して出た、や、それは今出たばかりの煙の、むくり、むくり、むくり、ぽっ、ぽっぽである。

汽車は駛る。

さして高くない一連の小山こやまの麓ふもとに添つて、

「や、これはひどいな、まるでザラザラの石ころまじりの、赤土ばかりじゃないか。この斜面は。」

「それでも上の方にとどまつ榎松が見えるじゃないか、あつ、空が青え。」

「や、虎杖いたどりだ、これはどうも驚いた、虎杖ばかりだ。」

「どうも土地がこうかく磯いそですな。虎杖の生えたところはろく碌な地味じやありませんよ。」とA博士。

「や、唐黍とうきびだ、三尺ぐらいしきやないね。ほう紅い房がもう出

てるよ。」

「まだほのあかき唐黍の花、か。」

「もう歌かい。」

汽車は駛る。

私は見ている。

「や、すかんぽだ、すっかり枯れてる。どうもおかしいな。だが、いい色だな。カステラのふちそつくりの渋さだな、あの穂は。

や、また、すかんぽだな。

虎杖とすかんぽばかりだな。

や、はくば白馬だ。

虎杖から顔を出した。」

汽車は駛る。

「Kさん、二班と三班はどうなりましたね。」と誰やらが声をかけると、

「ええ、二班は真岡泊りで、三班は野田へ引つ還すはずになつて居ります。」Kさんは東京鐵道局の旅客掛である。

「今朝はどうも野田はひどうございましたな。どうもあの波ではとても上れそうではございません。」と老団長。

「そうでした。上ればよかつたんですが、あちら彼地でも歓迎準備をして、花火など揚げていましたので氣の毒しました。宿もとつて

ありますので、三班だけ行つて貰いました訳で。ええ。」

「野田はおもしろそうですか。」と私。

「いえ、別に。」

「それは気の毒でしたね。明日^{あす}四時間も汽車で来るのでは大変ですね。」と、これは若い警部のA君。

「じゃあ、真岡組が一番当つたというんですかい。」タゴール老だ。

「いや、これで、ここだけの話ですが、一班の方が、実は大当りです。あした、少し引き還して、アイヌの部落を見に行くことになつて居りますので。」Kさんが伏目で、気の弱そうな笑顔をする。

「あ、アイヌ部落。それは何処です。」これは小樽からの新来の

客の一人で、ラジオ狂で、いつかの晩ももう碌にJ・O・A・Kが聞えないと悲観していたF君。テニス界の清水氏の夫人の兄さんだ。

「ええ、この沿線です。多蘭泊^{たらんとまり}。もう一時間もしたら通るでしょう。汽車からも見えるはずです。」と、向うの隅から札幌鉄道局の旅客課のS君。

「樺太アイヌですな。」と京大のA博士。

「さようで。」

「その部落ばかりですか、アイヌのいるのは。」

「や、まだ、東海岸に五箇所西海岸には三、四箇所ぐらいはあります。ええ、此処らでは多蘭泊ぐらいですな。野田の一つ

隣りに登富津とふつというのがあります。これは樺太庁の水産課。

「へへん、何やろかいな。アイヌにも芸妓げいしやはんがありまへよか。
 「神戸富豪のNさん。九州男のYが「金持ちなんてん下俗げさくうしてなん。」といった人だ。

「あつはつはつはつ。」「はははははは。」「ひつ。」
 ここで、

「Nさん、本斗ほんとにはいますぜ、そら。お楽しみでさあ。」そこで
 ピーと、やったはタゴール爺さん。と、その口から片かたこぶし拳こぶしをは
 ずしながら、大きな眼鏡を長い紐と一緒に片方かたずらかしにして、
 円い、光った、悪童のような眼をする。そして、ちよつと、その

傍の庄亮の肱をつつ突いた。

「やああ、こりや、あつはつはつはつ。」と庄亮、両手を頭の横でうち振りうち振り、豪傑笑いだ。

汽車は駛る。

西日が強いので、左側はすっかりよろいど鎧戸を上げてある。それで残念なことには海岸が見えない。

一つ落とす。暑い光がかつと差し込む。

見える、見える、くさぶき草葺の漁師の家が、海はすぐ前だ。一面に今日は光っている。

「や、高麗丸が行ってる。」

その側の皆がトントンと鎧戸を落とす。硝子戸までガタガタとやる。反対の側のも二、三人は立ち上つて来た。

「なるほど、今行くんだな。」

「ちようど、同時になるでしょうね。それとも汽船の方が遅いかな。」

「そりや遅れるでしょうね。向うが。」

「だが、心丈夫ですな。」

そうだそうだと、誰もがこの時は同感したであろう。永い間自分たちの家にして来た汽船だ。それに今日初めて、真岡に上げ棄てにされて、団員が三方に別れ別れに今晚は分宿するというのだから、何かしら心細い頼りないような気がしないではなかった。

それに今朝は今朝でパルプ工場でかなり機械の威力に脅かされて来たのだ。そこで、今、同じ方向に今夜の泊りの本斗を目ざして、自分たちの高麗丸が、やや少し斜め先きに、船体を真横に見せて、さほど遠からぬ沖合を駛っている。

あ、光ってる、光ってる。あれは舵機室の硝子だ。

あ、あの檣マスト、煙突、煙、々、々、

あ、黄だ、白だ、紫だ、赤だ。

あ、通風筒、あ、あの船室ケビンの丸窓、

あ、あれが自分たちの船室ケビンだな。

あ、誰か欄干てすりにいる。

おおい、おおいと、汽車の窓に乗り出して、一人が麦藁帽を振

ると、

おおい、おおいと、また一人が麦藁帽を振ると、

おおい、おおいと、また一人が白扇を振ると、

おおい、おおいと、またまた一人がハンカチーフを振ると、

おおい、おおいと、あ、向うで何か振った、振った、振った。

光る、光る、光る、光る。一面の波の光だ。

汽車は駛る。

玩具おもちゃのような樺太の汽車。

カーブだ。や、砂浜だな。

木柵、木柵、木柵、

海老茶だ、あ、すかんぽだ、あ、お襠しめ襦めだ。あ、お負ぶっている。

あ、草家くさや、草家、板壁。日の丸。

日向葵ひまわり、日向葵、黄、黄、黄、黄、黄、

あ、裸の子供だ。

「わあい。」

「わあい。」

「わあい。」

「ばんざあい。」

「べんじやあい。」

「じやあい。」

と、

「北原さん、無線電信は来てましたかい。」

はくはつ
白髪はくはつの支那服の、また牧畜家の、茶目の和製タゴオル老人が、
西日の窓に向つた私のぼんの凹くぼに、うまく例の擲揄と笑いとを射
撃した。

当つた、と思つた。

私の上衣のポケットの中には、つい、先程旅客課のKさんから
受取つたばかりの、今年四歳になる坊やからの無電のそれがはい
つていたのであつた。

カゼサンヤンドクレパパノオフネ

アブナイヨ

汽車が停った。

やや、開けた山裾、家があちこち、みんな日の丸の旗を掲げた、
つい前もお祭り気分の運送屋、

毛糸があります

と、貼り紙した店の横の雨戸袋。

ぞろぞろと汽車から下りる、またプラットフォームを駈けて来る。

茄子とトマトの籠、赤ん坊の目、目、頭、帯、々、足。違う違う、
顔色が違う。眉の毛の深い女、娘、
廂ひさしがみ髪。

「アイヌだ。」

「アイヌだ。」

「や、なるほど。」

「へえ、なある、これはよろしいね、なかなか別嬪やないか。毛深うおまんな、へへん。」

「Nさん、本斗がありますよ。」

「そやかて、待ちなはれ。へへん。」

と、

「皆さん、此処が^{たらんとまり}多蘭泊でして、ええ、今度汽車が動き出ししましたら、その部落の間を通りますから、よくお気をおつけになつて下さい。それからきれいな川へかかります。その川筋はまた鯺のよく獲れるところで、ええ、後で車掌に鯺漁のお話でも致させたいと思いますから。」と、札幌の鉄道局。

ピーと、玩具人形の駅長さんの呼子^{よぶこ}が鳴った。

片手を一の字。

汽車が駛る。

あ、べにあおい紅葵だ、

あ、また。

どうだ、あの色の新鮮なことは、不思議だな。小田原あたりよりもずっと色が純粹で明るいな。

あ、また葵だ。高い高い高い。

「や、アイヌの家だ。」

「出ている、出ている。」

「どれ。」

「ほうら。」

「やあ。」

「あ。」

汽車が駛る。駛る、駛る。

アイヌ、まことにアイヌの村にちがいない。彼らはまったくアイヌだと、私は観た。

アイヌは、アエオイナ神、別名アイヌ・ラク・グル（アイヌの臭いある人）に依つて創造された祖先の後裔だと自身に彼らを思っている。アイヌは繫はこで頭を、土で身体を、柳で背骨を創られた。とまたいわれている。アイヌの眼窩めのくぼは深い。頭髮が深い。

神々の髪イナカムイの毛の人として彼らはその美髪ほこを矜おっている。彼らは古
 伝神オキクルミオキクルミを矜おる、その蝦夷島アイヌモシリの神を。

アイヌは白はくせき皙人種であろうか。だが、かの人種の皮膚は銅色
 がちの鳶とびいろ色だとジョン・バチエラー氏はいった。私はそれを信
 じよう。

何とあの彼ら及び彼女らの髪濃く眉の濃く髯の濃いことであ
 ろう。

紅葵は鮮紅で、蕊しべが黄で、上向きがちに目を仰いで咲く。根か
 ら枝が別れて、そろって延びて、花は段々を成して幾つともなく
 前に横に上に下につく。多蘭泊の紅葵は高い高い脊丈である。乳
 緑の葉っぱ、莖、枝、みな水々しく、そして毛ばだっている。咲

きかけの折り目のついた紅いつぼみ蕾つぼみがそれらの頂てっぺん辺にある。

向日葵の大輪のおうごん黄金色しよくもまた、私の想像していたアイヌの村にはなかった。しかし、この多蘭泊の部落には、ひさし廂ひさしよりも越えて輝く五六七八の大輪がひとむらがりむらがりに群を成している。これも日に向つて廻る。

家は低い草葺である。でなければ鮮人の小舎こやのように見ぐるしく、またバラツクの網納屋あみなまのようである。それらの家屋ちせも絵葉書ちせなどで見る北海道アイヌの伝統的家屋ちせとはほとんど趣を異にしている。あまりに日本化している。日本化したといえ、それは日本の乞食の住居のような陋ろうおく屋おくがいかにも多く見られたのである。だが、アイヌである。人種は確かにアイヌである。だが彼らの

服装は浴衣がけである。シャツにズボンである。浅ましいのはまた乞食同様の風俗もしている。

が、紅葵の傍、向日葵の花叢はなむらの中、または戸毎こごごとの入口の前、背戸せどの外に出て、子供まじりに、毛深い男女のぼつんぼつんと佇んでいる姿を見ると、人種の血肉は争われないものだと観た。日本人の私などには通ぜぬ深い何かがある。アイヌのそうした哀愁はまた何から来る。

おお、みんなが今空を見上げている。

おお、またいわゆるアイヌ模様の厚司あつしを着た爺がいる、いる。二人も三人もいる。

何と、かの爺どもの胡麻塩の蓬ぼうぼう々と乱れて深い渦巻きをした

髪くぼの毛、凹くぼんだ黒い両眼に蔽おほいさがった眉毛、口髭、毛むくじやらの胸まで長々と垂れた頤あご髯ひげだろう。何と荘厳な顔貌と威厳ある風采の持主で彼らはあるであろう。

あ、トルストイがいる。トルストイがいる。

おや、あの爺どもも空を仰いだ。

と、

「驚だツ」と、誰かが窓から見あげた。

はつと仰ぐと、アイヌ部落の、そのややうち開けた谿谷の上、海に迫った丘陵の榎松の黒い疎林の、その真つ蒼な空に一点、颯はかせと羽風を切っているのは、

あ、たしかに驚だ。

鷲は飛ぶ。飄ひようとしてまた流れて、翼を撓たわめて、あ、大きく張つた。

向うところは韃靼の黒い遙かな大うねりの波濤の彼方である。

鷹ひとつ見つけてうれし伊良古崎

芭蕉

これだなと私は思った。

あ、アイヌが先刻さつきから見あげていたのは、あ、これだったか。

青い青い空ではある。

汽車は駛る。

汽車は鉄橋にかかり、潺せん湲かんたる清流の、やや浅い銀光の平面をその片側に、何かしら紫の陰影かげをひそませた、そして河原の砂の光った、木の橋がある、そのつい下手しもてを駛ごうつて轟ごうとまた響きを立てた。

「皆さん、鯁漁のお話をいたすそうです。」札幌鉄道局のS君が戸口で、立って帽子を脱とつた。前額の禿かぶがてらてらと光る。少い髪を櫛目を透かしてぺつとりと撫でつけている。

まだ若い車掌が、切符改めの通りすがりを、赤い顔して、引き留められて、克明にハツと頭をさげた。

「こりやいい。頼たみますぜ。」
と、誰かが手を拍たたいた。

旅へ出ると老人組までが、いや却って茶目にもなる。

ピーと、またタゴール爺さんが口笛を吹いた。

「へえ、へえ。」と、車掌は目を伏せて、「ちよつとちよつと。」と間を頭を^{あいだ}下げて、手を戴くように、前の車へ切符拝見と出かけそうに、行きかける、それをタゴールさんが、矢庭^{やにわ}に引つ捉えろと、無理に自分の座席の隣りに抑えつけてしまった。

汽車は駛る。

驚を見つけてから、私の心は閑^{しず}かになった。

私は海を、遠い荒波を、通り過ぎる目の前の浜の小石を眺めている。

汽車は今、ひたひたと湛えた潮の、つい汀を快い左右動を楽しみながら駛つてゆく。

韃靼海の八月のやや赤みかけた円い太陽が、まだ水平線から、うち見に四、五尺の空に輝き輝きしている。だがその下の遙かの遙かの寒い霞の曇りはどうだ。向うの何処かに沿海州。

荒れてる、荒れてる。外は飛沫が凄まじいが、三四五六丁の此方はまたとろりとした一面の閑かさで、腐れたようにも濁っている。劃っているのは飛び飛びの青黒い岩の弧線である。

あ、鳥がいる。

飛び飛びの岩のひとつひとつに、どれもが同じ北の一方を向いて、鴉よりはやや小さい、鵲鳩よりもやや大きい、南国の鳥と

も違った、何か寒げな、尻尾の動く、くちばし嘴の細そうな鳥の姿である。

外の波濤は穂がしら白く、内のとろみは乳黄で、またやや光つた銅色で、閑かなようでもどうにもならないおど澱みがある。

澱みは凡てが昆布である。

子供がひとり、つツと此方こちらを見て佇たった。浜辺は昆布が散らかつてる。

昆布が海を腐らしている。飛び飛びの岩の弧の線まで。

あ、たんぽぽだ。

汽車が停まった。

ほんと「本斗」 「本斗」

やまたか山高に燕尾服の、品のいい老人が、車窓に向つて直立した。

若い従者がうしろに立った。

老紳士は山高を脱った。そうして、
謹直な叩頭おしぎ。
本斗の町長であつた。

本斗の一夜

「おおい。まだかあい。」

と、こちらの二階の欄干へ、浴衣がけの三尺帯で乗り出したのは私である。

「おおい。もうじきだよ。」

広い通りを隔てた向うの理髪店から、椅子に掛け、姿見に對つたまま、その鏡の中から、ザツと刈ったばかりの坊主頭をしきりに振り立てるのはわが友庄亮である。首を竦めてキチンと構え込んでいる。何か脹れぼつたい頬の、細い細い眼で笑っているよう

でもある。

八月十四日の、樺太は本斗ほんとの清明な暮れがたのツワイライトである。摂政宮殿下の行啓を仰いで、ついその翌晩、お祭り気分の濃厚な、黄や碧あおや赤やの色々な装飾の中で、実に鮮かに一斉に電で灯んきが点いた。それから五分とは経たなからう。殊にもこの真向うの姿見、硝子ガラス棚、バリカン、廻転椅子、カバーの白白白、立ち廻る理髪師の背広の、ズボンの白、搔き立てなすりつけた客の頬や頤あごの石鹸シャボンの白、琥珀こはくの香水、剃かみそり刀の光、鋏のチャキチャキ、そうした銀と緑との小夜景がまるで近代劇の或る場面かのように私の前に展開された。その横文字の看板の、そのまた屋根の、町並の上の近くは濃く青く、はるばると末は冥くらんだ鞆だたん鞆海である。

またいくらか薄い空の青みである。縁は陰^{へり}つて白い寒い雲の流れである。

そうして、沖には高麗丸の船室^{ケビン}の灯^ひが、美々^{びび}しく、ちらちらと、今や輝き出した。

チャラン、チャラン、チャラン。

何やら金属性の透つた音もきこえて来る。

「お腹が空いたぞお、いい加減にしないかア。」
と、また、乗り出す。

「じきだよオ。待ちたまえ。」

「頭は済んだかあい。」

「済んだよ。これからお面^{かお}だ。」

「洒落れるな、おい。」

「洒落れはしねえ。」

と、剃刀がピカリと上へ反れた。危険危険、後ろ斜めに凭れ気味の、その刈りたて頭を。

ピーと、按摩の笛。

おもしろいおもしろい、按摩も白の背広で、麦稈帽むぎわらである。

背広といえは小樽で見た按摩も、これは霜ふりではあつたがやはり背広でカラをはめ、薄汚れてねじれてはいたが、何か黒に赤みがかつたネクタイを結んでいた。キト旅館でひとりで机に向つていた時のことである。縁側からにじり込んで、下座しもざにズボンの膝を折目正しくかしまつたその紳士を見て、私はまた土地の新

進歌人のひとりかと早合点をした。それで、こちらも丁寧に向き直つて、さて、「あなたは誰方どなたですか。」とやったものだ。

「ア……ン……マでございます。」

眼をぱしぱしで仰向いた。

流石に北海樺太はちがっている。

白、コツコツコツ、白、白、コツコツ、ピー。

「エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノ、エンヤラヤアアヤ。」

跳ね跳ねして、ちいさな二人の女の子と男の子とが、ややほの白い広い通りのまんなかを歌つて来る。これも白つぽいなと見ていると、またその後からののはのつぽで白で、大跨おおまただ。支那料理のコックでもあるかな。岡持おかもちさげて、また、

「エンヤラヤアノヤアヤ。」である。

ひらひらと、海の空ではかもめ鳴か何かが飛んでいる。一等星、二等星、生れたてのかす幽かな星。

あ、波の音らしい。急にざわついて、またひっそりとなった。
「まだかあい。おい。」

妙に心がひもじくなる。で、煙草に、マツチをシュツと擦る。
と、隣りの室へやでも誰かが立った。

てすり欄干に出る。

またその隣りの室でも咳をした。

欄干に出た。

白の支那服の、しらが白髪しらひげの、和製タートル老人の姿も見え

た。

こうして、アーク燈のような薄い紫の空気の、遠くは重い匂いの紫となる。

海暮れて鴨の声ほのかに白し

芭蕉

*

白い障子を閉めきつて、何だか薄ら寒いなどなった。夏は夏でも夜分は急に冷えるのがここの氣候だと思われる。襦どてら袍を浴衣の上に重ねる。それからぽつんとちやぶ台の前に坐ると、傍の手

あぶりには炭火がかつかと熾おこっている。それでも、ひしやげた鉄瓶が、触さわれば周りの疣いぼいぼ々々がまだ温ぬくみかけたばかりである。

そこでお盆の上の蓋物ふたもののつまみを取って開けて見る。なんと貧弱なビスケットだ。なすった白の、薄紅の花模様を一つかじつて、淋しいなとなる。

お、電灯でんきは無論つ点いているのである。それもコードがダラリと垂れ過ぎた。立ってひと結びくくりあげると、白い陣笠形じんがさの上の埃が両手にくつつく。

ところで豪傑笑いの友人はまだ帰って見えない。

「あはは、どうです。今夜はひとつ探険にでも出かけますか。隣りから声をかけた。小樽からのちかづきの、あの俊敏な紳士

の、麦酒^{ビール}会社の重役の、ラジオファンのF君である。さつきからこちらの悄気^{しよげ}かたをすっかり観察していたものと見える。傍にはこれもその連れのもういい年輩のHさんが長者らしく正坐して、またこちらを眺めている。HさんはF君と同じS市の人で、同じ札幌の農科大学出（そういえば和製タゴールさんのN老人もその第一期の卒業生だそうである。）の有名な牧畜家だと聞いている。温顔の、それでいて重厚な犯し難い風采である。I公爵の従^{いとこ}弟だとも、また人格者だとも私に話してきかした人もあった。俊敏と重厚と、いい取りあわせであるが、そのうえ、二人は非常に仲がよさそうに見える。F君は眉根をキツと寄せて金縁眼鏡で、声をあげて笑ったが、Hさんはこれも眼鏡だが、ややすこしく禿^は

げあがった広い額の、髪は正しく搔いて、鼻の高い、それで眼元で優しく笑った。なかなかよく練れていそうである。それと比較くらべるとこちらの二人はどんなものかな。これも非常に気が合つて、それで二人とも駄々っ子で、何か野呂間のろまのようでもある。とにかく私も我儘者わがままものでかなり気むつかしやだが、この私を一度も怒らせぬところは不思議に庄亮えらいところがある。「まだ一度も喧嘩しないね、妙だね。」と、いつか私が笑つたら、「喧嘩してたまるものか。」と彼も笑つた。

「だが随分長い旅行だぜ、誰だつて一度ぐらいは気まずい思いをするものだよ。」とまた笑つたら、「あつはつはつ、僕なら大丈夫。」と頭を振り立てて豪傑笑いをした。その庄亮はまた、いつ

もになく、チヨボチヨボの不精髭など剃っている。

「出かけるかな。だが、飲めないでしょう。お酒は。」

「麦酒なら少々はいけますよ。」

「でも、ここの麦酒じゃね。」とHさんが火箸ひばしをいじった。

書き忘れたが、隔へだての襖ふすまは初めっから開けっぱなしにしてあるのだ。

「エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノヤアヤ。」
とまた表を通ってゆく。

「エンヤラヤアノヤアつて、ありやいったい何の唄です。」とF君。
「ソオレ漕げ、ヤアレ漕げというのです。たしか中国辺の船唄だったと思います。本歌もとうたは忘れましたがね、一寸こうした節だつ

たようです。船頭おんどかわいや、穩戸おんどの瀬戸で、エンヤラヤアノヤア、ソオレ漕げ、ヤアレ漕げ、一丈五尺の、一丈五尺の、艫ろが撓しわる、エンヤラヤアノ、エンヤラヤノ、エンヤラヤノ、エンヤラヤノ、エンヤラヤノ、エンヤラヤノ。もつともこの歌詞は別物ですよ。」

「なるほど。でも、何だかちがってやしませんか。あのエンヤラヤラヤアノヤアヤは。」

「そう、少々妙ですね。」

「や、はるかに見ゆるは本斗の港とやっていますよ。」

「ほう、それじゃ替かえうた唄うたでしょう。」

「本場じゃないんですね。追分はどうです。」

「おしよろたかしま忍路おしよろたかしま高島たかしまですか。あれは流石りゅうせきに松前まつまえから此方こちのものですね。」

信濃の追分とはまた味がちがっていい。」

「信濃の追分というと。」

「あれこそ追分の本元でしょう。馬方うまかたぶし節ぶしなのです。西は追分東は関所せめて峠の茶屋までも。あれです。」

「すると、こちらの追分とはどちらがいます。」

「こちらのは船頭唄の追分です。節廻しが凡すべて艦拍子くわんぱしに連れて動いて、緩く、哀調あゐてうたになっています。信濃のは馬子唄まごうたですから、上り下りの山路やまみちの勾配こうはいから、轡くつわの音、馬の歩調あしあてに合わせて出来上できあがりつたものなのです。シャンシャンと手綱たづなの鈴かねが鳴つてです。小諸こもろ……出て見みいりや、となります。小諸節こもろぶしともいいいます。」

「おもしろい。はは、それで、どっちも追分ですか。文句ぶんぐもおな

じな。」

「いや、やはり信濃のが本場の追分ですね。西は追分だとか、今の小諸出て見りやだとか、

小諸出て見りやあさま浅間の嶽にけさも三筋のけむり立つ

さまが来ぬ夜は雲場くもばの草で刈る人もなしひとり寝る

浅間山から鬼や尻けつ出して鎌でかつ切るような屁を垂れた

あはは。まったく浅間山の麓から生れた唄ですな。あの信州の追分は今では寂さびびれ果ててしまいました。昔は中仙道と北ほつこく国筋との追分でした。沓掛くつかけや軽井沢と並んで浅間三宿といった

のだそうです。大名行列で随分盛んだったでしょう。その追分には馬頭観音が立っているんですがね、いつか行って見た時には、まだ早春で枯草の中にぺんぺん草の花が咲いていましたよ。古い旅籠屋はたごでは油屋あぶらやという、元は脇本陣だったそうですが、以前のままの大きな古い建築で、軒下には青い獅子頭ししがしらなどが突き出ていました。剥げちよろけですがね。二階が出張っていましたね。それに入口の板の間が広く、柱が大きくて、ありや国宝ものですよ。それに浅間の裾野かからまつが落葉松林かからまつでしてね。や、翁おきな草なぐさがずいぶん咲いていましたぜ。あの幅の広い林道を材木をつけた二輪馬車がカラカラカラと通るのです。霧のような雲が流れてね。や、これは話が横道に逸れてしまいました、砕けたところでは、

碓氷峠うすいの権現ごんげんさまよ、わしがためには守り神

送りましょかよ送られましょか、せめて峠の茶屋までも

というようなものになっています。この信濃追分が北越の航路から蝦夷地へ流れ流れてゆくうちに、いつとなく波の響きや艀拍子の中で洗われ揉もまれて、遂にはあの船唄としての追分の哀調になったのでしよう。その土地土地で松前追分とか渡島追分おしま、江差追分とか呼んでるのがそれです。新潟辺ではそれを松前節としていますが、それは逆輸入から来た一種の錯誤感で、こういうことは東洋と西洋との間にもよくありますよ。浮世絵と後期印象派、芭

蕉あたりの象徴句とマラルメあたりのフランス仏蘭西象徴派との関係、調べるとまだいくらかもあるでしょう。ところで、おしよろたかしま忍路高島ですがね。

忍路高島およびもないが、せめてうたすついそや歌棄磯谷まで
 帯は十勝とかちにそのままねむろ根室、落つる涙のほろいずみ幌泉

これがこちらでの最も古い追分でしょう。この頃では前唄とか本唄とか組にしているようですが、そうそう、前唄の方はいわゆる松前前歌で、調子が軽い。」

「忍路高島には義経伝説がどうかいいいますが。」とHさん。

「積丹土人の酋長の娘の話でしょう。いや、あれはほんとうじゃなさそうですね。外のアイヌ伝説と混同したらしいのです。理窟は何でも後でよくくつつけますよ。」

「替唄というものも沢山ありますかしら。」F君がまたこちらを眼鏡越しに透かした。

「それは年代が経つうちに、その歌曲に合せた新作も出来るでしょうし、諸国の俚謡だの、小唄などが混入して歌われることは随分あります。大概の唄は二十六字調ですから、融通が利き過ぎるくらいです。で、大島節の歌詞が安来節でも歌えるし、都々逸の文句が相撲甚句にもなるという風です。それに有名な歌詞はよく方々の土地で盗まれもします。坂は照る照るでも地名だけを変え

て歌われたり、

男伊達^{だて}なら千ヶ崎沖の潮の早いのを留めて見よ

という大島のがつしやがしやが節が、小笠原の父島では八丈のしよめ節で

男伊達ならワントネの岬^{はな}の潮のながれを留めて見な

という風に転化されて、それが小笠原特有の歌のように思われたりします。それにおかしかったのは、つい昨年でしたが、中央公

論か何かで或る人の島々の民謡の事を書かれた中に、私の八丈風の新作の民謡が、昔からの八丈の古謡として入れられてあつたことです。向うで歌っていたので、生粋のしよめ節の唄と思いちがえたでしょうが、こうした例はいくらかもあるでしょう。で、多少とも年代的に知って置かないと飛んだ恥をかくことになります。

民謡の精髓というものはやはりその土地で生れたところに生命があるのですからね。樺太本斗のエンヤラヤアノヤアは、こりや眉まゆゆゆつつば「唾ものですよ。」

と、「やああ」と、やや顔を赤めて大にこにこで、庄亮が飛び込んで来た。つるりと片手で刈りたての頭を撫でて、着ふくれたどてら襦どてら袍姿の、陀々羅だたらな足どりで、「はっはっはっはっ。」とまた笑った。

それを見ると急にまたひもじくもなつて来る。

「どうしたんだい。もう夕飯だよ。」

「あつはつはつ。失敬。」と、眼を細めて、首を振り振り、坐ると、また、「やああ。」と肩をゆすつた。

「お洒落だなあ。いつまで面かおなんぞあたっているんだい。」

「なにそのお、海岸へ行つていたんだよ。明日は魚釣あした さかなりに行くんだぞ。」

「見て来たかい。」

「うむむ。釣れるそうだ。舟でひとつ出かけるか。」

「どんな魚です。」とF君。

「いやあ、しまった。訊くのを忘れた。なんでも魚だよ。」

「のんきだなあ。」と、今度はこちらで笑い出した。

「樺太横断はどうする。きまつたら真岡の自動車屋へ電話を掛けることになってるんじゃないか。」

「どうもそのお、この感冒かぜじや冒険はむつかしそうでね。明日は半日休養しようと思つてゐる。やはりみんなと一緒に大泊おおどまりへ直航することにしようよ。」

「少々弱つたね。」

「今夜は按摩でも呼んでひとつ。」

「按摩はさつき通つたよ。白の背広で。だがよく按摩の好きな人だな。僕などはくすぐ擦つたくてしょうがない。」

「はっはっはっ。君はとても駄目だよ。」

「それにしても飯の遅いには困るな。ベルをひとつ押ししてくれ。」
「よおし。」と後ろの床柱の方を向く。

「はははは、ベルはさつきからのべつに押ししてますよ。」そこは
F君抜け目がない。

「だが随分悠長ですな、ここの家は。北海道から此方こつちは妙にベル
が利かない。」

「凍っちゃったんでしようよ。」

「ですがね。すこし変ってますよ。じゃないですか。」

「まったく、これあ、虐待ですよ。」

「それにしても、まるでバラックですね。梯子はしご段だけでもつてる
ような宿屋だ。」

ここでいつて置くが、このSS旅館なるもの、何か下等な材木の木の香かばかしが生々しいが、スリッパでも穿はかねばとても脂やにつぽくて歩けそうにもない薄汚さで、そのうえ、廊下の突き当りにはきまつて凸凹でこぼこの姿見ばかりが、白ペンキ塗の厚縁あつぶちの燦々きらきらで、脾弱ひよわい、すぐにも撓しわつて外れはずそうなる障子や襖の劃りの、そこらの間毎まごとには膏藥のいきれがしたり、汗っぽい淫すらな声が饅すえかけたりにしている。浴室へ行けばぬるりと迂すべるし、暗くて狭くて、天井が低くて、息抜きも無ければ、上り湯もない。歪形いびつのペシヤンコトタンの亜鉛トタンの洗面器が一つ放つたらかして、豆電灯まめでんきが半熟れはんろうの鬼ほおず灯きそのまま、それも黄色い線だけがWに明つてるだけだから驚いた。それにしても店の真正面の梯子段の堂々としてしていることは、

赤渋のニスの塗り立てで、まるで、しやいしあい、トントントンの遊廓式である。えらい梯子段だなど這入る時に見て上った。あが

「手を拍たたくかな。」と庄亮。

「や、待っていようよ。神妙にしよう。恐れ入った。」

と、ポンポンポンポン。さては和製タゴール老か、警部さんか。これはきびしいせつかちだ。

「エンヤラヤノ、エンヤラヤノ、エンヤラヤアノヤアヤ。」
外は祭りの電光飾。

*

「へへん、来やがれ、畜生、何が何だつて、今頃になつて、碌ろくでもないあまりもののお客なんぞをふり当てやがるんだ。と、てめえも小つぴどくやつつけやした訳で、へい。」

瘦形の、小柄の、巾着切りか刑事見たいな、眼が迫つて険しい、青いしやつつら面の、四十前後の、それは鼻つぱしの恐ろしい番頭君が、蠟かまきり螂りさながらの敷居際の構えで、ヤツと片手の利鎌とがまを振り立てた。宿帳をつけに来て、坐り込んでしまったのである。

のつけから、あまりもののお客とやられて、思わずギョツとしたのは、庄亮、H、F、白秋だ。

悲観した。

「ふつ、あまりものとはひどいじゃないか。」とF君。

「へっ、これは御勘弁を。それでも何で、やっぱりBB旅館のあぶれ……。」

「あつはつはつ。あぶれは驚いた。こいつはおもしれえ。」と庄亮。

「あぶれのお客をおつつけやがって。——と。」

「おいおい、いい加減にしないか。」とF君。

「あぶれだよ、あぶれだよ。」と白秋。

「おもしれえ、おもしれえ。」

「あぶれじゃないよ。こつちの勝手に、別れて来たまでさ。BB旅館があまり混んでいるようですね。まだ団長へも私たちがここに來ていることを知らしてないくらいだからね。あまりものを向う

で意地わるく押しつけたという訳でもないさ。」これは重厚だ。

「失敬きわまる。出ようじやありませんか。」これは俊敏だ。

実際私たちは、怪しいお客の剰余あまじやないのである。駅から町長の案内で、海岸寄りのBB旅館の前に初めは立った。

何でも鉄道局との打ち合せも済んでいたものと思われたし、東京の旅客課のK君も附いていることなり、や、お疲れさま、どうぞとあったので、そこで一同が安心して鞆を投げ出し、埃つぽい編上げの紐も解いたのである。だが少々渋ったのは桃色のスカートキヤシヤの、鼠色の華奢な眼鏡の、海老茶帽子の、そうした夫人同伴のB重役H会社員K工学博士あたりであった。別室があるかないかの問題である。ところが廊下でかなり騒さわついたのは昨日からの

客がかなり混み合っているようで、それに旅館の方でも例の講こうじ

中ゆう式団体客並みに何でも一坪に二、三人の鮎詰すしづめで済ませるも

のと多寡たかをくくっていたらしいのだ。一等船客の贅沢ぜいさく達が三十人

も押しかけて、それで別室別室では狼狽ろうたいしたのは町長ばかりでな

かった。やつととにかくどうにか収こまつたらしいが、そちこちの

形勢がまだ蜜蜂はちまきの函はこの穩ゆかならぬ眩くらきをひそめていた。私たちも

一旦いちだんその後あとから上ありかけたが、往来から何か意味あり気にF君が

目交めまぜをするので、また靴の紐を結び直して外へ出た。F君はHさ

んを語らつてサツサと歩き出した。そうしてその筋向いのこのS

S旅館へ這入はいると、前の会話に出た堂々たる遊廓式のまた博覧会

の竜宮風の赤ニスの梯子段をトントンであった。私たち四人に、

N老人にA警部、それにわが友若山牧水に似た鼠頭巾の小爺ちいじいさんまんせいぼしにその連れの万世橋はなにがし宿屋の主人公、この二人はお江戸の酒徒だが、さぞ今頃は縮こまって、悲しい無言の憤激をその衰えた眉根の皺に寄せていることであろう。

「へへ、どうも相済みませんで、お客様には何とも申し訳ございませんが、じたい、こうしたいきさつでがして、へい。」と、スツツと乗り出した。この蠮螋かまきり少すくからかえず神経性だと見える。その利鎌を今度は二た振り右と左で空くうに反す、その柄つかを両膝しかに確しかと立てると、張り肱ひでりの、何かピリピリした凄こめかみい蟀せむし谷やになる。

青い青い青い青い、青臭い。

「いや、なんでございますな。しゃく癩しか、癩しかでして、ええ、そもそもB

B旅館なるものが、そりやあ本斗一の^{おおみせ}大店でしよう。でしようがね、何かあればこれ見よがしだ。見識^{づら}面をしくさる。役人共とは結托する。勝手気儘のし放題で、宿屋仲間の公德を^{じゅうりん}蹂躪する。……」

公德がおかしいのか、ふふつと誰かが笑った。

「てめえどもは、御覽のとおり、安普請^{やすぶしん}のバラック旅館にはちがないのですがア。」

「梯子段はえれえよ。」

「へっへ、御常談でしょう。」とちよつとたじたじとなったが、それでもすぐに立て直して、ギョロリ眼^めの半腰^{はんごし}になった。

「何がBB、何が町長でございますだ。昨日^{きのう}も昨日、団体客が三

百人も来る、宮様の行啓中だ。さあ騒ぎだ。この潮時に一軒で独ひとりじめ占とするのも気の毒だ。半分別わけてあげよう。へん、別けてあげようが聞いて呆れるじやありませんかね。さあ収容おぼつかない。自力にあまるならあまるで、SS頼む、弱った、助けてくれでいい。そりや平生は平生、そうでがしよう。向うと此方こつちだ。商売がたぎ敵つだ。角突つき合いならどつちもどつちだ。だがいざとなりやお互の公德心に訴える。相互扶助でがさあね。」

「ほほう、相互扶助。」

「へえへえ、そうした理窟じやありますまいか。よしんばプロでもブルでも水平社でもでさあ。」

「おもしろえ、おもしろえ。」と、庄亮。

「恩を着せるにやあたらねえ。畜生、生意気ぬかすな、と、ここまでこう癩かんの虫がぐつと込みあげて来ましたね。だがでがす。まあそうしたもんじゃねえ。町長さんの口添えもあり、これも本斗のためだとひとまず胸をさすつて、そこは潔く引受けたのでがした。」

「そうかい。ふうむ、流石だ。」F君も茶目だ。

「ところで、畜生、今朝になって、話がちがった、三十人しか来ない。こちらだけで引受ける。はいさようなら。よくもぬかした。にしんかす 鯺にしんかす、ごうつくば 強突張り、どうするか見ていやがれ、と、こりやあてめえの怒るのが無理はありますめえ。」

「そうそう。」とHさんもうまく遣る。

「それに町長も町長でがさあ。そうなれば知らぬ顔の半兵衛さんだ。山高でフロックコートで、お従者ともを連れてすうと素通りで、や、SS、気の毒した、御苦労とも抜かすこつじやねえ。何といつてもブルはブルでがす。大店おおみせのBBの肩ばかり持ちやがって、成つちやいねえ。たかだか植民地の町長ですからな。無鳥島の蝙蝠へんぷくでがすな。」

「温厚ない町長さんじゃないか。風采の立派な、ちよつと珍らしいよ。」と、これは私だ。

「そりやあ押し出しは立派でがしよう。知れたもんじやありやせん。お客さんが這入られた。今度は頼むだ。ちえつ、莫迦にしていやがる。」

「まあ怒るなよ。七、八人でも僕らが来たからいいじゃないかい」

「いけません。」

「夕飯ゆうめしでも早く持って来さしたらどうだい。」少々心細くなる。

「そりや差し上げます。でがすがな。三百人の二分の一で、百五十人だ。よしきた、やつついで、暗いうちからコツコツコツコツ、なにしろ、切り込みでも容易なこつちやねえんで、やつと用意が出来て、さあいつでも来やがれとなったところで、たった八人、それもあまりものの。」

「おいおい、よしてくれ、またまた、あまりものかい。」

「へへえ、それでも癪に障りやがるんで。や、こいつあ失礼を、

はっはっ。」

「笑いごつちやないじゃないか。もう支度は出来ているんだろう。で、じりじりとなったのはF君である。」

「いや、昨日の御行啓の後でして、なにしろ、樺太庁のお役人は来る、新聞記者は騒ぐ、それに軍人、商人、何々団員で、すっかり満員の大盛況で、実は家内中へとへとになったところで、今朝の切り込みで、それで見事にス力喰ったんですからな。一同張り合い抜けの体ていでしてな。昨夜ようべだつて誰ひとり寝やしません。いたい団体客ろくに碌ろくな……いや、へへえ。」

「悲観、悲観。」

「おやおや。」

「おもしれえ、おもしれえ。」

あはははと、みんなで笑いくずれたが、

「ともかく、食べさせるのか、いつたい。」

「へええ、差し上げますには差し上げますですがな。もう一いっさい切がっさい合がっさい切種切れで、肴も付け合せも何にもありやしねえでがす。」

「それでも百五十人分。」

「いや、あれは胸くそがわるいので、根こそぎ外ほかのお客さま方へ御馳走しちやいました。遺恨骨髓に徹すで。こうなるとさつぱりしたもんでさあ。日本晴れで、へへ。」

外のお客さま方が呆れる。我々の外には一室か二室しか塞がっていないのと思うと噴き出したくもなつたが。

「そこで、こっちはどうなるんだい。」とまたF君。

「ええ、とんとまだ何ですがな。支度を致させますならこれから
でがす。」

「ふふむ。」

「や、どうも、へへ、それでは宿帳の方をなにぶん。」

くるりと身を翻すと、スツと一飛び、トントントントントと、
梯子段を駆け下りてしまった。

*

「驚いたな、これは。」

「おやおや、罐詰の筍かい。」

隣りは隣りで、

「やああ。酸っぱい椎茸だな。これは固い。や、なんだ、大和煮か。」

「はは、するめ鯛の付け焼きとは初めてだね。」

「どうです、食べられますか。ひどい晩ばんめし餐ですな。」とF君の眼が眼鏡越しに笑いかける。お互、こうなれば何か問題が起きる方が結句茶目気分の幸福を感じるのだ。

「プーアですな。プーアだな。」

「おもしれえ、おもしれえ。」

「吉植、おもしれえおもしれえで両手を振ってばかりいたって七

面鳥の卵が湧いて来るはずはないぞ。ベルをひとつ押してくれ。」

「あつはつはつ、美食家の君にはたまるまい。俺はこのトマトで結構。」

「トマトだって心がコチコチじゃないか。俺は御免を蒙る。ビフテーキでも取ろう。」

「そのビフテーキが小樽式。いや、もっとコチコチだろうよ。」

「弱ったな。F君。これはやっていますか。」と、そこで左手を一寸と口の辺^{へん}。

「サイダーにしましたよ。麦酒はまたサクラでしようからな。」

「こつちはいつてあるかい、酒は。」と庄亮の方へ。

「いいつけといたはずだがね。あつはつは、とんと貉^{むじな}の道だよ。」

「鼬いたちの道とは聞いたが、貉この道とは、これも初めてだね。」

「そうかい、鼬いたちかい。あつはつは。」

「弱る。俺はもうむぐつちよで、高麗丸へ帰りたくなつた。」

「印旛沼なら、この頃は鯉なますのあらいに鯰なますの丸焼きというところだ

ね。白焼の鰻もおつなものだぜ。」

「俺のところだつて、この頃は鮎あせのフライがある。それに鱈さわらは今

しゆんだな。コールドビーフが食べたいな。おい。」

「茄子、南瓜かぼちゃ、隠元にんにく、大蒜にんにく、うちの畑はいいよ、そりや。」

「だが、あの大蒜には閉口した。」

「あつはつはつ。あの時の君の顰しかめ面づらつてなかつたぜ。うちでは

話の種かたまりになっている。」

「ほう。そうかい。」

「ところで、ここの料理だがね。罐詰物なぞにしくなくても、なんでもこの土地の新鮮な魚や野菜を附けないのかな。」

「内地の物だとも何でもいいことにしてるんじゃないかね。これでも優遇のつもりかも知れん。」

「優遇じゃありませんよ。」と向うから声がする。

「姐^{ねえ}さん。や、酒が来た。まあひとつ遣ろう。どうだい。」

「うむ、ありがてえ。」

と、そこで口を盃へ、顔を見合せると、二人とも、や、や、や、

「駄目だな、どうも。」

「こりやいけねえ。」

と、その時、旅客課のK君が「やあ。」と這入つて来た。何かおどおどして、気弱そうな微笑を眼の縁ふちに湛ふえて力がない。立ちながら、帽子を片手で。

「どうも手違いばかりいたしまして、今日はすっかり失敗です。こちらは如何いかがでしょうか。」

「面白いですよ。なかなか。」

「あつはつ、素敵素敵。」

「虐待極れりです。」

「いや、いいでしょう。まあ。」

立ち疎すくんだK君、

「いや、あちらでは団長が怒り出しましてね。」

「やっぱり鯨詰めですか。」

「ええ、何分昨日きのう行啓の今晚ですから、居残りでかなり混雑して
いますし、宿でも町の方でもすっきり疲れ切っているのです、どう
にも行き届きませんでね。団長などは外出中に無断で室へやを取り代
えられましたのでね。御機嫌すこぶ頗る斜めです。我々観光団の面目に
関するといので、困りました。」

「鉄道省の方ではあらかじめ何か打ち合せしてあつたんでしょ
う。」

「ええ、手筈はよくついていた訳なんです。」

「まあ、いいでしょう。」

「と、こちらの方がまだ優待ですぜ。」

「じゃあ。どうぞあしからず。」と頭を下げ、K君は出て行った。

麦酒の方がまだましだろうとなつて、それから、

「玉子焼きにでもするか。」

「玉子焼きとは窮したね。」

出来るかと、女中に訊くと、出来ますという。そこであつら誂えて、チビリチビリ麦酒を嘗めていると、何時の間にか隣りではひっそりとなつた。早や影もないのだ。

待てども待てども玉子焼きは出て来ない。

「按摩でも呼ぶかな。おい姐さん。」

「玉子焼きはまだかい。おい姐さん。」

かれこれ一時間も経ったか。やつと、両手でウントコサと擁え込んだのを見ると驚くべし、直径一尺五寸余もあるうと思われる雅味のない大皿に盛りも盛ったり、恐らく十人前は焼いたであるうところの部厚な白しろまだら斑しらまだらの玉子焼きである。それにおおかたは冷めさきつている。そうだろう。これくらい多量に焼くうちには何の温ぬくみも飛び去ってしまふであらう。

「おい。二十四匹の黒くろつぐみ鵜う封じ込まれてパイの中。というマザア・グウスの童謡があるが、この玉子焼きなら三、四匹の二十日鼠は棲めそうだな。いささか非常識だね。」

「おもしろえ、おもしろえ。」

(ここで書き添えて置くが、この玉子焼きは翌日の勘定書っけには拾

何円とか書き出されていた。）

外はあかるい電光飾。

*

エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノヤアヤ。……

……

「あ、やってるな。」

山の手寄りの駅の空では赤や緑の電灯でんきが深紫の闇の中に煌々と

二列に綴られていた。何かまたほうほうと汽笛ふえのけはいもした。

私たち、庄亮と同じく襦袢どてらぎ着のタートル老人と私とは、うち連れ

て、冠木門かぶきもんに見越しの落葉松からまつといった風の軒並の前の、うち湿

った暗い通りをあるいていた。夜はもう十時に近かつたろう。

たまさかに、障子が橙色の灯影ひかげに燃え立つように明つて見える

二階はあつたが、それでもまだ素見ひやかしの客の姿も、そこらの格子

戸の中には見透かせなかつた。

だが、こうした見知らぬこの北方の夏の夜の雰囲気ねじの何処かで、内地で聴くようなあの三絃の音締ねじめがして、そしてあのエンヤラヤアノヤアヤである。

大きな貸座敷風の構えも一戸二戸はあつた。大概はまた待合風の怪しい景情であつた。

「よう。目めつけましたよ。あつはつはつ。」

N老人が突然立ち留つて、上を仰ぐと哄笑した。

土蔵風の階上の窓は開かれて、その窓の欄干てすりに横向に凭もたれて、そのまたほろ酔の棗なつめづら面を外気に吹かれていた。Dさんだ。初め私は中学校長かと思つたがそうでもないらしかつた。温厚な人柄らしかつた。すつ込もうとしたが、どっこい、N老人そうはさせない。

「押しかけますぞ。ないしょごとはすぐ暴露ばれまさあね。お連れさんは誰方どなたです。」

「や、これは、上りたまえ。」

今は仕方なしという風、それで、どこどかと這入つて、何処だ何処だと、梯子段から上つて、やあやあやあである。

「これは驚きましたね。かねての謹厳組たる皆さんが。やあ、Kさん、貴方もですか。」

そこにはわが親友Mの義父おとうさんたる建築家のK大人が、もう顔を真赤にして小さく床柱に凭よりかかって、いい機嫌で旅のころもは篠すずかけのう、篠かけのうであつた。

神戸の縉しんしやう商であるNさんなどは、飄逸な海亀さながらの長い首を前伸びに踉よろけさして、ヤレ漕げソレ漕げエンヤラヤアノヤアヤである。芸げいしや妓とも白しろくび首ともつかぬ若い女を二人ほど手元に引きつけて、それもいい加減に本性を露わしかけているのだつた。

我々一同着座。ほどよい陣形に割り込むと、さて、盃の雨がふ

る。

「へへん、何やな、おまはん狐やろかい。見なはれ。これでも芸妓はんいうてますさかい、阿呆らしやな。」

「ちえ、どうせ、狐ですよ。」と、三味線をペコペコやっていたのが、口をヒョイと尖らした。眼の縁ふちに紅べにでもさしたのか、それがなるほど白首の狐の面。

「Kさんききなはれ、これが化け猫や。樺太いうところは凄いなやな。エンヤラヤアノヤアヤや。」

「エンヤラヤアノヤアヤはおもしろいね。歌って御覧。」

「はるかに見ゆるは本斗の港みいなと、エンヤラヤアノヤア、ヤレ漕げソレ漕げ、エンヤラヤノ。」

「やはり、何だな、本斗の港だな。」

「行啓記念の唄やいいよる。へんな唄やな。」

「ははあ、そうか、ほう。」

これでわかった。拙ますい唄だと思つたが。

Nさんはいよいよ出て卑猥になる。

「ストトンストトンと通わせてえ。これが流行のストトン節や。」

「知ってますようだ。」

「今さら嫌とはどうよくなや。」

「嫌なら嫌だと最初から。でしょう。」

「いえばストトンと通わせぬ。」

「ストトン、ストトン。」

「籠の鳥はどうやな、籠の鳥。」

「知つてますよお。逢いたさ見たさに怖さもわすれえ……………」

「さあ立とう、立とう、皆さん。」

「まあ、まあ、よろしいやおまへんか。ええやええや。」

それでも、流石に勘定高い。切り上げることは知っている。すぐ一緒に立ちかけた。そしてひよろひよると狐の面にしなだれかかった。

「あら——だ。いやあ。助けてええ……………」

と、「なに泣いてはるのや。さあ、来なはれ。」

「出るに知られぬ……………籠の鳥……………」

海には高麗丸。船室ケビンの灯。町には明るい電光飾。

星。星。星。星。
空^{から}馬車、
空馬車、
空馬車。
ぽつり、ぽつり、ぽつりと、
奉迎門の明るい電光飾に、
三人の

*

どてらぎ
襦袍着の姿が埠頭はとぼの広場に現れる。中の一人は白髪はくはつに白髭しらひげである。

空は暗い。

波の音がする。

高麗丸の灯も近ちかぢか々と綴られてる、その沖に。

あ、ひらひらと何やら白いものが飛んでいる。

私は両耳に両手をあてる。

ほういほういと声がする。

と、巨大な奉迎門の黒い影、影、影、

正門と両側の小門。

あまりにシンメトリカルなその投影。

私たちは明るい反射光の中を通り抜ける。

緑の杉の葉のアーチには、にしん鯺がいる。鮭がいる。眼が光る。腹

が光る。口が暗い、尻尾が暗い。

昆布がある。烏賊いかがいる。荒布あらめが靡なびき、大きな朱色の蟹が匍い、

貝が光る。

暗い、青い、赤い。

凡すべては本斗の海産物で装飾したその奉迎門は、確かに思いつきであつた。

私は脚柱の一つに耳を当てる。

韃靼海の深い、遠い、冥くらい響きが、海鳴りが、波の音が、潮騒が、

あ、きこえる、きこえる。

「や、君は此処ここに何をしているの。」

左手の脚柱の暗い投影の中に、濃い鼠しおの潮じみ雨じみた角錐形の天幕テントが一つ、その中に、これも鼠の頭巾附きの汚れ破れた雨外套をかぶって、誰やらごろ寝していた。

テントの中のカンテラの灯、血のような豆の灯。

「夜番やばんしているのです。盗まれるといけないから。」

「何を。」

「あの鯨や蟹を。」

おお、そうして、昆布を、貝類を、鮭を、荒布を、雲丹うにを、すけとうだら、樺太鱒ますを。

エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノヤアヤ……

……

暗い暗い海、

星。

星。

星。

白いひらひら。

ほういほういと声がする。

樺太横断

ひどい自動車である。幌は破れ、車体は彎ゆがみ、タイヤは擦り減り、しかもごろた石の凸凹でこぼこの山坂道を駛はしり上るのである。揺れるの揺れないのでない。これが樺太横断を決行しようとする私たちの使用車だというのだから驚く。

西海岸の真岡から、樺太庁の所在地たる豊原まで、二十余里の山野を、蝦夷松えぞまつ、楸松とどまつ、白樺しらかんばの原生林を技けて、怪獣のごとくまた疾風しつぷうのごとく自動車で横断することは、少くともこの旅行中の一大壮挙にはちがいない。この話は国境の安別あんべつから南

航の船上で幾度いくたびか提議されたが、決死の覚悟ならとにかくまず見合せたがいいだろうとなつた。それほど危険至極の事だと噂されていた。それでもまだ私と庄亮とは諦めがつかないので、真岡に上ると、市内見物の道すから、縁へりの青い波型の飾りをそよがした例の簡素な幌馬車をリリリンリンで、最寄りの自動車屋をあちこちと探し廻つたものだ。見つけて、訊き合せるると既に出払つて一台の客待きやくまちもなかった。樺太庁のを借りようとしたが、行啓後のことで、凡てが豊原へ発つてしまつていた。で、名刺を渡して、明朝行けるようだったら本斗から電話をかけるからということにして、またリリリンリンでパルプ工場はしへ駛らした。本斗の一夜ですつかり興が醒めて、やはり団員と共に大泊へ廻航

したが安全だし、半日の小閑をぬすんで、沖釣にでも出かけようかとなった。それが朝になると、咄嗟とつさに横断きまの議が極きまった。N老人と警部のA君が飛び込んで来て、俊敏のF君が奮起なますし、それに私わたしまでが燥はしぎ出したので、重厚のHさん、風邪ひき鯨なますのわが庄亮までが、よし行こうとなった。と、汽車の時間までにもうキツチり五分しかないという。真岡へ電話をかける、勘定つけを呼ぶ、団長へ単独行動についての諒解を求める、やれ、シャツ、やれ靴下という騒さわぎで、大慌おほてに慌おそてて停車場へ駆けつけ、それから、汽車へ乗ると初めて、みんなが顔を見合せた。

「さあ吾々の団長を選挙しようじゃないか。」となる。N老人が最年長者だ、極きままった極きままったで、これは一議に及ばず可決、そ

れから誰いうとなくロツペン団なるものが出来あがつた。オホツク海は海豹島かいひょうとうに三十万羽も羽ばたいているというロツペン鳥ちようを聯想して、吾々の六人をもじったものだ。たわいのないことおびただし。このロツペン団かなり不良である。

真岡駅へ着いたのが九時。その駅前のながし洋食店の階下から見た外光はすでに白く輝いていた。自動車の来るのを待つ間に私たちは幽かに沁しみ出る額の汗を感じながら、爽やかなアイスクリームの黄を嚙すずり、水筒に水を、弁当鞆にサンドウィッチを、チョココレエトケーキ、餡あんパン、思い思いに用意した。

と、自動車の爆音がした。それが、このひどいぼろぼろの幌の、タイヤであった。高等の大型だというのがこれである。それにや

つと六人が膝と膝とを突き合せると、運転手がすぐに一人十五円ずつの切符を切りはじめた。一台六十円の貸切りという約束とは違っている。それにまた山高帽に青風呂敷の蝙蝠傘こうもりの尻端折しりはしよりの男を一人、途中から拾って無理にも割り込ませようとした。これでは乗合いであつて特別仕立てではない。貪慾にも程があると思つていると、とうとう庄亮が怒り出した。

「俺は、何だそのお、日本新聞聯盟の外報部長をしている。」
「へへ。」

「鉄道省の鉄道会員としても視察に来たものだがね。第一貸切りであるか、そのお、乗合いであるか。が問題だろうじゃねえか。貸切りならば約束外の切符制は間違っている。が、そのお、乗合

いとするとお、すでにその規定人員を超過して、しかもなおかつ
暴利をお……………」

プ……………ツ、ピツピツピツピツ、急に帽子の後頭をすく
めた運転手は、やたらに逃げ腰の、ハンドルにばかりしがみつ
いた。わあわあわあわあつという私たちの歓声に追っかけられて。

だが、危険危険、このぼろ自動車の揺れ方といったら。

*

光、光、緑、緑、

キャベツ、キャベツ、キャベツ、キャベツ、キャベツ、キャベツ。

おや、パルプだ、小舎だ、あ、紅だ、あか紅だ。陽炎、陽炎、陽炎。

崖だ、楸松だ、熊笹だ。あ、たに谿々々、や、いたどり虎杖だ、と、パンクだ。

「やったな。」と揃って飛び下りる。

と、また私たちは、高原の、一路坦々たる、おおいたどり大虎杖の林の中に在る私たちを見出した。

虎杖のやや赤ちやけた虫くい葉の日盛りである。

自動車は投げ出されたように傾いている。黒と灰色との巨大な昆虫だ。暑い土埃がふっかけて遠く白く奔つてゆく。運転手はまた同じような擦り減らしのタイヤと取り替える。しきりと尻から

蹲かがんでポクポクカンカンである。

しんしんと虫の音ねがする。

さらさらと何かの葉はずれがする。

強い強い草いきれである。青、青、青。

そこで六人が、A、A、A、A、A、Aの形に帽子を脱いで駆け出して見る。麦むぎ稈わら、パナマ、ヘルメット。光、光、光。

「あ、紫だ、や。」

「ブシの花だよ。」

アイヌのブシ矢の塗料の有毒植物のブシの花の新鮮さ。

私はすなわち葡萄ぶどう入りパンをかじり出す。

ひゆう、ひゆう。………

あ、ほととぎすが翔^{かけ}る、翔る。

*

第二のパンクした時、私たちは青い青い樺太^{ふき}路の林の中にあつた私たちを見た。

おそらく一丈にも近いだろうと思われる樺太^{ふき}路のすばらしい高さ、その紅い線の通つた六角形の太^{ふとぐき}茎、裏^{うらじろ}白の、しかも緑の表面の、八月の日光を透かす夕立のような反射。

なんと爽快な嵐、

なんとまた大きな蝸^{かたつむり}牛だ。あ、その触覚のアンテナは聴く、

J O A K、こちらは東京放送局であります。

あつ、そうだ、今はちようど童謡の時間だ。

そこで、サンドウイツチだ。

私は道端の巨大な落の根に両足を投げ出した。清浄な、また沁み出るような葉緑素の濃い香気がした。いや、氾濫だ、大洪水。

庄亮は向うの落林を掻き分け掻き分け見えなくなつた。野天の排泄、と思うと深い呼吸がこちらからも放たれてゆく。

開放された、全く。原始の自由のこの簡朴。

ただ、黙々と光る麦稈帽。

私はしみじみとまた、私のホワイトシャツの、自分の汗のにおいを嗅いだ。流るるようなこの汗。

なんとすいすいしたサラダと辛子だ。このハムだ、パンだ。

「どうぞすい。」と、白髪白髯はくはつはくぜんの、そして朱面の、白い麻の支

那服の、頑健そのもののN老人が立ちながら、その頭の上の落の葉の一つを仰いだ。

驚くべき葉脈の太い線。その亀の子形。

緑色の太陽。

ポキリと音がした。

あつ、折つたのだな。

おお、歩いて来る、動いて来る、輝いて来る、ひるがえ翻つて来る、一

枚の大きな落の葉が。

かが蹲んで庄亮が構えた、その巨大な茎の中ほどを握つて。

私はマツチを擦った。一本。なんと生きた赤い火だ。
カメラだ。そこだ。パチツだ。

*

第三のパンクした時、私たちは鬱蒼うつそうとした樺太柳の、白楊の、
また絹柳の緑蔭にはいりかけた私たちを見た。

木の橋があつた。潺湲せんかんたる清流があつた。

水は澄み、何か走る魚鱗の光が見えた。

「鮠はえかしら。」

「いや、鮠やまめかもしれない。」

向こうに山があつた。榎松の林があつた。熊笹の柔かそうな微風の深い斜面の裾にはまた、くれないおいらんそう紅の華魁草に似た花が見渡すかぎりのお花畑を作っていた。

「何の花だろう。」と私は訊いた。

「やなぎらん柳蘭です。」と運転手は、タイヤに空気を入れ入れ振り返つた。

来る道でもよく目についた花だったなど、私は肯うなずいた。あ、あの紅いのもそうだったのだ。

黄色い、安別で花はなむら叢を成したあの丈高い女郎花おみなえし風のも咲き乱れていた。

しもて下手はまた、風に楊が葉裏をかえ翻かえしていた。

その銀、銀、銀。

水面のまた閑かな投影、しだれやなぎ枝垂柳の深さ。

白い雲、やや潤うるんで晴れわたった空、大気。

私はまた立ちながら、ポケットから赤い一箇のトマトを取り出して、しゃぶしゃぶかじった。

おお、滴たれる、滴れる、トマトの漿しる水が。

「ええ、おい、桃太郎の桃でも流れて来そうなところだな。」

*

道は楢松の原野から楢松の山林に入り、いくたび幾度かまた原野に下

り、また山林をのぼってゆく。

そうして山々はますます深く、自動車は迂廻し、迂廻し、山腹をのぼってゆく。

椴松の梢は寒く、林は黒く、そうしてその間からちらと青い空を覗かせてはまた濃く黒く密叢した林となる。

「ここは何という峠だね。」

「熊笹峠です。」と運転手が答えた。

なるほど、熊笹の大なだれの波のうねりは驚くべく光滑に、また底に暗んで、しかもいかにも寝よげな絨氈の青みを重ねた。それが近づけば近づくほどの深みを撓めて見えた。

光が天の一方から流れる、流れる、流れる。

鬱らんき気か、冷氣か、雲が迅いか、日がかげるか、自動車の捲き起はやてす疾風か、私たちの胴ぶるいこそは繁くなると、

ああ、古蒼なさるおがせが椴松の高い枝にかかっている。

風邪かざけ気の庄亮に私は私の緑のレインコートを頭からかぶせた。

私の黒いアルパカが吹かれる、吹かれる、吹かれる。

からまつの林に入りて、

からまつをしみじみと見き。

からまつはさびしかりけり、

旅ゆくはさびしかりけり。

この落葉松の私の詩を、私はまた思い出した。
 ああ、その落葉松の林にもはいつた。

*

おそらく、私たちを乗せた巨大な甲かぶとむし虫は、今は一千五百尺
 以上の山中を驀ぼくしん進している。

霧は霧を追って奔はしった。風は風を吹き落して奔はしった。
 と、遙かに、思わぬところに海の一面が見えた。

あ、黒い黒い韃鞞だつたん海。

真夏の卷けんうん雲。

まさしく、自動車は逆行しつつある。と思う刹那にまた山頂の一角を繞めぐった。榎松の原野がまた眼下に見えて、今度はひた降りに疾走する。

真岡から此処までのうち、私たちは、ほんの二、三戸の一部落を見たのみであつた。

幽邃ゆうすいと幽深と、北方の原生林の陰鬱な植物の威圧と無関心と、

「君とオわかアれて、コラサ。」である。

「松原ゆウけエバア、コラサ。」

や、赤、赤、赤、黄、黄、黄、白、白、白。

安来ぶしだ、

三味線だ。

飾り屋台だ。

や、や、や、^{たすき}襷だ、^{べに}紅だ、^{ねえ}姉さんかぶりだ、浴衣だ、赤い蹴^け出

しだ、白足袋だ。や、や、や、や。

一、二、三、四、五人。

コラサツと^{ざる}笊を両手で、コラサ。

しかも、くわつと明つた真つ白い大道のまん中である。コラサツ。

私たちの自動車は、思わぬこの娘^{じょうし}子軍の出現にいきなり前方を塞^せかれて、たじたじとなるとガソリンの爆音のみ、いたずらに

我が天心へ反響さして、さて停ると、ますます燥はしやいで、浮かれて、ひつかかえたペコペコ三味線の連れ弾きと来た。

コラサツと、コラサツと、

無言の鱒どじょうすくいの足取りが左へ左へと腰をひねって廻まわってゆく。いつたい、此奴こいつら、人間であるか、ただしは山の貉むじなであろうか。それは知らぬ。ただ踊る姿は人間の女で、箆へらは手振は足取りは鱒すくいにちがいない。

何たる奇怪。

私は眼をこすった。

一同も総立ちになった。

「安来せんげエ……エエ……ン……ン。コラサイイ。」

「なアんだ、後家さんか。わっはっ。」N老人が、そして、ひゅうと指笛を鳴らした。

「おもしれえ、おもしれえ。」庄亮だ。

「あっはっはっ、こりやいい、白秋さんどうです。」

飛び込んで、よっほど、その踊の輪の中に這入って見ようかと、麦稈帽を箆に、ワイシャツの、ハンケチの頬かぶりで思わず立ちかけたが、相手を見ればそうもならず、ただ顔をあかくして笑っている、いと、いと、

「白秋やれやれ。」と庄亮が後ろから背中をこづいた、こづいた。それは全く踊りたかつたのだが、惜しいことをした。夫子まだ悟入しないと恥入ったな。

だが人ひとりにも絶えて遭わなかつたしんしんとした原生林のこの道中の、突如として起つた、この三味線の、紅の襷の、鱒すくいである。私の動悸はまだ収まらなかつたらしい。

よく見れば、おしろい白粉こつてりの女どもであつた。

小さな、おもちゃ玩具よりやや大きな飾り屋台には桜の造花をつらね、

赤と黄との幕を張り、金壺円何々殿寄附のビラさえ二、三枚は風に吹かしていて、さて、曳いて、歩いて、また輪になつてコラサツであつた。

だが、あたりには家も見えなければ人影も見えないのだ。

天には日がちいさいちいさい。

F君が銭を投げた。

ところで、また、白日はくじつ光耀こうようの下で、形もない鱈たけの、日のこぼれの、藻屑もくずの、ころころ田螺たにしの、たまには跳ね蝦えびの立鬚たてひげまで掬おうとして、箆をかるく、足をあげ、手で鼻をつまみ、振りすて、サツとまた箆を、空へ、コラサツである。

色っぽい、色っぽい。

「やははい。」と顎を出す、眼で挑む、「旦那やア。」となる。それ逃げ出せと、甲虫の突進だ。

サツと、娘子軍途を開く。そこで私も銀錢を目つぶし、チャリばちンと撥で受けると、片眼のそのお婆が、

「へい、ありがとう。」

「行ってらっしゃい。」「ごきげんよう。」「また、今晚ね。」

チユウと鼠鳴きだ。

狐につままれたかな。

ああ、榎松、榎松。さるおがせ。

*

「あいつら何です。」

「白首しろくびでさあ。」とN老人。

「あ、家が見えて来た。」

「どれ、ほう、村だな、村だな。」

「や、お祭りらしいよ。」

それでわかった。あの娘子軍の一行、浮かれ浮かれて、村はずれを、人の気もない山へ山へと練り出した、そこで遭遇でっくわした私たちだったのだ。酔興だとも思えるが、流石に原生林の中の寂しい生活者の姿である。

「ストップ」と誰だか怒号どなった。

ビールやサイダアのビラがある、「ひやむぎ」と書いた貼紙、店は開け放して、長い床しょうぎ几が二、三脚、硝子の簾すだれ、造花の軒飾り、祭りの提灯。

物珍らしさに、私たちはその土間へずかずかと這入つて見た。そうして黙々と肢や脚を揉もんでいる卓上の銀緑の蒼蠅あおばえにこれと目をしかめた。

「ひやむぎでもやるかな。」と私が笑うと、

「健啖だなあ。」と庄亮が驚く。

だが、ビールの一、二本がすぐと抜かれた。

いわゆる後家さんの屯所とんしよであろう。それらしい二、三軒が向

いあいのじしに、その新聞紙貼りの二階の壁までが露わに見通せたが、

野猪のじしのような毛むくじやらの男の幾人いくたりかの顔も、とある廂ひさしの下

に何だか陽気そうに集っていた。外に荒物屋が一軒。

此処が清水村逢坂。

何でも、そこらの山林にいる伐木人夫どもが、たまに酒でも飲みやつて来ようという、ほんの五、六戸の部落らしかった。それでも何という寂しい夏の祭りであろう。晴衣著た子供たちの姿

も見えなければ、化粧した若い女のけはいもしなかった。

いや、ありつたけの娘子軍は、すでにチャンチャカチャンチャカ
力の鱒すくいに出払ってお留守なのである。

そこで、水筒に水を入れ替えて、またガソリンの爆音を立てさせた。

*

林が林に続いた。高原が高原に続いた。

露領時代のままのえきてい駅えきてい通が或る林中に幽かに薄紫の炊煙を立てているのも見た。その駅通は丸太組で、極めて簡朴な、そうして

異国風の雅味を持った建築であつた。それに赤みがちの錆色にも古びが付き、硝子窓の切り方などかなり凝つて、尖つた屋根飾りや軒飾りなども単純で、いかにもまた雪の深い樺太の情趣を忍ばせるものであつた。

蹄鉄、ながえ長柄の鎌、フオク、斧、なた鉋の類がその土間には放り出されてあつた。

日の光が、黒い椴松の梢々の間でちらちらした。

薄ら寒い雲の流れでもあつた。

と、その上手の、かみてまだ木の香のなまなましいバラツクの、戸は引いて、窓も閉めたのが、その中では何か盛んに喧騒していた。たしかに酒に酔うた五、六の人間の放歌ほうかこうぎん高吟がきこえた。

そのバラックの前に黒塗りの立派な函自動車はこじが待たしてあった。私たちの甲虫はその前をまた爆音高く通過した。

*

私たちはまた、こうした原生林の中の幾つかの駅遞や部落を通り過ぎた。部落といつても全くの寒村で、急勾配の廂の長い丸太式の家が二戸か三戸か、ほんの飛び飛びに並んでいるきりであった。

山はいよいよ高く、林はいよいよ深く、道はいよいよ迂回して、気流はまたいよいよ冷ゆるばかりであった。

霧が驟雨のように流れて行つた。

ああ、さるおがせ。寒い寒い幽かすかな糸状の懸垂。英国風のクラシツクな風景画の黒楸の骨格。その枝々のあのさるおがせ。

そうして、私はまた見た、その背景バックの白い雲の峰を、また、密叢した落葉松を、

赤楸と赤だもの疎林を。

そうしてまた暗い谿谷の中腹の白く輝く白しらかんば樺を。

何という処女林、清高な、犯し難い、しかしまた永遠の神性。

私はまた想像した、雪に埋うもれ、氷に閉され、伸びては枯れ、枯れては生おうる林相の無常を。またその光明を。

あ、あれは何だ、あの赤い実の鈴生つた蔓草は、やどり木は。

あ、紅葉も見える。もう秋だ。ああ、もう秋だ。

*

山峡^{やまかい}である、ややうち開けた。

リュクサツクを負った、絵の具函を水筒を肩から掛けた、三人の角帽の学生姿が流るる霧にぼやけ、日の光にまた現われて、その幽かだったPPPが急に大きい影像をつい目のさきに爆^はじかせて、逆に振り向くと、「やあ、やあ、やあ、やあ。」と満面の笑顔を輝やかせた。

「やあ、君たちだったの。」

「おお。」

「ほう。」

「M君、や、T君もだね。」

「Y君、これは驚いた。」

口々に私たちも驚いて帽子を振った。自動車は停った。日本医専の二人に工科大学生の一人であつた。

彼らは徒歩で昨日真岡からすぐに発足したのであつた。

「さあ、乗りたまえ。諸君。」

「つかまっていますか。」

と、早速に両側の踏台に飛び乗った、そうして上の幌の柱にいらぬれもぶら下つた。甲虫に黒蟻が取りついた姿勢である。

「貸切りだよ、かまわないよ。」

庄亮がすかさず、運転手は笑わず、ポウ、プツプツプツプツプツである。

「昨夜は何処へ泊りましたい。」

「逢坂です。」

「なるほど、これはおえらい処へ。あつはつ、彼あそこ処の後家さん綺麗でしたかい。ことにM君などは大もてでござしたろう。」

「僕らはそんな不潔な処へは泊りません。荒物屋です。奥さんは立派な人です。」

とMがムキになると、

「へえ、あつはつは」とN老人が哄笑した。

霧がまた驟雨のように私たちを追い越して行った。

午後の日もよほど廻つたらしい。

きょうきょうと何鳥か啼いて、また幽かになった。

ああ、黒楸、

さるおがせ。

*

一望の耕作地、鈴谷^{すずや}平野。

いよいよ私たちの自動車は最端の峠をその麓の坦道へと迂回し初めた。

だが、その山腹のお花畑の美しさは、その紅は黄は紫は、全く
何に譬えよう。たしかにそれらは高山植物の気品と清香とを充ち
満たしていた。

ああ、光がのぼる、のぼる。

ああ、また、なだれる、なだれる。

風だ、光だ、反射だ、影だ。

その中へ目がけて、私たちの巨大な昆虫はまっしぐらに驀進す
る。

と、また、山火事に焼け黒ずみ、また雪に雨に白く晒された椴
松、白樺、落葉松の疎林が、ほうほうと寒い梢を所在に震わして
いる。その閑寂、その地じの華麗。

「山火事跡かな。」

「いや、開墾のために焼いたんだろう。」

「だが、少々焼き過ぎたね。」

「飛火とびひしたかも知れないさ。」

私と庄亮とはこう問い答える。

螺旋状らせんに段々と下降しつつ、俯瞰し、また大観しつつ、遙かに、翠緑の丘陵を平野のあなたに発見し得た私たちは、いよいよ、豊原に近づきつつある喜びのために歓声を挙げた。

まだまだ三里か四里かはあるだろう。

突進、突進。

赤、赤、赤、赤、べに紅、紅、紅、紅、黄、紫、黄、紫、赤、赤、

赤、赤。

飛躍、飛躍。——咆哮、爆音、風、風、風、風。

*

「あつ、パンクだ。」

「また、やったな、ちえつ。」

と、この第四のパンクの時に、それこそ私たちはもう曠々ひろびろとした平野の耕作地にすべにり込り込んでいた私たち自身を見た。

まことに砥とのごとき途上であつた。

両側の畑には穂に出て黄ばみかけた柔かな色の燕えんばく麦ばくがあつた。

またライ麦の層があつた。トマトの葉の濃みどり、甘藍のさ緑、
 白い隠元豆の花、唐黍のあかい毛、——
 また、飛び飛びの伐り株、測量のテント、道端の虎杖、そう
 して樺太露。

立ちつづく電柱の薄紫の碇子、針金。

麦粉、乾草を積んで東し西する荷馬車、また俵のうえに眠つて
 ゆく少年。

ああ、なんだかフィルムで見たエルサレムへゆく巡礼道の情景
 と、そっくりではないか。

お、馬が来た。農作馬車だ。粗末な土まみれの木柁の中に十五
 と十二ばかりの眼の大きな百姓娘が坐っている。

馬はぼくりぼくりと傍らの落の葉の林へ這入つてゆく。

ほう、馬の首が落の葉にかくれた。妹の娘が振り返つた。あつ、姉は澄まして馭ぎよしてゆく。うれしい緑のこぼれ日、こぼれ日、こぼれ日。

「此処で、何です、いつか自動車が顛てんぶく覆ふくしましたんで、人死にがありました、それで豊原道みちは危険だとなつてしまいましたんですがね。いい迷惑でさあ。全く運転手の過失で、こんな何でもないところで飛んだドジをやつたものです。」

運転手ははずしたタイヤをガバガバと地上にひつ転がすと、今度のまた破損の箇処ところにゴムの継ぎを当て当て、アラビヤ護ゴムで粘着くっけると、トントンと叩いて見た。これからまた例のポンプで

空気を吹き込もうというのだ。技倆の未熟も恐ろしいが、掛替えさえも一つしかない、それでももう四度もパンクした、継ぎはぎだらけの膏藥貼りのタイヤの、このぼろぼろ自動車に乗った者こそ災難だろう。危険千せんぼん万だと思うと笑いたくもなった。それでもまだどうにか此処まで来られたからいいようなものの、逢坂あたりで、代りのタイヤもパンクしました、もう動けませんとでもなつたら、命は無事でも、行くにも行けず、還るにも還れず、一同立往生の憂目うきめを見た事だろうと思うと、思わずほつとしたものだ。どう見たところで熊笹峠にせよ箱根の新道ほどの危険な懸崖はなかつたと思えた。

どちらにしても、もう豊原は近いのだ。

「御迷惑さま、さあどうぞ。」

結局パンクの数の多いほど、今はかえって楽みであった。何故かといえ、その度ごとに、私たちは十分の暇いとまを得た。眺望し観察し散策し撮影もしたのであった。だが、もうこれきりであろう。

自動車は駛り出したが、相変らず揺れる、揺れる。

お、誰だか長い柄の草刈鎌で、一面に熟れかえった燕麦をスウイスイと刈り立ててる。

いい香においだ、いい香いだ。

*

観ると、いつのまにか、めあて目当の鮮やかな丘陵の緑に、裾の鼠にぼやけた白い重い雲がかぶさっていた。

その梢の隠された疎林、疎林、疎林。

斜陽はすでに黄ばみかけたが、さして強くは輝かなかつた。

ただひろびろとした燕麦や豆の畑に、何かしら冷氣だった物の影が流れて、また明るともなく後あとあか明りしては陰って行つた。

だが、道はいよいよ善くなつてゆく。

なんといい豊原道だ。

向うから小さな人影が来た、生きて動いて、何か帽子に幽かな円光をた発して。陽を真正面まともに受けたのであつた。

一分………二分………

車体はイキナリ左へ投げ出されかかって停った。凄まじいパンク。

すれ違いさま、あわやと見たので、思わず急角度で避けようとしたのである。転覆こそは免れたが、今度こそ道の真ん中でパンクしてしまった。

「危険危険、あつはつは。」

「やりきれねえ、やりきれねえ。」

だが、私たちはまた道端のやや高畦たかあぜの斜面へぼつぼつと凭りかかったり、蹲かがんだりした。わが庄亮は「やりきれねえ。」といながら、歌のノートを取り出しては書きつけて、ともかく悦にはいつていた。

「しつかり頼んますよ。」と謹直なA君が今度ばかりはからかい揶揄気味にきめつけた。

運転手は一生懸命であつた。

この第五のバンクが騒ぎとなつた。

ところへやみくも闇雲に後から驀進して来た一つの高級自動車があつ

た。あの露西ロシア風の馱遞の前に見たのがそれであつた。

酔つてる、酔つてる、全くもつて、山高帽の、モウニングの、

また麦むぎ稈わらの背広の、眼鏡の、ホワイトシャツの、藤とう八拳はちけんの、

安来節の、わいわい騒ぎの眼と鼻と口との連中が、不意にその前途を塞がれたので、停ると、いきなり、

「こりや、やい。ポンプ野郎。」となつた。

「こりや、やい。」

「うむ、こりや、やい。眼があるか、やい。」

「天下の公道だぞ。不届者奴^め。」

「往来だぞ、公道のまん中でパンクする奴ウがあるかア。」

「規則違犯だぞ。」

「赤だも、そつち避け^よい。」

「林野局のお通りだぞ。」

「下郎くたばれ。」

「ばかア。」

運転手はへえへえで、それでも手順も一向につかぬか、あ、また、螺旋卷^{ねじまき}ばつかり廻している。

こちらは、ほう、あの御仁体が樺太庁は林野局のお役人だそう
など眺めている。

「早くせんかア。」ドドドン。

「ひっしよびくぞ。」ガタガタ。

「こら、こら。」ドンドン、「馬鹿野郎ツ。」

いくら躍鬼やつきとなつたところで、そう早急に始末のつく訳はない
のだから、もうこれで五度のパンクでいかな膏薬万能のタイヤで
もそうそう無理な治療が利こうはずもなし、気長に待つより仕方
があるまいと、こちらはみんなが呑気である。

空に孔でもあかないのかなと、私は仰いで手枕だ。

そこで庄亮、「おい白秋、長柄の鎌でスウツスと刈つたらなあ、

あの燕麦を。」

俊敏F君観察だ。手と足何本突き出した。

重厚Hさんはただ苦笑いでカメラをそつちへ向けている。

和製タゴールさんは大茶目だ。びゅうと指笛でも吹きそうだ。眼鏡を片つ方はずしてゐる。

医専の一人はスケツチだ。畑の向うの楡にれの木はいい形だなど、やっている。外ほかの一人は実直だ。心配そうに避けている。

工科のY君、流石である。ガバガバパンパン手助けだ。

警部のAさん京都府だ。知らぬふりです。めんどうだ。

「こりや、やい、観光団の馬鹿ッ。」

「頼たのも母子講しこう。」

「竜宮の身投げ。」

「助平じじい。」

「イヨウ、ハイカラア、ふとつちよう。」

「ちきしよう。」

「何しに來たア。」

「榎松強いぞツ。」

「さつさと行きやがれ、へへんへんだ。」

おやおやと、こちらは眼交めまぜで、取り合わぬ。

「やいこりや、天ン下アの公道だじよツ。」

「ひきしよびくじよツ。」

「ばきややろうツ。」

だんだん、お声が悲しくなる。

この間あいだおおよそ二十分間。

やっと、形ばかりの修繕を済ましたと、

また後ろでは勢いきおいを盛り返した。

「待てえッ。」

「俺の方を先きへ通せ。」

「寄せろ。」

「名刺を出せッ。」

この時、庄亮、剣道仕込みで、すうつと立ち上ると、

「運転手君ッ、さあ、お通してあげるぞお。諸君、押してくれたまえ。」プップウプップウ。擦り抜けると逃げた逃げた、一目散

である。

「えらいお役人もあったものだね。」

「ええ、どうも威張りくさって困るのです。」と運転手。「植民地ですからなあ。」

「だがそのお、パンクして交通を停めたのはこちらの失策だが、一度叱れば済むことを、そのお、しちくどいからね。」

「僕たちは林野局の局長のAさんへの紹介状を持って来ているんです。今夜も泊めて貰うはずですから、いいつけてもいいです。」と医専のM。

「まあ、いいさ。黙っておくさ。」

そこで、私たちはまたぼろぼろ自動車へ乗る。ぶら下る。駛り

出す。

また、パンクだ。

「ええ、もう一里弱ですから、このまま滑走してしましましょう
」。

これにはみんなが笑い出すと、

「ようし、やれ。」

「やっつけえ。」

驀進、驀進。

*

揺れる、揺れる。

や、楊だ、並木だ、光る、光る、光る。

や、紅葵だ、

向日葵、向日葵、

や、西瓜の花だ、縞西瓜だ。素敵。

「や、や、露西亞人の家だね。いいな、あの丸太組みの建築は。」

「いいなあ、広い通りですな。」

「や、旗など出してますよ、お祭りですかしら。」

「や、豊原だ、豊原だ。」

「万歳。」

「万歳。」

「びゅう……うる……る。」

*

と、町へ入る左口、とある広場に、これはまた大げさな灰色の
テント
天幕。

おお、あのトロンボオンは、

クラリネットは、

おお、あの喇叭ラッパ、

おお、太鼓は、銅鑼は、

そうだ、チャリネ曲馬、チャリネ曲馬。

滑走、滑走、滑走。

そこで、ふつと振り向く、ちらと眼に入つたは、天幕テントの前、象だ、象の子だ、小さい、背中に金と赤との印度織りの鞍掛かぎばなけを着せられて、垂れ下つた両耳の、長い灰いろの釣鼻ゆを揺つては振り振り客呼びしてる。や、や。

「あ、君、象の子がいる、象の子がいる。」

小沼農場

緒あかいガサガサした粗皮の楸松、蝦夷松、たもの木などの丸太で組立てた樺太庁農事試験場の歓迎門は流石に簡素であつた。まことにいい趣味だと思わせた。

私たちの一行は小沼こぬま駅へ着くと、すぐに線路を越えて、その入口にかかった。よく掃かれて塵一つとどめぬ白い農園道は、坦々として真っ直ぐに熟うれいろ色のライ麦や燕麦の畑中を通つていた。行啓の名残で、黄や赤や紫や青やの万国旗が此処でもまだ翩へん翻ぽんとしているその下を、薄い翅はのかがやく蜻蛉とんぼや蝶々の番つがいが、地に

すれすれに流れたり纏れ飛んだりしていた。空は蒸しても何かしら光らぬ北方の曇天であつた。

豊原から此処までの二駅の間は、たも、ばつこ楊、落葉松の疎林に紅紫の楊やなぎらん蘭やまうどや薄黄の山独活、ななつば、蝦夷蘭の花がまだ野生のままに咲き乱れて、ただ処々に伐採跡の木の根っ株が顕れていた。だがこの小沼へ来ると、総てはうち開けて整然とした穀物と野菜の祭りが私たちの前にあつた。

案内役は林野局の局長のAさんである。

前夜、私たちはあらかじめ定められた北一条のH屋旅館にひとまず落ちついて、大泊から廻つて来る同勢を待ち受けることにした。その晚餐後、最寄りの書店で絵葉書をあさっていると、其処

へ医専のTが這^{はい}入つて来た。

「どうしたい。」

「Aさんの官舎へ泊めてもらうことにしました。きさくな人です。飲むとおもしろいんですよ。非常に歓待してくれましてね。そしてずっと泊つていいといつてくれます。」

「ほう、それはいいね。」

「先生を知っていますよ、Aさんは。なんでも弁当箱に書かれたことがあるでしょう。愛翫しているそうです。小田原の親戚からもらったといっていました。Aさんも相州の人だそうです。」

「ほう、あの醍醐味かね。」と私は驚いた。

実はこういうことがあったのである。

私がまだでんじょうじ伝肇寺の間借りをしていた時代だからかなり古い話である。海岸のKという人の貸別荘によく遊びに行つたものであるが、ある時、やまもとかなえ山本鼎君と二人で、その奥座敷で快く饗応されるままにいい気になつて、海を眺め、半日の小閑を楽しんでいた。

主人は手のついた白木の弁当箱を持ち出して何か書いてくれという。そこでよしよしと酔筆をふるつた。それが醍醐味の三字であつた。いつかしらまた、それがAさんの手に入ったものであるらしい。主人は土地や山林に關した仕事をしていた。商才に長たけてなかなか機敏な人であつた。

「一寸、林務官が見えていますから。」と時々中座した。その時

の二階の客というのが、今思うと恐らくAさんであつたであろう。私たちは陶然としてしまった。もう少し酒興が深めばいよいよ羽化登仙というところで、サラリと正面の襖からかみが開いて、コツコツと杖こそ突かぬが、ぬうと這入つて来たは白髪白髯の老紳士とその老夫人であつた。主人は後から元気な赤い顔をして蹶ついて出て、「ええ、こちらが十二畳でございます。」と、上座の私たちを、目八分に透かすと、

「只今、ここに御酒ごしゆをめしあがつていらつしやるのが北原白秋先生に山本鼎先生でございます。お家賃は百五十円で。」

「おいおい。」と鼎さんが私の袖を引いた。

「僕らも家賃の中へはいつてるらしいよ。」

「や、こりや驚いた。逃げよう逃げよう。」

向うでも流石にすぐに引つ込んだが、後できけば、ゆうふうく有福な
にがしの子爵とやらであつた。

二階の客も逃げたらしい。小田原旧城の倒れ木の払い下げもつ
いぞまとまったという話もきかなかつた。

ああ、あの醍醐味の弁当箱かと、私はまた独で苦笑した。

そのAさんは背の高い瘦形の、鼠の背広に麦稈帽という軽装で、
気前よく私たちの先へ立つて行つた。役人臭のない、極めてさつ
ぱりした中老人である。そうして時々突拍子もない諧謔を弄した。

(だが、その翌日、林野局に私が挨拶に行つた時は全く硬直した
官僚的態度で、や、そうですか、や、と大きな事務卓を隔てて、

にべもなく私の純情を跳ね返してしまった。そこで一寸てれた形になつた私はそこそこに辞去したものだ、同じ昨日の人でありながら、こうも役所では変れるものかと不思議でならなかつた。これは別に悪い意味でいうのでない。私にはわからないから呆然としてしまったのである。)

さて、私たちの歩みが薄紫の花のむらがる馬鈴薯ばれいしょ畠の前に来たところで、何か親しい秋雨のような細かな霧雨も降り出して来た。

*

この菜園でも、白い蝶のひらひらが低く、燕麦の穂から穂へわたつていた。蝶の翅つばさも幽かに雨を感じたらしい気けであった。

菜の花の鮮黄の群れも目についた。

もち稗ひえも熟れていた。

亜麻畠のややほの青みを保った熟いろの柔かさにおやかさは何ともいえなかった。まだ紫の花がちらちらと残つて、多くは小さな小さな円い実をつけ初めていた。

菫にんにく葱の花の大きなやや毛ばだった紫の球にも細かな霧の小雨がかかっていた。

庄亮はノートに歌を書く。

私は標木を読んで行く。

ライ麦（アルコール原料）かな。

アムール、

サクソン、

スプリング、

浦塩、
ウラジオ

アプルツク。ランランラン。

やあキャンデータフトか。白い花、これはいい花、写生しよう。

や、トマトだ。
ばんか蕃茄か、アリアナか。

や、や、
かぼちや南瓜だ。ころげたな。

デリシアスかい、

ハツバードか。

まさかり南瓜だ、驚いた。

魔法杖でもちよいと振りや、娘ふたりがダンスの沓くつにもなりそ
うだ。躍れよ躍れよ、おどり沓。

や、草苺だ。ド、レ、ミ、ファ、ソ。紅いな紅いな、雨の粒。

や、木柵だ。御免なさい。

ほう、すかんぽだ、枯れ花だ。

朝鮮黍きびだ。唐黍だ。

青刈り用とはフレッツシユだ。焼いて嗅ぎましょノスタルジャア。

や、や、なるほど、秣まぐさにしますか、勿体ない。あかい垂れ毛も濡
れている。

なんと緑の疣いぼいぼ々だ。胡瓜きゅうりの花も顔まけだ。

やつ、いい凶案だ。花椰菜はなやさい。民謡集の金版かなばんだ。

やあや、火焰菜かえんさい、火のようだ。ゴールドビーフのつけあわせ。

アメリカカぼうふう
亜米利加防風、ちさき、セロリー。ゴールドデンセロリーは金の

茎。

スウエーデがぶら
瑞典蕪、大蕪、銀の鰯いわしがちらかれば、さしずめわたし

の雲母集きさら。

人蔘にんじんの髯、七、八寸、家畜用だと人はいう。

や、蜜蜂だ。ぶうんぶん。胴は花粉で真つ黄だな。花の色より

まだ濃いな。

おい、おい、庄亮、歌ができたぞ、四五句だけ、

大麦黄なり夏蕎麦のまへ

白花じゃがいも、赤いもだ。

紫の花、白いもだ。

雨、雨、雨、雨、傘さした。

私は口笛吹き吹き行つた。

洋館前の芝生には、円い花壇がふたところ。

実に愉快だ。黄だ、赤だ、雪白、紫、緑いろ、

白玉葵^{あおい}、赤玉葵、

スウィートロケット、シヤスターデーシー、

また、金蓮花、

そして、ちらちら、コスモスの淡紅うすべにいろの花盛りだ。

そして細かな雨がふる。

裏へと口笛吹き吹き行くと、

蔓つるぼそせんなり細千成、茄子の花、おはぐろつけたて中年増ちゅうどうどしま、

黄と白、赤の葱坊主、毛槍かつげばともやつこ供奴、

人蔘の花、八重垣姫の花かんざしの額ひたいがみ髪、

花の痛いは種牛蒡ごぼう、勸進帳すずの篠懸すずけだ。

此処にも細かな雨がふる。

ピッチピッチ、チャップチャップ、ランランラン、

ピッチピッチ、チャップチャップ、ランランラン、

あ、あ、牧舎が見えた。

なんと抒情的な異国風景、

ああ、はるにれ春榆、さんざし山査子、しらかんば白樺、

広い広い牧草の原、

あ、羊だ、羊だ、遠くを人が追って来ている。

牧歌牧歌と誰やらが叫んだ。

私の小唄は閑かになった、浮かれ心は。

小雨も幽かすかに小やみになった。

*

洋風の牧舎の様式は早速に小型の黄色いノートを私に取出さしめたほど私を魅了した。私は克明に写生した。

その屋根は上部で段がついた深い急勾配で、正面から見ると将棋の駒の外観をしていた。棟むねには幾つかの空気抜きの小さな塔が並んでいた。屋根裏の窓は広く二層になって、上のは小さかった。入口は思い切り大きい両開きの木の扉が左右に裏板を見せて、ほの暗い内部を透かした向うにかつきりした長方形の雨空と緑との画面がうち明っていた。

私たちは紅い火焰菜の根を掌てのひらにのせた場長さんの後に躡つ

いて、濡れ雫の蝙蝠傘をすぼめすぼめ這入つて見た。

第一は牛舎であつた。

其処には通路を中にして、両側に対い合せに間割りまじきがあり、その一つ一つに、エーアシャー種や、ホルスタインの種牛たねうしと牝牛とが沈々と深い瞳を光らしていた。何れも黒くつやつやしかつた。角ががっしりして撓たわみ、両耳が垂れ、そうして悠揚と突つ立つていた。糞尿に黒く湿つたその床も、それでも帚ほうきの目がよく届いていた。青草のにおいもした。

他の牧舎たには耕馬もいた。内国産アングロルマン種、北樺太産洋種、内国産洋種。

骨太く、肉づき厚く、脚短く、逞ましい黒い馬の、流るるがご

とき光沢の皮膚。

「耕馬はこれでなくちやならないね。どうだ、このおすばらしさは。」と庄亮がいった。

そうしてその一頭の長い額を叩き、頬の膨らみから頤の毛並を軽く軽く撫で擦さすった。馬は眼を細め、薄あかい歯茎をむき出し、顫ふるわせながら、さも擦こばゆそうに笑った。

雨がまたしめじめと降りかけた時に、私たちは養狐場ようこじょうの高い板囲いの潜り戸を開けてもらっていた。

ほの黄色い燐の火でも燃えちろめきそうな空そら合あいであった。

樹といつては白い幹の凋落樹の白樺がただ一本うち湿っている

きりであった。

狐は通路を隔てた両側の高い金網のなかを幾つかにまた割った
各自の庭を与えられていた。庭の中央には脚高の細長い小さな巢
箱があり、その横から一方へ斜に樋のようなものが地面へ向けて
突き出してあった。その樋の口から、きよろりと狐の眼が光った。
その樋の下には階段があった。狐はその階段の下の地面に潜り穴
まで穿^{うが}っていた。

ともすると、庭に出て金網近くをきよそきよそと徘徊している
黒狐もあった。疑心深く、驚いては逃げ、狡猾そうにまた後ろを
振り向いて立ち留った。

ああ、雨がふる。

私たちはビスケットを投げた。だが狐は徒いたずらに尻込みして容易に金網に近づこうとしなかった。

「じりじりしますね。何でああ疑い深いでしょう。」と医専の一人が舌うちした。

「そこがいわゆる狐こぎしゆんじゆん疑ぎ逡しゆん巡じゆんというやつだろう。」

褐色の尾の薄い青狐もいた。十字狐や赤狐もいた。その中に尻尾の尖りの白い黒狐の仔だけがまだ人なつこく、はしつこく、金網に飛びついて来た。可憐なその赤い舌が庄亮てのひらの掌を嘗めた。

「あつはつはつ。こりやいい。おもしれえ。」

「無邪気だね。子どものはみんなああだな。」

ああ、雨がふる。狐の目つきに、毛の光沢に。

こんと一声。

秋雨めかしい、燐りんののにおいの小雨である。

養狐場を出たところで、私はまた牛舎の白い狭霧さぎりを、厩舎や豚舎の小雨を見た。しづく雫を含んだ鮮緑の広々とした牧草の平面を、また散在した収穫舎、堆肥たいひ舎、衝舎、農具舎、その急勾配かくの角屋根を。

またうち湿った闊葉樹、針葉樹の林を、森を、また花いろの遠い煙霞を。

ああ、目に透かすと、先ほどの羊の影絵は早やなかつた。
旅愁がしきりに動いて来た。

私は狐に遣り残しのべとべとのビスケットをわが手に嘗めた。

「羊はもう出て来ないのでですか。」と私は歩きながら場長さんに訊ねた。

「めんよう緬羊ですか、いや、雨が降り出したのでもう入れてしまいました。なんならもう一度外へ出して見ましよう。雨も止んだようですから。」と、その人は答えて、「それじゃ、どうぞ此方へ。」と緬羊舎の方へ急いだ。

蔭の深い榆の二、三本の木立が、其処には幽雅な雨霧をまだ梢の緑に保っていた。

何という完全な榆の象すがたであつたらう。榆ほど枝ぶりの整った木

は珍らしい。殊にそれが老木になつたほど喬く、また鬱蒼と張つてゐる。観ていていかにも北方の木の母だという感じがする。

その木立に一本の山査子さんざしがまた隣となつていた。

製こきえたばかりの白木の卓子テエブルと二、三脚の同じ白木の長椅子ベンチと

がその蔭に出しっぱなしであつた。卓子テエブルも長椅子ベンチもじつくりと湿つていた。

私たち——Aさんと、医専の二人と庄亮と私とは、その楡ねの根かた方に座をしめた。

少し離れて左手にまた一本の、それは最も完全な老木の楡が涼しい繁りをそよがしてゐた。その蔭に正方形の白木の壇が据えられてあつた。そうして白木の卓子も置かれてあつた。つい前日に

摂政宮殿下の御座所だつたとのことであつた。

そうして私たちの度つましく取り囲んでいるこの卓子は、恐らく殿下の侍従たちの額が恭うやうや々しく集められたことであろう。殿下も白木の壇上の白木のあの卓子に、おん身を、そのお椅子を寛かんか々と進めたもうたことであろう。そうして遠い白樺の林のかがやきを、牧草の一面の微風を、なんと御覧遊ばしたであろうか。何という簡素と高貴。

御座所の方に向つて、また、四辺あたりを広く眺めまわして、しみじみと私は崇敬した、日本皇室の神聖と、吾が民族の由来する伝統と精神とを、そうして愈いよいよ々に幸さきわうわが国の言こと霊だまとを。

御座所の後ろにはささやかな、また清らかな浅い池があつた。

何の作るところもない、自然のままの池であつた。その水面が薄く明つて、平らかに、また何かの影も映していた。そうして周りの、紫の玉を綴つた紅苜蓿べにつめぐさや、四つ葉の黄の花の馬うまごやし肥やとすれすれに落ちついていたいい静まりを匂わしていた。あの水を緬羊も飲みにも近寄るのだなと私はまた透かして見た。それは幽かであつた。

音がした。それは初めはあるかない響きであつた。その覚おぼつか束たばない騒さわめきが、次第に柔かでもある深みを持った重い確かさで、前の緬羊舎の戸口から、緑の濡れしずくの草つ原へもこりもこりと動いて来た。

改めて駆り出された緬羊の四、五十頭の群であつた。

新月形の両の角を振り振り、素すの額のまろいまぶた眶の肉の垂れた、
 眼の柔和な、何か老いて呆とぼけ面づらの、耳の蔽い毛の房ふさ々ふさして、部
 厚い灰色の、凸でこ凹ぼこの背の、気の弱い緬羊は密集して、誰から、
 どの列から誘うとも誘われるともなしに、おのずからに草を食べ
 食べ移ってゆく。その鈍い動きが動くにつれて立つる音から、古
 びた綿わた埃ほこりの渦のような、また絨じゅうたん氈たん臭い、そして高まる神
 秘性の何かの綜合音が感じられた。

めうう……めうう……とあるものは首をあげた。ほとんど総て
 は下向き下向き、草を食べ食べ移って行った。

と、場長さんが、若い技手に白い陶器のミルク入れと、白い西
 洋皿と、透きとおった薄手のカップとを運ばせて来た。白い二つ

の皿には水っぽい新鮮なサラダの緑を、白い三つの皿にはやや薄黄のマイナスソースをかけた羊の蒸肉を盛つてあつた。それにはまた薄あかい割り箸を添えてあつた。

ミルクが一同のカップに注がれた。

「これは搾^{しぼ}りたてですから召しあがつて下さい。サラダも撈^もぎたてです。」場長さんはまた附け加えた。

「この羊の蒸肉は昨日のお残りです。」

それはと一同がお辞儀をした。

「ありがてえ、ありがてえ。」と庄亮が例の両手を振り振り、その頭をひつ擁えると、ふくれた眶を紅くして、目で喜んで、また頭を打ち振つた。

「や、殿下もこれを召しあがったんだな。」と、私も恐縮した。「ええ、奉呈しました。それにお扨従つぎの武官たちにも出したのでした。そのおさがりです。」

「いい時に来あわせましたな。ひとつ戴きますかな。」とAさんはピシリと箸を割った。

「乾杯、乾杯、さあ。」と立ってミルクのカップを私が差し上げると、

「天皇陛下万歳あい。」とAさんが太声ふとこえにどなった。

「皇后陛下万歳あい。」

「万歳あい。」

「摂政宮殿下万歳あい。」

「皇太子殿下万歳あい。」

「万歳あい。」

そこで、また、

「羊の蒸肉万歳あい。」と私が叫んだ。

「さあ、このミルクだ、搾り、搾りたてのミルク万歳あい。」

「搾りたての、あつはつはつ。」と庄亮が哄笑すると、「や、万

歳、万歳。」と軽く早口に、鼠のしまちぢみ縮しぢみの、尻端折の、メリヤ

スのズボン下の、黒兵児帯へこおびの、腰手拭こしの、それがあつはつはつで

掛けてしまった。そして、

「これはすばらしい。このサラダも万歳だ。」

「ほんとだ、これはフレッツシュだ。しゃきしゃきする。」

緑のちりちりした葉に雨がいつぱいついていて。そのサラダは全く地面じべたから湧き出た滋味そのものの新鮮さと気品とをひるが翻えしている。

「お乳をかけましょうか。」

「いや、これで結構、ついでにその泥のついた火焰菜も。」と私が笑うと、

「あつはつ、甘いよ、そりやあ。」

「甘くていいじゃないか。僕はこの頃何だよ、詩を作る時には、きつと砂糖を嘗めるよ。」

「やつ、こりや、初めて聞いたね。君が砂糖を。」

「おかしいかい。」

「おかしいともお、それはお酒でございましょう。」

「酒はきらいだ。」

「あつはつはつ、そうでしょうとも。」

「だがね、砂糖を嘗めるのはほんとだよ。頭が緻密になつていい。疲れが直るよ。だから、紅茶にドツサリ入れて何杯も何杯も飲む。」

「驚いたね。」

「酒は好きだが、酒を飲んだら僕には詩も歌もできないね。小唄ぐらいはどうだか知らないが、どうしても観照に罇ひびが入るね。慷慨激越の詩ならとにかく、精確な写実をやる時は酒に酔つた感覚では駄目だ。心は鏡のように澄んでいなければならぬからね。」

それでも書ならば陶然として書き飛ばすがね。無慾恬淡てんたんだね。

とすると歌なその時は少々固くなり過ぎるかも知れないな。もつとも書はどうでもいいと思う気持ちがあるからだが、詩や歌は本芸だとしているからね。酒の時はまた酒だけでいい。でないお酒の美德を傷けるきずつ、とこうなる。」

「やっぱり、酒のみだよお。」

「いいさ、だが、甘いものもやるよ。」

「じゃあどうぞ、お砂糖をどっさり。」と技手君が砂糖壺を差し付けた。

「ありがとうございます、いただきますよ。それじゃミルクをもう一杯。」

これはうまい、濃厚だ、実につめたい、「おい、庄亮もう一杯

やれ。皆さんどうです。」となる。

「よかろう。だがいいかい、そのお。」

「かまやしないよ。」で、「いくらでも搾れるでしょう。」と、すこし顔が紅くなる。

「よいしょ。」と医専のTが声を掛ける。

庄亮、「砂糖といえば、俺はもう閉口閉口。何だろう、そおれ、千葉から印旛佐原へかけて、本党は親父の地盤だろう。去年の選挙の時なんだがね。俺たちは、そのお、朝の暗くれえうちから、草鞋わらじばきの尻端折で、吉植です、ええどうかよろしく、ええどうかよろしくさ。あつはつは、やりきれねえ、やりきれねえ。だが、じつは半分は歌を作つてあるくんだからおもしろい。それこそかま

やしねえ。山路などにかかるてえと董すみれが咲はいてる、四十雀しじゆうがらが鳴いてる。廐うまやの裏でも通りかかつて、屁でもプツと落すと、馬がコトリとやるんだからね。きまりのわるいのわるくないの。」

「よくやるんだね、君は。だがお砂糖はどうしたい。」

「そのお、お砂糖がア、問題なんだね。それ、どうせ印旛沼だ。あつちに一軒、こつちに二、三軒だ。一日がかりだアね。とう、やつと尋ねあてると、吉植です。それはまあ御鄭ていねい寧さまに、さあどうぞ、さて、そこで砂糖を。」

「砂糖を。」

「お手をどうぞというから、それ、右の手を出すと、お砂糖さ。」

こいつはたまらねえ。だが、そこは神妙に、ありがとうございま

すき。厭な顔でもして見たまえ、何だ吉植威張つてやがる、俺ら百姓だがアとなる。そこで一票フィさ。仕方なくなく嘗めるんだ。あつはつはつ。それがまたそのお、次から次へとそうなんだからね。掌はベトベトする、口は甘つたるくなる、胸はむかついてくるしね。悪く行き合せると、田舎の事だから牡丹餅をこしらえてる、餡粉あんこの草餅を揉んでる。まあまあ、どうぞお一つ、それやアお一つ、てこ盛りで、勧め方があくどいからね。それに野天のてんは暑いし。」

「あつはつは。」とAさんが笑い出した。「それはお苦しい。」
「ええ、そのお、こう咽喉元まで詰め込んだやつを、正直に、や、もう真平まっぴらとでもいおうものなら、それ、また一票フィとなる。」

ポロリポロリと涙がながれる。そこへもつて来て、お隣りへ廻ると、またお砂糖。親父を代議士に持つんじゃねえ。子泣かせだよ。

「なるほど、そう一々お砂糖をお嘗めならなくとも、どうにかなりそうなものですね。」と場長さん。

「いや、後で気がついたんですがね。そのお。」

「いつも後で気がつくんだ。」

「待ちたまえ。そこで、と。そう嘗めてばかしじややりきれねえ。で、嘗めたふりして、こうそつとふところへザラザラザラさ。秘伝だね。だが、こいつも困ったよ。内ふところがそれ汗まみれだろう。ベトベトする、くつつく。とても気持ちかわれえ。」

さあつと驟雨が走つて来た。

驟雨は樹林の前、牧舎の裏ほど白く白くその雨あしを際立たせて、一斉に騒めき慌て出した緬羊の円い円い背の重なりを、たちまち模糊たる霧煙の中に引き包んでしまった。

めう……めうおおお……めう……めうおおお……

それこそまた濡れ鼠になつて、向うの向うの庁舎の方へと、いっさんに駆け出す私たちであつた。

*

大陸的な樺太の八月の驟雨である。いかにそれが異郷風の壯観

であつたかは想像してくれたまえ。

私は眺めていた。庁舎の押上げ窓の硝子を透かして。

目も彩な花壇の紅が、紫が、雪白が翻った。雨の飛瀑が襲来した。

フィルム。フィルムの急速度の線、線、斜線、

前面の菜圃が。——青黍、もち稗、花椰菜、火焰菜、トマトが、南瓜が、ああ大蕪が。

すばらしい、すばらしい。雨だ、音だ、銀だ、ああ、緑だ。霧だ、霧だ、霧だ。

亜麻が、ライ麦が、燕麦が、夏蕎麦が、菜の花が、ああ、また大麦が。

蝶だ、ああ、光った、乱れた。たたきつけられた、急角度に。

濛々もうもうと、隠見する遙かの白樺、たも。ああ、楡、ばっこ楊。

家、家、家。

見渡すかぎりの牧草。

や、汽車が来た、紫の煙、煙。

「あ、彼処あそこです。露西亞人のパン屋の家は。」と場長さんが、Aさんの話の途中で立ち上った。

先ほどの若い技手が、熱い熱い番茶を卓上の茶碗に注ついでまわった。

「此方こちらにも露人がいますか。」と私は振り返った。

「ええ、一、二家族居っていますかね。」

「何をやって暮らしています。」

「パンを焼いたり、牧畜をやったり、それはおとなしいものです。
」

「聖代の徳化にうるおっている訳でさ。ありがたいもので。」と
Aさんは敷島しきしまに火を点じた。

「白系の良民ですな。元は北樺太にいたのですがね、バルチザンの残党や赤化の無頼漢どもの脅迫から、とうとう堪えきれなくて南へ落ちのびて来たのです。気の毒なものですよ。それでも此方へ来てからはすっかり安心して、日本はいいといっています。もつとも、露領時代からの住民もいます、丸太式の小舎に。」

「校倉あぜくら風のでしょうか。あれはいい。豊原のはいり口でも見かけ

ましたが。」

「いや、豊原には旧露西亞人街がありますよ。もつと揃っていません。」とAさんが頬杖ついた。

「それはいい。ひとつ見に行つて見ようか、吉植。」

「うむ、いいね。それからそのお、ツンドラ地帯というのは。」

「ほろない幌内川沿岸の一円の地帯で、つまりせんたい蘚苔類の堆積で深い幾段もの層を成しているのですね。下層は土に化したように、こう黒く、や、これがそれです。」と場長さんは後ろへ、室の一隅に据えた大きな硝子戸の長方形の棚を指さした。

なるほど、下部は黒く、中部はやや褐色に幾段もの脈がついて、上部は黄や青の苔の、そのツンドラの断層面がそのままそっくり

その中に飾られてあった。

「なんですよ。そのツンドラ地帯にはフレップという紅い果^みの生る灌木が密生してしましてね。それがフレップ酒の原料です。まだですか、紅い酒ですが。」Aさんは、そして微笑した。

「フレップ酒ですか。昨夜^{ようべ}一寸やって見ました。甘いんですね。」
「でも刺戟は強いでしょう。」

「え、あれはアルコールに色をつけたんだとばかり思っていました。あまり紅いんですからね。」

「や、生粹^{ぶじゅう}の樺太葡萄^{ぶどう}です。」

話はそれから航海中の出来事や、横断のパンク自動車、逢坂の後家さんの安来節、これから廻ろうという敷^{しく}香^かのオロチョンギリ

ヤークの生活、かいひょうとう海豹島の噂に移った。

雨がまた一しきり窓硝子をたたいて飛沫ひまつを散らした。

ガランとした白い一室である。

「これはいい、庄亮、踊るにはもって来いだな。」

「あつはつ、やるかア。」

「でも歌えまい、君には。」

「あつはつはつ、歌はちよいと、そのお、困るがね。」と首を竦すくめて、

「それでも何だよ、踊るぐれえなら、お弟子格でやれるよお。」

「T君どうだい。踊れるかい。」

「何です。伊那ぶしですか、家庭踊でしょう。」

「田辺さんの家庭踊じやないさ。本場の伊那ぶし。」

「踊れますとも、僕はこれでも信州人ですからね。」

「や、それは失敬、だがもう僕は酔っぱらったよ。」

「お砂糖にかい。」

「雨にだ、ほら。」

外は濛々とした霧けぶり、銀と緑の驟雨、驟雨、驟雨、

あ、模糊として、なおかつ白い白樺の遠景。

「さあ、諸君踊ろう、踊ろう。静粛に。」

音は走る。

夏は走る、走る、走る。

イワンの家

雨はまだ激しかった。

緑である。白茶しらちゃである。黒である。濃こいねずみ鼠ねずみである。そうし

た自分たちの、または農場から借物のレインコート、雨合羽、軍人マントの一行五人が、案内の技手君を先きに立てて、全くの濡れしずくになって飛び込んだが、其処がイワン・クリロフの家の入口であった。

「おいでかね。」

内では何やら答える声があった。

ずかずかと技手君ははいって行つた。私もみんなの後から、蝙蝠傘うもりの雫をきりきり、そのままで蹤ついて上つた。もつとも雑草の離々たる原っぱを横切つて来たので、私たちの泥まみれの靴は綺麗に拭かれていた。

頭の禿ろすけげ上つた乳っぽい赤ら面づらの、眼の柔和な、農民風の五十男の露助ろすけが、何か羞恥はにかんだような驚きと親しきを見せながら、立ちあがると私たちへ笑いかけた。ペチカの前にも跣かかんでいたのらしい。濃い藍色の労働服を着ていた。横から見たら首の根っこが鼠はだかごこの裸はだか児ごのような紅べにいろをしていた。毛むくじやらの両手つらだ。技手が何か手真似まねで戯ふざけた。そしたら露助が、またしやつ面つらを一層赤くして、「あつはつはつ。」と笑つた。

「まだ日本語が話せないのです。」と技手が私たちを振り返った。
「何という姓ですか、この人は。」と一行の誰やらが訊いた。

「クリロフ。そうだったね。」と技手が眼で笑った。

「クリロフ。」

露人もまた眼で笑った。

何と素直で善良なロスキー気質であろう。おおまかで如何にも
寛かんかん々とした無智。

クリロフの家は樺太における露人の住居特有な校あぜくら倉式の丸太
組のそれではなかった。極めて粗末なバラックで、ただ洋風に窓
を劃しきり羽目板をぶつけたに過ぎない。

私は見まわした。

入口の一室はほんの六、七畳の板の間で、突き当りは物置らしい開き戸になっていた。右手の窓下にはフライ鍋やスープ鍋、瀬戸びきの大きな杓しゃくし子、薬やかん罐などが雑然とぶらさがっている、これが台所だ。

セメントのペチカは右の室へ通ずる渋がちの廉やすさらさ更紗のカーテンの傍に造りつけになって、そのまた隣りに、これも粗末なテエブルが一つ出っっぱなしになっていた。ほかほかと焼けかかったパンの香いがして、ペチカの焚き口には赤い火の反射が幽かにはみ出していた。

外にはまだ雨の音がしてた。

「や、パンだな、焼いてるな。」

というと、イワンがふつと私の方を向いた。

指でちよいと、ペチカの方を、そして私が茶目ると、赤いおやじさんがぼんぼんと片手でその首根つこを叩いた。

「あつはつはつ。」

医専のMとTとがカメラを胸へ、そつと俯うつむ向いて、前へ出ると、

「ジャメジャメ。」

慌てたパン屋さん、大きく両手を振って、すぽりつとカーテンを後向きにもぐりにかかる。それをどかどかと追って、みんなが這入って見て、また見まわした。其処が食堂、いや、寝室らしくもある。木造りのほんの型ばかりのベッドが、奥への通路の赤い更紗のカーテンの傍にたった一つ、ベッドには白い藁蒲団に白い

枕に白いカバー。

「簡素なものだな。」

だが向って右手の硝子窓には黄の赤い蘭科の花の鉢が一つ、大きな素木の^{しらぎ}テエブルの上に載せてあつて、その怪しげな生物が、またこの大陸風のこの雨の日の外光を思いきり吸いふくれていた。燃えあがる焼点。

「ツイトーフ。カムチャツカ蘭です。」
と、技手が私に答えた。

大きなテエブルの両側にはベンチ風の薄汚れた木の腰掛が一脚、二脚、クリロフの一家はここで、互に向い合せて、さて、スープの鍋底を大きな杓子でひっ搔きまわし、パンをもぎり、^{レッドワイン}赤酒

を、また牛の髓骨をしゃぶるらしい。そこでベッドは赤い爺さんのにきまつた。たぶたぶと大きくて、長くて、そしてぴたりとくつつけた、萌黄もえぎ模様の壁紙には染みがある。

その上部にこれはまた浅草物の石版画。

何であろうと、仰いで見ると、これは驚いた。遼陽占領奥軍大奮闘の図、竜宮風の城砦が今まさに炎上しつつある赤と黒との凄すさまじい煙の前面で、カーキ服の銃剣、喇叭ラッパ、聯隊旗、眼は釣り上つて、齒を喰いしぼりの、勇猛無双の突貫突貫、やあ、万歳万歳のあつちこつちでは黒のコサツク帽の、緋の上衣の、青ズボンの、髯むじや露助の助けて助けてに真向、拝み討ち、唐からたけ竹割り、逃げる腰から諸手もろて突き、ウーラーウーラーも虫の息でへたばる背を

ば乗り上げ、蹴立てて躍進、伝令使だ。

「ほほう、露助滅茶敗けじゃないか。」

クリロフのおやじ、呑気なものだ。あつはつはとまた笑つて、しきりに手ばかり振っている。

「ジャメジャメ。」

と、奥のカーテンをまくつて、またのろくさとかぶつて消えたところ、どこどかかと私たちだ。

そこで後から蹤ついてはいると、また見まわした。

十七、八の金髪の娘が一人、向うの隅っこに身をひそませていたが、何か青い毛糸の編針を動かし動かし、キツと此方こちらを見た。

痩せぎすの鼻の高い、それでも飾らぬ野生の美しさはその眼にそ

の頬に蓄つぼんでいた。

そこで、みんながたじたじとなった。

ふつと後ろを振り返ると、私は顔から火が出そうになった。

声もせぬ幽かな姿、

黒い頭巾をかむつて、黒い服をつけて、それはまことに白はくせき皙

の、髪も眉も睚まつげ毛も、その太い鼻も、頬の額の深皺も雪のような、

何か品のよい老婆が、壁際の白いベッドに白いクッションを高く、

下半身に白い薄手の毛布を引きあげて、そうして白い両手をその

上に組み合せて、じつと此方を見入っていた。

何という無作法な旅ごころで私たちはあつたらう。私はまだ燥はしや

いでる一同の後ろから、この不意な、そして無遠慮な異郷人の闖

入行為を立ち竦すくんで恥じねばならなかつた。

閑かな窓硝子からの光。濡れしずくの硝子の内側には紅べにや赤の草花の鉢を一鉢、小さな脚高の花卓の上に置いたのが、そのまわりが鮮新な、しかもかえつてうら寂しい気分にも明つてもいた。

白皙の老婆、（そうだ、もう八十にもとどきそうな）は私たちを見ると、幽かにその白い睫毛をしばだいたいた。そうして、何の声をも立てなかつた。

諦めはてた老いの心の姿をまさしく私は見た。

老婆の青い瞳は深かつた。

どうせ彼女らは無智な農民には違ひなかつた。恐らく本国の土地もかつて踏んだこともあるまい。沿海州から北樺太へ、北樺太

から国境を越えて、どうにかバルチザンの残虐から逃れおさせたものでもあろうか。二十何年か前の祖国と日本との戦争なども無論知っていそうにもなければ、ロマノフ家の稜威みいつを一朝にして衰えさした、かの大敗北の噂話でもあるいは聞いたこともなかったであろう。だからこそ遼陽占領日軍奮闘の石版画の額などを掲げて安心しているのであろう。流れ流れて日本の領土にまで移り住んで、そしてまだまだ住みついたというでもなく、言葉も通じなければ、かろうじてしか日常の糊口ここうすら凌げないという一家である。日本の国と人とに今はひたすら取り縋すがってはいるものの、由来小悪こわるで狡くて、勝っては傲おごり、弱みにつけこみやすいのが日本人のある階級の特性である。善良で無智と見ると何処までも層かさに

かかる。だから果して末々までも頼られるかである。

老婆は諦めはてた心の幽かな姿で、幽かに白い睨毛を合せている。

その老婆の枕のうえには、私は見て度つましくなつた、金の十六弁の菊の御紋章が光り、きんじょう今上皇后両陛下に摂政宮と妃殿下の御尊像が並び立たせられた石版刷りの軸が一本、まことにありがたそうに掛け垂らしてあつた、そのそよともせぬ閑かさ。

と、また、向うの壁と壁との隅、その高い上部にぶちつけた三角の小棚には何が恭々しく飾られてあつたか。

ニコライ皇帝、

その皇后、

手札形の 真しんちゆうぶち 縁づち のその御真影こそはあわれであった。

私は黯然とした。

「撮影さしてください、ね、いいでしょう。」

医専の美少年のMがしきりに娘のナタアシャ（そういう名だっ
たと思うがちがったかも知れぬ）へせびついていた。ナタアシャは
顔を赤くして反射的に編針を持った片手をうち振っていた。気の
少し強そうな、だが邪心のない素朴さが彼女の瞳に見えた。

どかりと、ペチカの方で、テエブルに何か投げ出す音がした。

黄がちの鼠の鳥打帽に鼠の服をつけた、眼の白っぽい、鼻の高
い十五、六の少年が其処には突つ立っていた。何と長い脛すねだろう。

呼び売りの露西亞パンの函はこを紐ながら首からはずして、快活に

此方を見たところだ。

「帰ったね。」

と、技手が声をかけた。

少年はただ笑った。

それから私たちもペチカの前へ引き帰すと、娘のナタアシャも
蹤トナカイいて来た。馴鹿トナカイのような軽い身振りだ。

「君の名は何というの。」

「イワン。」

「そうか、イワン、いい名だね。」と私は微笑した。

いかにも露助らしい名だと思えた。イワンの馬鹿ということが
ある。だが、この少年なかなか敏捷はしつこい。

「君、ここにイワンと書いてくれないか。」

誰かがそのノートを突き出した、鉛筆といっしよに。少年は奪うように手に取ると、窓際へ寄つて、何か走り書きしたと思うと、今度は急に擲たきつけるような恰好をした。

「ナタアシヤ、君もひとつ。」

ナタアシヤはほつほと笑つた。そうして頤しんを突き出すと、叱るような眼をした。それでも面白そうに鉛筆の心を嘗しんめた。金髪がふさふさと揺れた。

「小父おじさん。」とまたMがやると、

「ジャメジャメ。」で、手を振つた。

「じゃあ、撮らしてくれないか。」

爺さん、いよいよ赤い顔をして、また首根っこを叩いた。そうしてイワンとナタアシヤと自分とを指ざした。

「じゃあ、みんなでいいじゃないか。」

「ジャメジャメ。」で、また尻込みしてしまう。

「じゃあ、家を映そう。」と私たちが外へ出ると、今度は硝子窓を開けて、内からさも映してもらいたそうに赤いにこにこ面で差し覗くのだ。

イワンの顔も出た。

ナタアシヤの顔も出た。

「なあんだ、じゃあ、並びたまえな。や、そうじゃないんだよ、小父さん真ん中だ、そら、そのとおりとおり。」

医専がひとりで、雨だまりの草っ原からうれしがっていると、赤い露助のおやしさん、いよいよ固くなつて、それこそ直立不動の姿勢になる。そうして物珍らしそうな、また、極きまりの悪そうなおどどした眼つき。

なんと善良な露助だろう。

なんと無邪気なのつぽ。

なんと素朴な。

恐らく、生れて滅多に写真など撮ってもらつたこともなかったかと思われた。

カチリ、

「よし、済んだ、ありがとう。あ、もういいんだよ。」

「写真送るか。」とイワン。

「送るよ。」

イワンがナタアシヤを突き飛ばしそうにした。ナタアシヤはイワンの肩を撲った。

雨はもう霽りかけていた。

すかんぽ、すかんぽ、紅更紗。

*

小沼の駅へ帰る途々も、私はクリロフ一家のことを考えていた。

かわいそうにみんなが気が弱くなっている。郷ごうに入れば郷に従うのが最も滞りがなくてよいかも知れぬ。しかし果して彼らはいつまでも今のパン屋で暮らしてゆけるものか。たいして信じがたいとは感じながら、強いても取り継らないでは安んじていられない流浪者の境遇こそはまたとなくあわれに思われる。といつて赤化の北へは帰れない彼らである。周囲の日本人に対する複雑した異種族の感情を抑えて、ともかく生きてゆかねばどうにもなるまい。それともまたヌーボーの露助のことだ。私が考えるほどのものでもないかも知れぬ。案外に野呂のろま間で、今日を今日として悠々と楽しむ心も一面には持つていそうにも思われる。だが、あの子供らしい「ジャメジャメ」にも何かしらの暗い哀調は籠っていた。

通りへ出ると角に呉服屋兼小間物店があった。私は麻のハンカチーフを買った。連れの庄亮はゴム足袋にゲートルを買って、穿くと、ぐるぐるとその片足に巻き出した。

店には火鉢が二つ、火がカンカンとおこしてあった。樺太は八月でも雨のふる日はうそ寒い。

「あのクリロフという露西亞人の家がありますね。」

「へい、ございます。」と痩せぎすの主人が答えた。

「あれはどうかやっていますか。」

「ええ、パンを焼いていますですが、相当にやってゆけるようでございますよ。」

どうしたものか、私は主人のうしろに積み重ねた紺足袋の真鍮

の小ハゼが目^しに沁^しんで仕方がなかつた。

駅へ行つて見ると、豊原行の臨時列車はまだ仕立中であつた。

朝早く大泊から東海岸の栄^{さかえはま}浜^ままで直行して、またこの小沼

まで引き返した観光団の一、二等客は、その合間に雨中を農事試験場の参観に出かけたということであつた。

待っていると、ぽつぽつと歸つて見えた。

臨時列車も野天のプラットホームに這入つて来た。

私たちは乗り込んだ。

だが、一行の全員を收容するまでには、なかなか間がありそうに思われた。

「露人の家がありますよ。」と教えると、「や、それは。」と退

屈まぎれに飛び出す人々もあつた。

見える、見える、あのカムチャツカ蘭の窓が。

雨は霽りあがかけたが、まだ露人の家のあたりの空は薄鼠色にうち湿っていた。いや、もう日が暮れかけても来ていた。

「や、来た来た。」

と、誰やらが叫んだ。

少年イワンであつた。首から黄いろいろ紐を、前の函には、それこそふかし立ての露西亞パンを山盛りにして、活澆に改札口を出ると、ちよいと横向きの白い頸すじを見せた。

レールが間あいだに四条。じつくりと枕木も小砂利も濡れて、右も左も椴松の林が遠い、遠い、遠い。

「あれです、露西亞人の息子は。」

とても物好きなきな観光団です。それはとうので、それに少々腹も空すき加減の、恰あたかもよしというところで、乗降口からレールへ飛び下りると、また駈け上って、

「おい、パン。」

「おい、パン。」

「おい、いくらだ。」「おい。」で、一いっとき時に真つ黒たかに群たかつてしまつた。

イワン少年の片手の銀、銀、銀、銀。

瞬まく間に売切れ、そこで、イワンはまた小躍こおどりして、飛ぶよううしろに後を見せた。

またやって来た。また一斉に群った。

万歳、売切れ。

ピーと汽笛が鳴った。

イワンはぼかんと向うのプラットホームに突っ立っていた。胸の空函からぼこを反らし気味に。

「さようなら。」と此方こちらで帽子を振った。

イワンは一寸ちよっと顔を赤くした。そうして特に見知り越しの私たちの眼と眼とぶつかりると、莞爾かんじとして片手をあげた。

「さようなら。」

そしてまた鳥打帽をつかんだ。そしてまた顔を赤くして笑った。振ってる、振ってる。

しろかば
白樺、

白樺、

白樺、

汽車のカダンスが迅くなった。

豊原旧市街

見えた、見えた。
露^{ロシ}西^ア亜人街だ、ほら、

丸太小舎だ、

あ、柳、

窓、

窓、

窓、

あ、赤だ、白だ、紫だ、花だ、

素敵だ、

流れだ、あひる驚だ、

おや、鶏だ、

さあ降りようと、私たちは自動車から早速に飛び降りた。

朝の八時頃、まだ昨日の雨の名残がどこやらに薄うっすらと籠つて、しつとりとしたいいい香気の空気であった。

大通北一丁目二丁目三丁目四丁目と出て、やはり北へ向つた幅広の白い一筋道が、元露西亞人の住居じゆうきよしたという旧市街ウラジミロフカへの往還である。私たち二、三人は博物館の参観、公会堂での観光団歓迎会へ臨む前のほんの小閑をぬすんで、その旧市街見物と出かけたのであった。

橋を一つ、また一つ、それから、やあ、此処だ此処だとなつた。

道の左側にはささやかな流れがあつた。私はその流れに沿つて、また立ち留つて見入つた。

まったく校倉式の丸太組の露西亞人の家々は簡素で、また幽雅で、しかもいい寂色さびいろに古びていた。

純粹なものにこそ真実の意味の美しさがある。日本の古い百姓家やにしてもその茅屋根の勾配といい、張り出しの廂ひさしといい、土間といい、煤すすびた大黒柱といい、外庭といい、いかにも日本固有の雅味がある。

それにしても、この原始的な丸太組の壁は、また飾りのない急勾配の板屋根の形は何と云つていいだろう。硝子窓の劃り方もいかに素朴で、それにどの家のどの窓にも何か色彩の濃い淡い草

花の鉢を見せてある。流れに沿うた裏口のポーチも板張りの平面で、それに二、三段の無造作な周辺、水ぎわの緑の草、盛りの紅葵、あるいは向日葵^{ひまわり}、様々の夏草の花壇、柳の根といった風である。空には奥ゆかしい廂の上に枝垂柳^{しだれやなぎ}が垂れている。こうしたのが露人の百姓家だと思うと、この頃の新開地の日本家屋の醜さがつくづく不快でたまらなくなる。樺太の原生林に、露人はその始めまったくいい生活をしていたにちがいない。

私たちの第一に訪ねた家はことに廂が深かった。イワン・チャハンスキーと標札が出ていた。無論農家であった。主家^{おもや}つづきに牛舎があり、中庭を隔てて、一層古びて頰^{くず}れかけた茅舎^{かやや}の穀物納屋もあった。その間の庭の突き当りに細丸太の木柵があり、その

外は野菜畑やクローバーの原っぱになっていた。

鶏が、その庭に、純日本種の鶏や矮鶏チャボがココココと求食あさり求食りしてあちこちしていた。それを見て私は何とない微笑の頬にのぼるのを禁じ得なかった。

「鶏が遊んでいる、日本の鶏が。」

別に不思議でもないことながら、露人の住居すまいだけに私には妙に珍らしく、また親しく感じられたのである。

私はその廂の下へはいつて案内を乞うた。

戸口は開いてあった。

内は二室ぐらいしかなさそうであった。その取つつきの八畳ばかりの板の間の中央に、何か色の交った白地の頭巾をかぶったお

婆さんが一人、古びた素木しらぎのテエブルに大きな木の盆を据えて、黄ばんだ麦粉をしきりに両手で捏こねかえしていた。そのお婆さんが眼で笑つてうなずいたので、私たちも這入つて行つた。うなずいて目礼して。ただ言葉が通じないかと思つたので、ただ黙つて笑つて見せた。向うでもきさくに笑つて見せた。

川沿いの窓際にはやはり明るい草花の鉢を置いてあつた。その硝子戸の外にも紅玉葵や黄蜀葵とろろあおいが咲き盛つていた。

外庭に向つた一つの窓の前のテーブルには何か白いきれが拵はげられてあつた。洗つて乾かした洗濯物らしかった。中ちゆうばあ婆が横向きに木の椅子に腰かけて、何か継つぎ剥はぎしていた。これも明るい頭巾をかぶっていた。二人ともよく肥つていた。

極めて簡素であつた。

奥寄りの壁際には、これもお粗末な木のベッドが寄せてあつた。薄紅色の浮織りのクッション、白い蒲団のカバー。

それだけ、

や、まだあつた、白い笠の電球。

麦粉は黄色く、そうして白く輝いた。

饅^すえかかつたトマトのにおいがした。

茶の赤い牡^{おんどり}鶏が一羽戸口から這入つて来た。閑かなその呼び

ごえ。

私たちは目礼して外へ出た。

二人のお婆さんはそれまで何一つ言^{もの}をいうでなかつた。だが、

温かな親しさと、幼ない桃色の上気と、軽るい好奇心と何かの反射的亢奮とが彼女たちに見えた。

牛舎は空^{から}であつた。主人が牽^ひいて出たらしかつた。

雨あがりの朝の光線が、今度ははつきりと穀物小舎の屋根の影を地上に映した。

「こうした百姓家では牧場も持つていなさうですがね。」と、私は白髪の和製タートルさんに訊いた。

「や、何でさあ、最寄りの原っぱへ連れて出るのでさあ。このあたりはまだ原っぱばかりですからね。」

なるほど到る処の夏草であつた。

私たちが外の板橋へかかると引きちがいに、同じ観光団の誰彼

がどかどかと踏み込んで来た。

この悪趣味の連中が、あの二人の老婆たちの幽かな半日の楽みを驚かし、あの無作法で何か憤らしてくれねばよいがと、私は振り返ると、手を振った。

「や、こりやひどい家だなあ。」という銅鑼どら声こゑがうしろにした。

通りへ出ると、同じく丸太組の家が、それももうよほど廃頽している軒並が向う側にも続いていた。日本人の家も交っていた。

その中に、主家おもやの外とちに牛舎か何かの建増したけぞしをしている露人ろにんの一戸いっこがあった。

肥った年輩の父親とその息子らしい二人の少年が、まだ骨組ばかりの屋根の上にあがって、専念せんねんに新らしい不足たるときの垂木たるぎをぶちつ

けていた。父親は鼠の鳥打帽に藍色の労働服、息子たちは白っぽい鳥打帽に白のシャツに白ズボン下、夏はまことにその屋根の上の新材木と軽装の三人に光っていた。

ところが、いつの間に群たかつたものか、赤や白の薔薇の徽章を浴衣の襟、あるいは背広のボタンの孔に挟んだ観光団の数十人が、往来から盛んにカメラを向けて騒いでいた。

それのみでない。ずかずかとその主家にはいり込み、納屋をのぞき、牛舎へ廻り、ほとんど傍若無人の限りを尽していた。

屋根の上の露助は、初めは不愉快らしかったが、まだ黙って知らぬ顔で見っていた。それがいよいよ一斉にその足元からカメラを差し向けられると、堪えかねたか、赤い顔して、思いきり大きく

その片手を振りまわした。それでも幾十のカメラはひるむ段でない。

パチパチパチパチパチパチパチリツである。

や、まだ、まだ、――

「写真泥棒。」

と、一人の息子が憤怒を飛ばした。純な少年のこの憤怒はまた、彼の白面を朱のようにわななかした。

と、父親てておやの露語の怒声がまた極度に爆発した。

下では、一時たじたじとなったが、

「なんや、あれが馬鹿野郎いうのかいな。」と一人が、ひひと笑うと、連れて誰だれかれ彼がまたどつと嘸はやし立てた。

上ではもう狂気のように逆上した。

「泥棒、写真泥棒。」

「帰れ、くそ、畜生ッ。」

「がっがっがっがっ、ぶるぶるぶるッ。」

下では

「いよう、七面鳥。」

あたかも、この時、粗帽粗服の一高生らしいのが通りかかった。

「やれ、やれ、負けるな。」と上を向いた。そうして、「一体何

だ君らは、帰りたまえ、乱暴も程がある。」

と立ちはだかった。

「やれ、やれ、俺が承知しねえ、くそッ、てめえたち何だ、何し

にうせやがった。」

隣りから日本人の老百姓が飛び出した。息をきつてふるえてい
る。

「しつかりやんねえ、××スキー。」とまた一人の日本の百姓が
躍り出して来た。

「止よしたまえ、諸君、止したまえ。」

と私たちも手を振った。何と恥かしいことだ。

「此こいつ奴ら、朝つばらから入れ変り立ち変りだからたまらねえでさ。
無作法過ぎますあ、それに勝手に家の中は荒らす、写真は撮る。
いくら何でも辛棒がしきれませんや。」と、また一人の日本の百
姓が、私たちに訴え初めた。

まったく、弱者と見て傲り、たかぶ群集を頼み、旅先を茶にして、彼ら観光団の俗悪者は不法を不法と思わず、無礼のありつたけを尽したに相違ない。無邪気といえば無邪気かも知れぬ。しかし、こうした性情は日本人の一つの特性ではなからうか。だが、また何と親しいウラジミロフカの街の日本と露西亞の百姓たちであろう。私はしみじみと眼がしらが熱くなるのを覚えた。

「写真泥棒ツ。」

「しつかりやれ、アリヨーシヤ。」

樺太神社

十六日薄暮、私は二、三の連れと、この豊原の東郊は旭ヶ岡の樺太神社に詣でた。しつとりとした雨後であった。坦々とした幅広い道路を、いかにも自動車のタイヤが軽く親しく滑って行った。大鳥居の前で下りると、清楚な白い石畳の道を、また石の段を真っ直に、私たちは登って行った。その両側の土の色も芝生も落葉松の林も石燈籠も、見るものがことごとく雨をふくんで、また何ともいえぬ緑と白との涼しさをしたたらしていた。ことに後ろのなだらかな丘陵の緑は明るかった。私はつくづくと思ったが、こ

の八月の樺太の爽かさは、とても内地に見られない色と香氣との新鮮味を持っている。これは驚くべきものだ。展望がまたひろびろとして、しかも清らかで新らしくて、まことに植民地の神苑だと感じられた。祭神はおおくにたまのみこと大國魂命、おこなむちのみこと大己貴命、すくなひこなのみこと少彦名命の三柱だ。神殿の前に立つと、私たちは皆濡れしずくの麦稈帽を脱とつた。

神殿はもう薄紫の暮色がたちこめて、奥殿に何か幽かに光るものが神々しく拝まれた。ほの青い装束のけはいもした。

「上つて見ましよう。」と一人がいった。

私たちの靴の紐は湿つて解きにくかった。やっと解いてから、木の階段を上った。

烏帽子姿えぼしの神官が、神前の供え物を、その白木の三宝を一つ一つに片づけていた。

奥殿へ通ずる扉を、それから閑かに閉して、薄ものの緑の、昆虫の翅はねのような装束をまた幽かに光らして下つて来る神官に、また一人が呼びかけた。

「あの扉は何と申しますか。」

「中門です。」

まだうら若い、眼鏡をかけた人であつた。

その人は黒い烏帽子を前かがみに、私たちの前に、やや斜めに跪ひざまずいて、審いぶかしげに、また親おおくにぬしそうに此方こちらを見た。

「大国魂命と大 国 主 命おおくにぬしのみこととはちがいますか。」とまた一人が

訊ねた。

「はあ。」

「としても、やはり出雲系の神様でしょうな。植民地の祭神はよくそうのようで。」

「そうだよ、君、植民政策としては最も当を得ているかも知れん。」とまた一人がいった。

「だが、出雲系と天孫民族とはどうしても僕も同種属ではないと思う。すさのおのみこと素盞男命からして併合政策として、日本神話のおおたて大立物ものに祭り上げてしまったものらしいな。」

「そういう見方もありますね。」

「だから、どうしてもあまてらすおおみかみ天照大御神を中心に、お祭りするのが

ほんとうでないかと思う。植民地にしても、日本である限りはだよ。」

「台湾は。」

「北白川の宮様を合祀してあります。」

「なるほど。」

ひっそりとした四辺^{あたり}であつた。蕭^{しめ}やかな、光の外の外の光と、影の中の影とが相^{あいもつ}纏れて、それらが物の隅々にまで柔かにうち燻^{くす}んでゆきつつあつた。

このほのかさは、この和^{にぎみたま}御魂のかおりは、また荒^{あらかみたま}御魂の融和は。この神々しきは。この幽^{かす}けさは。

いい時に参つてよかつたと、私は思った。みんなもそう思った

にちがいなかつた。

凡^{すべ}てが、安らかな、また物がなしい自分たちの息づかいを聴いた。

だが、これが樺太であろうか。この親しきは、はるばるとした旅情ともちがう。

きようきよう。

「あ、あれは何です。」

「ほととぎすです。」と烏帽子が空を仰いだ。

空はまだ幻燈のように青かつた。

「あ、あの木は。」

「ななかまどと申しています。」

そのななかまどは紅葉しかけていた。
流石に秋の早いのに驚かれた。

豊原よりの消息

Y君。

この豊原、旧ウラジミロフカの夏はいかにも高原地の初秋らしい風の涼しさを見せている。ここらの丘陵は今が季節の新緑を輝かしている。それだのに早や紅葉しかけた木々もある。

観望の壮大なことは驚く。それに市区の井然たることは、未だかつて内地の都市に見ぬ鮮かさだ。札幌はこれ以上に美しいという話だが、これは帰りの楽しみにして置こう。

旭ヶ岡の樺太神社から瞰下みおろした豊原の夜景はまるで緑野の中の

正しい灯ひの碁盤目ごばんめであつた。

私は南国人だ。北方の陰暗、深刻、そうした私の芸術に欠けているものをこそ求めて、私はこの北方に来ることを楽しみにしていた。が、来て見ると、案に相違した。あまりに新鮮で爽快過ぎる。樺太はやはり冬に来くべきところだと思う。私はここで童謡はできるかも知れないと思えるが、北ほくこく国風の民謡は到底作れそうにもない。夏は南国だ、熾しれつ烈で、あの深刻な惱気すてと棄すてばちの気分は。

この八月の豊原風景はまさしく貴公子の緑の雨外套レインコートだろう。

だが、この日旅館の女中はどうしたというのだろう。この豊原一の宏壯な旅館だからかとも思ったが、まるで芸げいしや妓しやのような美

服を著、粉^{ふん}黛^{たい}している。内地の何処の旅館に泊ったってこんな事はない。一々嬌笑する。この家の旦那というのは内地の代議士だそうだ。

それから庄亮君が名刺屋を呼びつけたよ。法学士、鉄道会々員、新聞同盟外報部長という肩書付きで、本宅は青山の親爺さんのところで電話番号までチャンと刷らせるというのだ。明朝までにととのえろだ。脅かすなというと、「なに、これでいいんだよ、見ていたまえ、あつはつはつ。」と豪傑笑いをしてのけた。僕も忘れて来たので、ついでに名前だけのを頼んだ。

それから洋品店に電話を掛けさせた。縷^{しゆす}子張りの蝙蝠傘三円五十銭のを、これに限る、これを買えというのだ。それで僕は買っ

た。絹張りのステッキ蝙蝠傘などは駄目だというのだ。まったく僕にも似合わないからね。国境の安別で、ひどい吹きぶりにとうとうへし折ってしまった。

この二人が、今朝、公会堂の観光団歓迎会のすぐ後から、幌馬車に乗って、豊原の西郊の追分おいわけという部落へ散策したと思いたまえ。僕たちは一昨日真岡おとといまおかから豊原へ二十里の原生林の横断を果したが、六度もパンクして、とうとうこの追分口から滑走してはいつてしまった。そこには紅い葵が咲き、向日葵が盛り、西瓜や鶉うずらまめ豆の花、唐黍とうきびの毛などがそよいで、それに露西亞人の丸太組の家もところどころに残っているし、異国風の実にまた新鮮な風景だった。それに大きな長い柄の鎌ですういすういと燕麦を

刈りそいでいた百姓の手つきが何ともいえなかったのだ。で、あれをもう一度見に行こうとなつた。庄亮、あわよくば自分でも刈つて見たい意気込みだったのだ。

幌馬車でちりんちりんだ。程よい道の曲り角で、下りると、私たちは子供のよう^ににそこらの花畑や露助の家や農家の背戸^{せど}などを覗いてまわつた。それからずんずん一本道を河楊の並木に添つて、この前見た燕麦の畑まで出て見たが、そこはもうおおかた刈られてしまつて、例の長柄の草刈鎌も百姓の姿も見られなかった。亜麻畑にはまだちらほらと可憐な紫の花が残つて見えたが、日は暑くて、耕作馬車の軋^{きし}り一つきこえなかつた。そこで私たちは燕麦の刈り跡に新聞紙を藉^しいて、寝ころんだが、雲は白いし、いい機

嫌で気焰のあげつこだ。

と、庄亮が、「君。」とめくばせをした。

つい近くの道路を誰だか二人声高に話してゆくのだ。

「あれはアイヌでしょう、一人の方はよほど文化的教養を受けたアイヌらしいです。」

「あつはつはつ。こりや驚いた。」と庄亮が頭をかかえてしまった。

「おれはアイヌだとよウ。」

「ふふつ、おれは文化的教養を受けたハイカラアイヌかい。」

庄亮は例の鼠の縮ちぢみの棒縞ちぢみに、股引の、尻端折の腰手拭と来ているだろう。僕は黒のアルパカで、頭にはハンケチをかぶっていた。

二人とも三円五十銭の蝙蝠傘だからな。それに庄亮の肩書付きの名刺だつてまだ出来て来ないのだからな。

帰りはてくりてくり歩いた。途中で日の出温泉というのが目についたので、一汗流して行こうとなつた。這入つて見ると鉄かなし渋色の鉱泉で、それも沸わかし湯だつた。上つて浴衣を借りると、実に薄汚なくてくしやくしやしている。一室に通してもらうと、生新らしい廉やすもの物の畳のにおいと木材のにおいだ。敷島をと呼んでもないという。麦酒となると、顔いっぱいに赤い湿疹のふき出た二十五、六の内かみさん儀が、おなじく赤いぶつぶつの乳房をはだけて、怪しげな赤ん坊の頭を片手で吊り気味に強く押しつけて、それでお盆に沢庵と一緒に載つけて出て来た。その麦酒も気が抜けて腐

れていた。

どうにも気持が悪いので、そこそこに飛び出したが、いつたい
どういう家なのだろうな。何でも極めて閑散なものだったよ。

それから、遊廓の大通りへかかると、向うの木橋から、白い服
の、そして胸高な青の袴の朝鮮の女が楚々として光って来た。華
魁いらんなのだ。

広っぱがあつて、それから、プカプカドンドンだ。曲馬の天
幕ントの前には三角耳の眼の細い象の子が、赤と金との鞍掛けに飾ら
れて、まだ初々しい灰色の曲り鼻をあげあげ客呼びしていると、
それと対むかつて、白狐とも化け猫ともつかぬ絵看板の、「これはこ
のたび奥州気けせんぬま仙沼は何とか何兵衛の女房お何が生み落しました

る血塊童子でござい。代だいは見てのお戻り、しやい、いらっしやい。カチカチイ。」

日本という国は何処へ行つても靖国神社式の見世物で持つてゐる。祭りや縁日といえばすぐこれだ。初めて上京した時、東京も田舎だなアと驚いた事もあつたが、この樺太ではやっぱしここも都だなアと感嘆された。

それかといつてまた、先月は本居もとおり長世君が令嬢たちを連れて見えたそうだ。童謡音楽会は大入だったという。

豊原は東京の延長としか思えない。だが、こここの場末の盆踊は安来節でやるようだ。

(後略)

木のお扇子

坊や、

パパは豊原という樺太でのいちばん賑にぎやかな町へ来ました。真ま岡おかという町からです。マウカというのは美しい波の上ということだそうです。その美しい波の上から、坊やの好きな自動車に乗って、二十里の山道をブウブウブウと飛ばして来ました。五度も六度もパンクしました。それでも転てん覆ぶくはしませんでした。馬の背たけよりも高い露ふきの林もありました。アンデルセンのお話にある白いお家の蝸かたつむり牛むらや黒いお家の蝸牛かたつむりもいました。みんなア

ンテナを架けて、「J O A K、こちらは東京放送局であります。」あれがよく聞こえるそうです。坊やは虎杖いたどりを知っているでしょう。小田原の山に生えている虎杖の花は薄紅くてちらちらしていたでしょう。樺太の葉が大きいのです。それに茎が高いのです。藪やぶのように繁っていました。

それから、坊やはよく坊やのお国はお菓子の木や蜜柑みかんの木がどつきりあるんだといっていましたね。その坊やのお国は何処にあるか知っていますか。パパも樺太まで来たけれど、まだ見つかりません。やっぱりママさんのところにあるのでしょうか。見つかったら無線電信で知らして下さい。パパさんはこれからまたお船に乗って遠い遠い北の方へ行くのです。海豹かいひょう島とうといって、お

つとせいが黒山のようにいたり、ロツペン鳥ちようが雪のように翔けていたり、それはお伽噺にあるようなおもしろい島があるそうです。それからフレップという紅い実やトリップという紫の実のいっばいに生なつた広い広い野っ原もあるそうです。もしかすると、坊やと同じような子供が、パパといってその中から飛び出して来るかわかりません。篁子こうこちゃんも来ているか知れませんか。

坊や、

パパは今日、この町の博物館に行つて見ました。その博物館に大きな木のお扇子がありました。棕櫚しゆろの葉のように大きなお扇子です。そのお話をしてあげましょう。

その大きなお扇子はいろいろの木の板を紐で綴って、お扇子にこさえたのです。その木の板はみんな薄紅い肉色でみんないいにおいがしています。黒とど、赤とど、えぞまつ、おにぐるみ、たも、あかだも、やちだも、おんこ、からふとやなぎ、いたやかえで、しらかんば、からまつ、にれ。みんないい木です。みんな樺太の山や野に生えてる木です。それで、その木のお扇子を嗅かいでいると、ほんとに樺太の山や野っ原がいいにおいをして動いているような気がします。

それからまだ、樺太にはいろんな木が繁っています。

どろやなぎ、ばっこやなぎ、きぬやなぎ、さんちん、にわとこ、からふとななかまど、たかねななかまど、しうり、やまはんのき、

りんご、まるめろ。

まだまだ、いくつも木のお扇子がつくれます。

坊や、

博物館にはまたいろんな鳥や小鳥の剥製が、硝子^{ガラス}戸棚の中に飾つてありました。

えぞせんにゆう、えぞおおあかげら、くまげら、しめ、赤ばら、えぞやまどり、しまえなが、のびたき、かけす、きびたき、るりびたき、しぎ、うみがらす、つつどり、きんくろはじろ、かるがも、こおりがも、おおせぐるかもめ、おいらんかもめ、うみしぎ、ちどり、うのとおり。

見ていると、ほんとにみんなが生きているようです。こうしたいろいろの鳥や小鳥が樺太の山や海に飛んだり啼ないたりしています。みんな愉快にみんなが子供のよう^にに遊んでいる樺太の山や海のことを考えてごらんなさい。きつと、坊やも踊りたくなるでしょう。

まだまだいろんな小鳥がいます。

坊や、

それからまた、博物館にはいろんなけだものの剥製もあります。

大熊、ひぐま 羆、山猫、とらはんみよう、むささび、麝じゃこうじか香鹿、トナカ 駒

鹿イ。

海で泳いでいる獣には、おつとせい、あざらし、おおあしか。

おおあしか、などは熊よりも牛よりも大きい海の獣です。うわうわうと吼ほえます。

坊や、

それから、お魚では、いわな、かわかじか、かわひらめ、すなひらめ、さめ、ます、さけ、にしん、などが泳いでいます。

見てみると、真水まみずや潮水しおみずの中で、ほんとにみんなが生きて泳いでいるような気がします。

ほら、坊や、よくきこえるでしょう。谷川の音や、海の潮鳴りの音が。

みんなが、坊やの方へ跳ねたり、駈けたり、泳いだりして行つたら、どんなに愉快でしょう。

まだまだ樺太にはいろんな獣やお魚がおります。

坊や、

さあ、おやすみ、坊やのお国で坊やのいいお夢を御覧なさい。
とんとろ、とんとろ、とんとろとん。

笛

樺太は中^{なか}知床岬^{しれとこみさき}の東、
 渺^{びよう}々^{びよう}たるオホーツク海のただ中、

見渡すかぎりは円い水平線と氷雲、

燻^{いぶ}された反射光、

ああ、日の小さい小さい空。

笛だ。

あ、笛が鳴る。

嚙^{りゆうりよう} 唳^{りゆうりよう}と、起つて響くその音^ねいろ。

何かしら薄ら寒い、いい風なぎである。明るいようでも、りやすかげい日射し、照つてもまた光り耀かぬ黒い波濤の連続、見れば見るほど大きな深いうねりである。

その中に笛の音いろが澄みつつある。

吹いているのである。誰が吹くのか、その笛の音は、ただひと一い色ろに響いている。

空と海との、この焦点。

ひようひようふりよう、りようふりよう。

まさしくお能の囃子である。

私は私の船室ケビンの前に、その白い壁に凭れ気味に、籐の腕椅子に
よりかかっていた。

私の右にも左にも同じような籐の椅子が並んでいた。人々が腰
かけていた。

帆綱の影、潮しおじみた欄干てすりの明り、甲板の板の目、環かんのきしり、
白い飛沫しづき、浅葱いろの潮漚しおなわ。

うねるとも見えぬ果しもないうねりの丘陵。

はろばろとした波濤の畳みである。

宏大な海、小さいなのは私たちだ。

笛の音は 中甲板ちゅうかんばんの巨大な檣マストの下、三本立った白茶に藍の開

き耳の、これも大きな通風筒の向う蔭から響いて来る。

「あれは誰ですか。」

「I さんです。あの頬髭のある。」

「何を吹いているのです。」

「羽衣でしょうか。」

「そうだ、天^{てんにん}人の五衰を吹いているのだ。現実の切なさだ。いや、夢見る人の寂しさである。」

「うまいのですかね。よくやっていますね。」

「うまい方でしょうか。もう十年から稽古しているといっていますよ。舞台にも出るようですよ。」

「金^{こんばる}春ですか。」

「いや、宝生ほうしょうでしよう。たしか。」

「玄人ですか、あれで。」

「素人稽古の時はよく褒められたが、本気に遣り出してから以このか来た、さっぱり褒めてもらえぬと悄気しよげていましたよ。そんなものでしょうかね。」

「そんなものでしよう。修業ですからね。お能の笛だけにはかぎりませんよ。」と私は初めて口を開いた。

「この頃臆していけないといっていました。」

「気合いひとつですからね。」と、また誰かがいった。

「それで何だそうですよ、稽古の時には碌ろくに附けもしないで、いざとなるとヒタリと抑えてゆく豪胆な吹き手もあるそうで、これ

にはかなわぬといっていました。」

「それが腹なのでしよう。天性ですね。そうしてそれが心法にもかなったものでしょう。」

「型ばかりに囚われてはあがきがつかないということになるので
すか。」

「先ず、そうでしょうな。」

Iさんは吹いている。

白い支那服の白髯の和製タゴール老人が大きな眼鏡の片紐を垂らし垂らし、ゆうらりと歩いて来た。

「やあ、来た来た、ロツペン団長。」と二、三人が手を拍たたいた。

「あつはつはつ、つまらねえでさあ。」とタゴールさんは、無雑

作に欄干てすり近くの反形そりがたのベンチに腰を下ろした。それから身体からだを斜ななめに、両脚を上げると組み合わせた。

「つまらねえもないでしょう。昨晚ゆうべはどうです。大泊で。あつはつ。」とF君、なかなか逃のががさない。

「御同様でさあ。ばらしますぜ。」

「御同様でもないな。」Fさんがまた眼鏡越し。

「そりやあ、えらいの何のつて、とてもだからな。這入るなりヤツというと矢庭に飛びかかって握手した、あの凄さと来たら、あつはつ、とにかく脅おびやかされましたよ。」

「何処でだい、いつたい。」とこちら。

「はつはつ、つまらねえでさあ。」

「や、ちよつとおもしろい処です。なにしろ、お相手が十六、七の、はっはっ。」

「叱ッ。」

「あっはっはっ。」 「あっはっはっ。」 「はっはっはっ。」 となる。

「といえ、なんでも豊原では馬車でお乗り込みだということでもつぱらの評判ですぜ。」 と、誰やらが左の隅から延び上つた。

「いや、あれはみんなで行つたのさ。物は見て置けといふのでね。」 とロツペン団の一人。

「そうそう、何でもないのですよ。ただ素通りで一週だけぐるりと廻つて見ただけのことです。新聞記者や土地の人も附いていましてね。盆踊りがあるといふので行つたが駄目でした。」 と私。

「だが、このお爺さんには驚いたよ。あつはつ、矢口の渡しの頓兵衛見たいで、ずかずかと這入って行くのでね。いや、閉口だ。」と庄亮。

「A君もA君だよ。石橋の袂たもとで、それは亀の子のように蹲踞しゃがみ込んで動かないのだからね。」とF君。

「いいお坊つちゃんさな。警部さんならちと下情かじようには通じて置くものですよ、風教視察という奴でね。」とタゴールさん。

「いや、つとめたいとは思いますがね。どうも。」と若いA君は、そこで赤くなつて頭を掻いた。チラと眼鏡の下から大きな眼がはにかむところで、

「そりやあかん。」と扇子をパチリは右の三番目だ。

ああ、笛だ、笛だ。

「ところで、この夜明けまで、踊りに踊りぬいた人がありますからね。おもしれえおもしれえ。」と庄亮。

「へへえ、」と、みんなが此方こちらを見た。

「これは聞きものだ、何処です、いったい。」

「豊原のあの、あそこの大通りでだよ。あつはつ。面白うございましたでしょうよ。」

「やあ、ありや面白かったよ。盆踊りが盛つていっているというのでね、歌会の後で、齒科医のS君と一寸廻つて見たのさ。すばらしかつたからね。つい飛び込んで踊つてしまった。S君がヘルメットに

ステツキで、硬直しきりの、後ろからどつかの国の侍従武官兼警視總監というところだ。踊ったなんて絶対秘密になさいと、帰りに耳うちした。」

「はっはっはっ、絶対秘密が自分でばらしちゃ何にもならん。」
「そうかな、困ったな。」

りようりようふりようと笛が鳴る。

昨晚のA西洋料理店の饗宴はまったく愉快だったなど、私は心から微笑した。

樺太で同好の士を幾人も見出したということ、私の育てた児童自由詩の揺籃学校である山梨は鳳来小学の校長であった高橋君が、

大泊に転任して、偶然にも逢いに來てくれたこと、それに

『日光』の同人である大熊おおくまのぶゆき信行君のお姉さんに初めて会つて、

自分の童謡を歌つてもらつたこと、青年たちも淑女たちも、私の顔さえ見れば誰もが莞爾にこにこしていたこと、それから、私が立つて挨拶したこと、

「ええ、今晚は皆さんに逢えて大いにうれしい。」と來て、「この先何かいおうと思つたが、何だか途断とぎれそうだから、これでやめます。一杯のんで思い出したらまた遣ることにします。」と坐ると、庄亮が「なるほど、これはうめえ。」と頭を叩いたこと。それから、やや酒が廻つてから、盛んに燥はしやいで、昔のパンの会の話やら、その頃の私たちの唄をせがまれるままに歌つて、大恐悦

で教授したこと、それから、みんなの顔のスケッチをする、胴上げはされる。おしまいには、みんなを立たして、そのみんなの空椅子の上を片っ端から飛んで歩いたこと、何でもやんちゃの限りを尽してしまったらしいこと。

だが、もう、昨日のことになってしまったのだ。私は今、オホーツク海を北へ北へ、二百六十哩の彼方、ツンドラ地帯は敷香しくかの寒村に向って直航中の高麗丸の船上にある。あの豊原の若い歌人たちとも、また一生に二度と逢えるか逢えないかすらもわからないのだ。

信行君のお姉さんは歌った。この白秋の童謡を。あの夫人は音楽家だ。

吹雪ふぶきの晩です。夜ふけです。

どこかで野鴨のがもが啼いてます。

燈あかりもちらちら見えています。

わたしは見えます。待つてます。

何だかそはそは待たれます。

内では時計も鳴つてます。

鈴です。鳴ります。きこえます。

あれあれ、櫛そりです、もう来ます。

いえいえ、風です、吹雪です。

それでも見てます、待つてます。

何かが来るよな気がします。

遠くで夜鴨よがもが啼いてます。

私たちの、樺太の冬はちょうどこの通りですと、外の諸君も附
け足した。

何の期待ぞ。

ただ、波、波、波、

笛の音ねばかり澄んで来る。

「だが、二、三日でも船を離れて、こうして還つて来ると、まったく、自分の巢にでも辿たどりついたという気がしますね。」

「そうそう、ほつとしましたいたい。」

「それにどうも陸おかに上つているうちは、何だか気ぜわしくていけなかつた。」

「まったく、目まぐるしくてね、何を見たんだか探したか、わかりやしない。」

「はっはっ、こうしていつも揺られているとね、揺られているのがほんとうで、何でもないのがかえつて不安なような気がしたものだ。」

「震災後、余震のない日に限って妙に寂しく思えたようにね。」

「そうだ、そうだ。」

「どすが、こないにしてまた何処へ連れて行かはるか怪態けったいやないう感じはしまへんかな。だんだん日は遠くなるし、曇曇っては来るし。」

「寒ざむともして来るし。」

「何処を見たって波と空だしな。」

「猥談でもやりますか。」

「あつはつ、そこはNさんのお手のものがしよう。」

「ふふ、つまらねえでさあ。」

「なにしろこうなると、この船一つがたよりでな。」

いや、笛の音ね一つがしみじみと頼りになつたみんなであつた。

「神様という気はしませんかね。」

「驚いたな。いやに突拍子もない声を出すじやないか。」
と、みんなが笑つた。何というかすれた笑いだろう。

「神は死せりさ。ふん。」

「若わえ、若けえ、そういつたもんでねえ。」と、またどの爺さんだかどうま胴間声をかつ飛ばした。

いわゆる微笑が私の頬にのぼつた。

「どうしたんだい。」と庄亮。

「いや、ちよつと思ひ出したんだ。羅風がね、非常に怒つていた

んだ。どうしたと訊いたら、「K雑誌」は怪けしからん、もう詩は書いてやらんというんだ。何か失礼なことでもし向けたのかと思つたら、こうなんだ。羅風の詩に神様という言葉があまり多過ぎるから少し減らしてくれといって来たそうだ。減らせというのも非礼だがね。三木君もよく神々というんだ。でね、僕はこういつたものだ。いや、君、こんな話がある。いつか僕に気品のある、誰にでも歌える宴会の歌を作ってくれと頼んで来たのでね、わざと古風にして、日本民族としての「酒ほがい」の歌を作って渡したものだ。すると酒の字があるから困るというんだ。クリスマスチャンや禁酒会員が見たら文句が出るにちがいないから、酒という字だけはよしていただきたいだ。君、酒もつかない宴会があつてた

まるものか。亜米利加アメリカではあるまいし、怒心いかじんとう頭に発したものだ。そうお仰うればっしやそうですが、何でも困ります、あれは酒の讚美ですというんだ。わからないのも程があると思つたね。それはね、「のめや、ともがら」とか「汲めや、うま酒ざけ」とかいう繰り返しがあるからね。こう繰り返されては影響が大変だというんだ。じやあよせ、取りあげるとなつたら、それではあれは掲載します。が、しかし、その御相談は、その詩の後にですね、飲酒の害という一大名文章を誰かに書いて貰つて附けることにしますからそれだけは許していただきたく来たのだ。莫迦ばかなことをいいたまうな。と、それつきり怒りつぱなしになつたが、で、僕は思うねえ。君には神様という字を減らしてくれという、僕には酒の字をよし

てくれという。こりや君、K雑誌は公平だよ、怒りたまうな。とね。そういつて僕はなだめた。」

「あつはつはつ、こりやおもしれえ。」と、庄亮大喜びで泳ぎ出した。

「羅風さんは、そう神様神様とお仰いますか。」と、また一人が乗り出した。

「ええ、それはね、羅風君はカトリックの実に熱烈な信者だし、トラピストへも三、四年は籠っていましたし、しぜん神という言葉が詩に現れると思います。神を思うことは羅風君としての唯一不断の道ですからね。」

「じゃあ、酒を思うことは君の道かい。」と傍から。

「そうしてまた、庄亮の道かい。」

「あつはつは。」と、哄笑して、そうして軽く「まいったまいった。」と頭を動かした。

「だがね、羅風もよくいうよ。僕が天神山てんじんやまの眺望絶佳な高台に居を占めたのも、詩が出来るのも童謡を作ることも、女の子が生れた時に紫の鳩が来たことも、みんな神の恩寵が君の上にあるのだ、恵まれている。今度の旅行も神の導きだよね。これには僕もどぎまぎする。三木君がそう思ってくれることは有り難いのだが、僕はカトリックの信者じゃないのだからね。とにかく異端者としての僕にとっては一寸戸惑いされるんだ。これとよく似た話があるのだ。もう十年も前のことだ。麻布の玄米煎餅の路次裏で両親

と同居していた時のことだよ。そうだ、ちようど「白金の独楽」はつきん こまや「雲母集」きんぼの詩や歌の出来た頃だ。ある晩坐っていると、筆がおもしろいくらい動くのだ。何かこう自分以外のものが後から突き動かしでもするような物凄い無我夢中の感興が私を狂気のようにした一晚があつた。作つた作つた、百篇ばかり作つてしまった。で、実に不思議だから、夜が明けるとすぐ父のところに行つて話した。すると赤い顔をして笑つて「そりや、そうじやろばい。」といわれた。母もそうだ。母も微笑していられた。何故なぜですと伺つたら「そりやそうくさい、おどんが、汝ぬしいよか詩の出来るごつ、いつでん金光こんこう様にお願ねがいしとるけんくさい。」といわれた。

「お蔭があつたばい。」とき。それは金光様がお作り下すつた詩

だというのだ。両親は金光教の信者だからね。実際僕は呆然としてしまったのだ。何だ、自分の力で自分がやったのでないか。信じもしない金光様の何のお蔭だと思つたがね。ただ親の情なさけというものに撲うたれてしまったのだ。まったくこの両親の恩愛のお蔭だとね。僕は落涙した。この意味で、天主は信じないが、三木君の友情には感謝している。今度も方々に手紙を出して置いてくれた。

笛が鳴る。 笛が鳴る。

「で、コワルスさんとかに逢いに行つたのだね。」

「うむ、齒科医のS君が羅風の手紙を持って見えたろう。謹厳な

硬直した態度で、あの人が下座に畏かしこまった時には弱ったよ。羅風の紹介文があまり物々しいから僕もたじろいだね。S君はS君では是非コワルスさんに逢つてくれ、三木さんに済まぬという。で、ほれ、日の出温泉から出た足で、僕はS君の家に廻つて、同道して天主公教会に訪ねて見た。」

「どんな人だった、その宣教師さんは。」

「いい人だった。黒い長服を着て、すっかり宣教師タイプに出来ていた。眼が柔和でね、顔が林檎いろで、頭はつるつると禿げ上つて、髭や頬髯のやや赭あかちやけた、どうしても五十四、五と僕は見たね。後で聞いたが実際に驚いた。まだ三十を少々越したばかりだというんだ。どうも西洋人の年齢としはわからん。どうも考える

とおかしくなるね。案外も案外僕よりも十歳ちかく若かったんだからね。波蘭^{ポーランド}土人だそうだ。」

「何か話があつたのかね、君。」

「いや、前から知らしてあつたので、すぐに出迎えてくれた。スリッパを出してくれたので、靴を脱いで上った。握手するのかわかと思つて手を出しかけたが、向うは純日本風で挨拶したので、こちらでも差し控えた。室^{しつ}は簡素なものだったよ。テーブルに日本の古い本箱が二つばかり隅こに置いてあつた。壁には大きな樺太全図の軸を一つ掛けてあつたきりだ。私も気軽にテーブルを隔てて対^{むか}い合つて腰掛けた。私はS君の紹介の後で、実は三木君と詩の雑誌を出す事になつたので、この際、この旅行をいい機会として、

トラピストにおける彼の当時の住居や信仰の生活や、周囲の風物などをよく見て置きたい希望だということなどを話した。それから日本の子供の詩の話などを訊かれるままに話した。僕もすっかり快活な気持ちを持ちつづけていられたよ。三木君のことも訊いた。白秋さんの感じはどうです、いいでしょうなどと、S君が傍から言葉を添えるので、コワルスさんもあかくなつて微笑していた。コワルスさんは何でも豊原草分けの宣教師で、独身で、土地の信教の為にはほとんど一人で尽しているのだと、S君はまたあの人を僕に非常に褒めてきかした。僕もいい感じがした。それから僕はさよならをのべて立ち上った。三木さんによろしくとあの人を送つて来た。それからね、僕に、また春になったら避暑にお

いで下さいと微笑した。僕も微笑したよ。ね、そうじゃないか。

教会を出てからも、いい匂いのする人だと思った。日本人同志にああしたい匂いの残る面会というのはなかなかないようだね。」

「樺太長官はどうです。」とF君が声をかけた。

「ああ、あの訪問ですか。」

「はっは、あれには驚きましたね。不得要領きわまるんだ、実際。」

「風采はあがらないが、あれでなかなか如才ない方でしょう。でも官僚は僕の性に合いませんね。」

大きな大きなガランとした階上の一室にその痩せ形の長官某氏が納まっていた。大きなテーブルには書類が少々散らばっていた。

牧畜家のH、麦酒^{ビール}会社のF、印旛沼開墾の庄亮、京都府警部のA、それに私がその前の椅子に腰を下ろしていた。昨日の正午前のことであつた。

植民について、——土地選定、土地区劃、土地処分。農業移民の生活状態について。畜産について、また林業について——造林、保護、調査。水産、或は教育について。交々^{こもも}詰めかけ詰めかけ質問した私たちに、かの樺太の王様たる長官が何を、また如何なる熱誠を以て応答したろう。

「ええ、実はそのお。」「ええ、実はそのお。」で、やや罇^{びび}の入つた重い濁り声で、咄^{とつべん}弁でもなく雄弁でもなく、ただ冗漫言をだらだらと素^{そうめん}麵式に扱^こいてゆくだけであるので驚いた。質問の

要点には少しも触れないで、聞いていると枝葉の話ばかりで続
のである。それでいて、此方こちらには口一つきかせないで、一人でうち埒
もなく喋るのである。そこで、その間に属官が三度ばかりきまっ
てコツコツとノックするのだ。

廊下へ出ると、F君が、ああああとやった。

「不得要領な男だなあ。」

少くとも私たちは何一つ与えられないで、公会堂の歓迎会席場
へなだれ込むより外なかつたのだ。

「瓢ひょう箏うたなま 鯨くじらとは政治屋のことですよ。」と今もF君は吐き棄
てるように罵った。

「だがそのお、あれでなけりや身が持てないんだよ。要領を得ち

やすぐに没落だからね。だから僕はそのお、お百姓になろうてえんだ。のんきだぜ。」

笛の音いろは一色に、りようりようふりようと鳴っている。

「ゴルフはどうですか、皆さん。おやりになりませんか。」

恵美須^{えびす}面のM重役が、その長い柄の杓子棒をコトンコトンと音さして、立てて、流して、ふらついて来たが、誰もまた立ち上ろうとはしなかった。

Mさんはすっかり悄^{しよげ}気てしまった。今さら笑顔も引つ込められず、二等の船室^{ケビン}を廻つて消えた。

「一万円。」と、ほろ酔のいい機嫌の紅ら顔の、胡麻塩頭の、そ

れが眼鏡の底の目くばせで、私へ向いて、またつつつと通り過ぎたは浜の輸出商Cという小柄の老人。

そこで、私は庄亮を見た。どうにも笑いがこみあげる。

それは小樽を出ての海上の夜の食堂のことであつた。いい気持ちに陶酔したC老人は、突如として私に年一萬円の補助を申し出た。

「北原さん、洋行なすつちやどうです。及ばずながらわたしが三萬円御用立てしましょう。年に一萬円ずつ、三年ですぞ。」

私は困つて笑つていた。

「占めた。」と庄亮、

「こりやうまい、白秋君、証文をひとつ書いてもらつとこじやな

いか。」

「ようし。」とC老人、早速に半紙に書きなぐった。

「A博士、ひとつ御証明を、そのお願いします。」

A博士は謹厳であつた。容易に筆を執ろうとはしなかつた。そこで、

「Mさん、どうです。」

「あてか、さよか、よろしい。」と、自称美術家のパトロン、M老人、つるりと唾つばきに筆の尖さき、薄墨で 蚯きゅういん 蚓流。

「占め占め。」と、庄亮、墓がまぐち口にねじ込んで、懐中に固くしま
うと、「さあ、飲むぞ、飲むぞ。」

「飲むぞ。大いに飲むぞ。」とC老、ふらふらと立ち上つたが、

また私を見ると、

「三万円、一年に一万円。」

小鼻に一本、直指の型だ。

だが、その翌朝になると、何か会つても鼻じろんだ、それがまた、酒氣に乗つて来ると、そら、また、「一万円。」である。

ところで、此方だが、うっかり忘れていたのを、ふつと気がついて墓口をあけて見たその後のことだ。

「あつはつはつ、こりやおもしろえ。あつはつ。」

「何だい、どうしたんだい。」

「おもしろえおもしろえ。」

と、証文の一札である。

金壺万円也

北原白秋

とある。

「これはそのお、白秋にい一万円贈る、あつはつはつ、じゃあないんだね。君の値段が一萬ン。」

「おやおや。」

「やあ、ははあ、まだおもしれえぞ、ききたまえ、わて、しりまへん。あつはつ、これがそのお、M爺いさんのお。」

「証明かね。」

「あつはつはつはつ。」

そこで、二人が腹をかかえて転げまわったものだったが、知るか知らずや、またまた一万円である。

「あの人も寂しいんだね。」と私も見送つたと、

でれでれと二等の一組。男は中脊の目尻下り、女は髪を等分の、これはこつてりの、おちよぼ口。その恋々相愛の、手に肩、肩に頬を寄せて、私たちの見る眼も憚^{はばか}らぬ御遊歩である。

「なんだい、ありや。」

「叱^しツ。」

「あれが君、評判の鴛^{おしどり}鴦夫婦でさあ。」

「袋叩きにしようという、あれですかい。」

「あつは、何でも白^{おしろい}粉^い刷^ば毛^けまで御^ご亭^{てい}が叩いてやるんだそうだよ

。」

「へへえ。」

「そして湯殿ゆどのの御立番おたちばんでさ。」

「いよいよよう。」

笛の音いろが消えかかった。

「やあ、はあ、これは先生、かけちがってお目通りもし申さんで。
ええ、いかがで、一杯。」

車輛会社のS爺さんだ。ずいぶんきこしめしている。

「やあ、先生、飲んまつしゆう。ひさしぶりですたい。この二、
三日、何処どこどん居おんなはったじやい、いっちよんわからんじやつ
たたい。吉植さん、飲んまつしゆう。ほんに、つまんのうしてな

んたい。おいでまつせ。三等ん方がよか。飲んまつしゅう。飲んまつしゅう。」

九州男のYだ。これは豪傑、胸をはだけて、ずしりずしりとやつて来た。これも少々酔っていた。

「後で行くよ、君、今晚。」

「来なはれ。かまわん。あん爺さんも寂しかと、いよらつしやる。吉植さん。」

「酒はごめんだよ。まだ咽喉のどがわるくてね。」

「なつちよらん。そんならよか。」

あ、また、行つてしまった。

「みんな、変なんだね。」

「なまじ陸^{おか}で浮かれたせいで、妙に落ちつけないんだろう。何だかみんなの影が薄いじゃないか。」

「それに北へ北へと渡るんではね。」

ぽつり、

ぽつり、

ぽつり、

ぽつり、

ぽつり、

ぽつり、

ぽつり、

ぽつり、

ぽつり、

人は一列、元の籐椅子、右も左も同じ高さの頭である。

霧がさあつとかかつて来た。

なんと黄色い日の燻^{いぶ}しだ。

と、

はったりと笛の音いろが止んだのである。

急にはずむエンジン、

スクリュー、

舷側の波の裂けて砕ける音までが、白い嵐を吹きあげる。

オホーツク海だ。

やっぱりオホーツク海だ。
笛は袋にしまったらしい。

曇り日のオホーツク海

光なし、いぶ燻し空には

日の在ありど処、ただ明るのみ。

かがやかず、ほ秀に明るのみ、
オホーツクの黒きさざなみ。

影は無し、通風筒の

帆の綱がへ辺に揺るるのみ。

眺めやり、うち見やるのみ、

あざらし
海豹あざらしのうかぶ潮漚しほなわ。

寒しとし、暑しとし、ただ、

霧と風、過すがひ舞ふのみ。

われは誰たぞ、あるかなきのみ、

酔はむとも、醒めむとも、まだ。

燻し空、かがやかぬ波、

見はるかすまろ円はてき涯のみ。

敷香

や、黒い牛がいる。

私が揺り上げ揺り傾く舩かたぶはしけの中から初めて見た敷香しくかの第一印象は、

一頭のその黒い牝牛めうしであつた。すぐとつっきの砂浜の一角にぼつ

つりと彼女は突つ立つていた。その下半身を埋めた雑草の緑は見

るも鮮かであつた。国境の安別で見た女郎おみなえし花風の鬱金色うこんの花も

簇むらがつていた。だが、凄まじい飛沫しづきのなだれであつた。幌ほろ内川ない

の濁流とオホーツク海の波濤ゆうべとがその河口で激しくかち合つて騒

ぐのである。それにまだ昨夜ゆうべの烈風の名残が容易に収まろうとは

見えなかつた。

上陸して見ると、敷香はかなりの寒村であつた。そうして到る処が灰色の砂地であつた。それで海岸道路には蝦夷松えぞまつの葉で飾られた歓迎門が濃青い簡素なアーチを作つて、私たち觀光団一行をウエルカムした。くぐつて少し行くと露西亞風ロシアの丸太小舎の郵便局も目についた。それに運送兼業の雜貨店や、やや小綺麗な店屋が飛び飛びに二、三軒はあつた。どの店にも絵葉書は売つていたが、後れて私がいつた頃にはもうほとんど気早の人たちを選び散らされていた。それでようやく、丸太小屋の廂ひさしに奉迎と書いた提燈ちようちんを吊して、脛すねの長い女の子と立って笑っている肥つた露西亞人の女の写つたのを一枚手に入れて、早速うちの子に通信を

認したためると、急いで郵便局の小窓の前に行つて見たが、此処で放りこむよりも北海道の稚わか内かないへ帰航してからの方が余程速いということだった。それでもとにかく出すことにした、いい記念のため。

河口を少しくのぼつた空地くうちには木羽葺こつぼうぎの休憩所が一つ見えていた。まだ接待の準備もつかないらしく、若い酌婦風の女が一人二人、風に吹かれて、対岸の遠いポプラや白樺しらかんばのかがやきを見入っていた。真夏とはいつても何かしら寂しい秋口の朝の光であつた。まだ一行の誰もが来て休んではいなかった。

「姐ねえさん、お茶はまだですか。」

私は他ひとのように白樺の皮を剥ぎに行つたり、ざんざめいて歩き

廻ったりするのが臆劫であつた。

「おほほ、もうじきですよ。」

と、女のひとりは襷たすきをかけた。

河の水は一面にちらちらしていた。利根川のように洋々たる大河であつた。オロチヨンギリヤーク土人の独オックダア木舟の競漕がおつ

つけ花火が揚ると初まる手筈であつた。それから一行の誰彼がどやどやとはいつて来た。オロチヨン人の手製に成つた馴トナ鹿なめしがわの鞆

の鞆や、財布——それは太い色糸で不細工に稚拙すげに裝飾してあつ

た——白樺の皮鍋、アイヌの厚司あつし模様のついた菅すげの手提げ、それ

に玩おもちゃ具そりの櫂オックダアや独木舟などを彼らはてんでに買い込んで来た。

それを見ると急に私も欲しくなつたのでまた引返して、売れ残り

の鞆の一つをどうにか探し出した。馴トナカイ鹿の臭みがして小汚くて、赤と黄との凶案があまりにければして、子供でもない自分が肩から引掛けるのは些いささかか気がさしたが、そこはそれ旅の気安さであった。その鞆は紐が短いので、掛けると左の小腋こわきに吊り上がった。幼稚園の生徒のようだった。みんなが笑った。

内地の小さな村役場くらいの物産陳列館にもはいつて見たが、豊原のを見た目には別に取立てて変った種類もなかったもので、おそろしく深々とした熊の毛皮の外套や、防寒帽子、雪ゆきぐつ沓などを取り騒いで買い込んでいる人たちを後にひとりでまた外に出てしまった。

部落はたいした町家並にもなっていないなかった。どの家も平家で、

半ばはお粗末なバラック風であつた。露領時代の名残も見えた。草もぼうぼう繁つていた。いちばん広い通りかと思われる砂地の十字路に出たところで、私は上かみの方から麦酒の空瓶らしいのを両手にかかえて小走りに駈けて来る八つか九つぐらいの卵色の軽い服を着けた亜麻色の髪の子に遭遇であつた。と、その女の子が私のオロチヨンの鞆を見るとたちまち立ち停つて笑い出した、身体じゆうで。露草色のくるくるとした瞳であつた。何か見たような顔だと思つた。

「いいだろう、これ。」ぽんぽんと、こちらも叩いて見せた。それからふつと気がついて私は訊ねて見た。

「あ、君だったね、絵葉書に写っているのは。」

「やだア。知らないよ。」

「それは何なの。」

「石油。」

「君の名は。」

「セーニヤ。」

そういつて、その瓶を目よりも高く差し上げると、また飛び跳ねるトナカイ馴鹿の仔のように活潑に走り出した。素足の裏が白く白くかえ翻かえつた。

河畔へ出て見ると、休憩所の周りは既に群集で埋っていた。何と珍らしい樺太の晴天であつたろう。光り輝く数百の麦稈帽の反あらた射は近い水面を、空気を、砂地をことに眩ゆく新にした。そうし

て岸には長い櫂オールを蜈蚣むかで見たいにそろえた細長の独木舟オックダアが幾隻か波に揺られて、早くも飛び込むと持場持場を固めるオロチヨンギリヤークの青年たちも勇ましかつた。彼らは鼠色の軽装にばんばらの蓬髪なびを長く靡かせていた。

川の上手から静謐さざなみな、光り輝く漣さざなみの上を影絵のように急速力で漕いで来る丸木舟まるぎふねも見えた。一人、二人、三人、四人、五人、あ、六、七人。

「来た、来た、金太郎金太郎。」歓声がひとしきり揚つた。

オロチヨン族の金太郎は少からず人気男と見えた。競漕でもとうとう彼の一組が美事に優勝した。

あの土人どもの無智いちずな一図の活動はむしろ峻烈極まったものだ

った。映画で見る樺太犬の橇そり引きとたいして違いはなかった。四隻の細長い独オツクダア木舟に分乗して、飛沫ひまつを散らして先後を争った凄まじさは、私としては見えていて壮快を感じるよりも、かえって憐れ愍んびんの情に撲うたれたのであった。それともう一つは格別勝負事には興味を持ち得ぬ私にとっては、暑くとも日の照る砂地に踞座あぐらでもかいている方がよかった。私は手をあげてセーニヤを呼んだ。セーニヤも見に来ていた。

「来たね。」

「うむ。」

「君の家何処なの。」

「シヨウヒン……ふふつ、あの横。」

「パパは。」パパでもわかるかと思つて訊いて見た。私は露語を知らなかつた。

「死んだよ。いないよ。」

「ママは。」

「いるよ。ミルク、初めたよ。牛ね、一匹いるよ。」

ああ、あの砂浜に出ていたのがそうだったかと私は微笑した。

「君たちは何処から来たの。」

「アレキサンドロフスキー。」

「何時。」

「去年、去年の前、あ、忘れた。」

「パパは何していた、あっち彼方で死んだ。」

「うむ、お百姓、牛ね、羊ね、いたよ、沢山、パパ殺された。」

「ほう、どうして。」

「バルチザン、悪い人。みんな逃げた。お金もつて。」

其処へ、また、赤や黄や濃い藍染めの更紗布ぎれを頭からひつかぶったオロチヨンの子供たちがぞろぞろと集つて来た。服は廉物やすものの白に花模様のキヤラコの更紗で、何れも韃靼風のものかと思われた。顔も手足も垢じみて、まるで乞食の子のようだ。

私はポケットからドロップの紙袋を取り出すと、少しずつみんなの掌てに配つた。

「君、何というの。」

「マツチヨ。」と十歳ばかりの女の子が答えた。

「君は。」とまた私は次の女の子に訊ねた。

マツチヨが「ウンノツク」と代つて答えた。

「この小さい子は。」

「ムンムツク。」

そこへもつと小さい赤子を抱いて来た鳶色とびの老婆があつた。いかにもツングース系の、顔が平たい琵琶びわ型の、そして眼の細い、鼻のひしやげた薄汚ない、まさかシャーマン教の巫女みこでもあるまいがと可笑しくなつた。御亭主はエフロツクで、自分がクルグツクで、赤ん坊がドイツチだといつた。とにかくこれでも揃つて盛装して来たのであつた。摂政宮殿下の御行啓を奉迎に、上流のツンドラ地帯から出て来て、そのまま部落に帰らずにいるという、

水産課の人の話であつた。

「オロチヨンギリヤークの不潔さといつたら、顔ひとつ洗わず、何もかも着物で拭くんですからね。それに米も麦も食べません。魚の干物ばかりで生きています。奴らは夏になると河のそばへ出て来て、冬は山地に籠るのです。」と、傍から私に話した。みんなが無表情な愚^{おろか}な目付きをしていた。そうしてまるで凍えかかった魚のように赤や黄や青のドロツプをしきりに嘗めた。

「君の家へ行こうか。」と私はセーニヤを振り返つた。
「うむ、ミルクがあるよ。」とセーニヤは駆け出した。

*

セーニヤの家は広い砂地の通りに面した丸太組の小舎であつた。窓の下には背の低くて小さい向日葵ひまわりと、赤がちの黄の金盞花きんせんかが咲いていた。セーニヤはいり口から飛び込むと、もう窓に顔を見せて、ぴつと下唇を尖らした。それから飛びつくように上半身を撓たわめて乗り出すと、片手を窓枠にしつかと、片手を思いきり下したむきたむき向に伸ばし伸ばし、うるさく垂れさがる亜麻色の髪毛をまた、幾度か振り立てて笑つた。桃いろの首根つこだ。

「取っておくれよ。」

「そつちから取れない。」

「やだなア、うん、よし、——ほら。」と葉と蔓つると花とをいっし

よくたに引きもぎった。

はいり口の横には貼紙に「ミルクあります。」と拙い^{ます}日本字で書いてあった。

内へはいつて見ると、二間^まきりしかなかった。侘^わびしい家具の配置であった。取っつきの室^{しつ}には粗末な木地のテーブルに、ミルクの空^{から}罋^{びん}だのつまつたのだの、ゴチャ交ぜに並べた、その横に素^すの片^{かた}肱^{ひじ}をついて、同じ亜麻色の髪^{かみ}のセーニヤによく似た若い娘^{むすめ}が此方を微笑して見ていた。少し顔を紅くして、私を見るとまたセーニヤの方を見た。彼女はさして美人ではなかった。ただいかにも快活で熱情的で、やや投げやりにも見えた。

と、ママが奥から出て来て、眼で会釈をすると、すぐに善良な

豊かな笑顔になった。そうして窓際の小さなテーブルに、その大きな図体をぶつつけるようにして腰掛けると、無造作に壁に背を凭もたした。黒に近い葡萄色の軽装で両手を高くまくり上げ、薄紅い厚ぼつたい耳みみたぶ朶には金の耳環みみわを繊細に、ちらちらと顫ふるえさしていた。二重頤の頬の肥えた、そうして七面鳥のように胸の高く張つた堂々とした内儀かみさんであつた。賢さかしい智識からこれと深められた目色は見えぬが、ただの農民の妻だったに過ぎぬが、いかにもお人よしの隔てのない愛敬がその顔にも表れていた。

私は先ずミルクを所望した。

セーニヤが今度は後ろから、姉さんの首つたまにかじりつくくと、矢庭やにわにその左の頬を持って行った。姉さんは、身体を反り曲げて、

おっほほと笑うと、何か歌のくさりでも歌うように咽喉を転がした。

「セーニヤ、姉さんは何という名。」私はそれで程よく寛ぐことができた。

「イフエミヤ。」

イフエミヤはその乱れた前額の毛をわざと巫山戯てその手で掻き散らした。

「はる、る、る、る。」

それから、

「イフエミヤ・ベリヴェヤワ。」

私は黄色い小型のノートを取り出した。

「どう書くの。書いてお見せ。」

イフェミヤは直ぐに立つて来て、私から鉛筆を受取ると、一字一字力を籠めて書き記した。了るとまたスツと坐つて、両脇を前にぱたりと投げ出した。そうして両手の指を深い前髪の中に、突き入れて笑つた。それから、右の人差指を一寸鼻の上に当てた。

「ベペエデエバ。」と私が読むと、

「ベリヴェヤワ。」

「ベリヴェヤラ。」

ほっほつとママまで腹をかかえた。そうして、「ううむ、駄目。」と含み声でつつと身をねじらした。

b || B

B || v

と、ノートに書いて、「ね。」

眼を近々と寄せた彼女たちの字を書く時こそ一生懸命であつた。

「神戸……いい。」

「え、いい。どうして。」

「十月行く。此処だめ。」

「なぜ駄目なの、いいじゃないか。此処。」

「駄目、^{アカ}赤来ます。」

「^{そり}橇ね、乗って来るよ。わるい人。」

「だって、ここは日本だろう。」

「日本いい。赤わるい、おそろし。」

これは私も今度聞いたが、バルチザン滅落後も北樺太の赤派は極端に不良で、白系の良民に対して脅迫掠奪残虐至らざるなしと
いうことであつた。従つて良民は南下して日本領内に亡命した。

で、農作は絶え、畜産は滅び、食糧には窮乏して来た。従つて、
結氷期にでもなると、幌内川を挙つて南下しかねないという。櫂
を駆つてだ。それで敷香では無論防禦の武器はいくらかは準備し
てある。だが、かの世界の兇暴を兇暴とする強盜群の襲来を果し
て撃退し得るかは疑問である。それのみでなく、彼女たちは日本
内地の大都會の文明的色彩と繁華とをまるで夢の様に憧憬してい

るらしかった。神戸へ行きさえすれば、日常の生活などはどうにでも幸福に過ごし得る事と、単にただ無邪気に考えているらしかった。

「お金あるよ、千五百円。」

ママは開^あけすけだ。

「牛売ります。ね。」

何と、ロスキーの大まかで、善良で、無邪気で、一本気で、また開放的でやりっぱなしであろう。こうしたのがいわゆる露西亞^{きしつ}氣質というものかと私は感嘆した。全く何と好きな国民だろうと。彼女の中にもイワンの莫迦^{ぼか}は光っていた。

それ位で知人もない神戸へ行くのは危険だ、それは止^よしたが

いと、私はしきりに手を振ったが、七面鳥さんなかなか強情つ張りで、容易に私の戒告を聴こうとはしなかった。

「神戸行きます。商売する、ね。」

ところへ、どやどやと一行の四、五人がはいつて来た。室内が急に賑やかになった。

そこでこの肥つて善良な七面鳥が奥の室から廉物やすものの蓄音機を、耳環をちらちらで擁かかえ出して来て、窓際の小さな卓子テーブルに据えると、煤色の大きな喇叭ラッパの口を私たちの方へ差向けたものだ。

安来千軒えええん：う：う

それから「江差追分」「八木節」「博多節」などに変つて行つたが、青羅紗ラシヤの凸凹でこぼこの台の上にレコードはへたばりへたばりキ

イキイ声で旋廻した。

わるいので、そこで誰かの帽子を裏向けにすると、みんなが銀貨のなにがしかを投げ入れた。ママさんなかなかお世辞がよかつた。そうして非常に喜んだ。なるほど、これもやつぱりいい手だなどやつと私は気がついた。別にミルクホールでもないのに私たちのような気まぐれの訪問者も断りも兼ねて愛想をふりまくことも、亡命者の弱気と遠慮とだとばかり推察して、いささか此方こちは済まない心で見えていたが、少し勝手が違ったようだ。なんの金には締つてないこともないらしい。

「さあ、写真を撮ろう。」と誰かが先きへ立つて出ようとする、セーニヤがいちばんに外へ飛び出した。と、門かどぐち口に一人の青年

がまじまじと突つ立っていた。例の鼠の裸はだかご児がそのまま生長して大きくなつたような顔の皮膚の薄うす紅あかであつた。黄の軍服に紺の軍帽をかぶっていた。おおかたアレキサンドロフスキーから持越しのものであろうか。眼がしよぼしよぼして内気らしい、彼も素直で善良そうであつた。セーニヤに聴いたら従兄いとこだといつたが、イフエミヤが一寸紅くなつてセーニヤを睨んだので察すると許いいな嫁ずけの間らしい。そこでその青年も加えて、パチパチといくつかやつて怪しい素人写真の何枚かが済んだ。

昼飯過ぎてから、一行が舟でツンドラのフレツプ摘みに行くが、行かないかと誘つたらセーニヤを初めその従兄の青年までが大喜びで約束した。全くこの僻遠の地で、三百人という文明人——彼

女らから見れば——の集団をかつて見た事もなかつたらうし、その常に憧憬している日本内地の都会生活者と伍して半日の遊樂をほしいままにするということは彼女らにとつて望外の幸福を感じずにはいられなかつたらう。セーニヤは今度は表から金盞花の二つ三つを摘んで私にくれた。

「じゃあ、待っているよ。」

「行くよ、すぐ。」

*

ツンドラ地帯清遊のことはまた筆を改めて精細を尽したい。こ

ここではベエリヴェヤワ一家の事を主題とするからである。ただ二隻のランチに一隻ずつ曳かれた私たちの大団平船だんべいぶねが、沿岸に蘆ろ荻てきが繁つて、遙かの川上に中部樺太の山脈が仰がれ、白樺しらかんば、ポプラ、椴松とどまつ、蝦夷松えぞまつの林を左右に眺めて、一時間も幌内の大河を溯航した壮快さを伝えて置きたい。全く内地にもすくない水郷だという感じが私を喜ばせた。海驢あじかのように黒くて大きな流木も浮んで見えた。ベエリヴェヤワのお母さん七面鳥は私の乗込んだ団平船のとも高い艦とこの方に大きく膨れてかがんでいたが、いかにも楽天家の本相ほんしようをあらわしていた。そうして事毎に「神戸神戸。で話は持ちきっていた。何でも明日にでも牝牛を売るような口ぶりにはみんなも驚いて笑い出した。だがとにかくすつかり中

心人物になり了おほせた。

ツンドラ地帯とは藓せんたい苔類の層積から成る幌内川の沿岸は広こうぼ袤う数十里に亘る地帯の謂いである。その地帯には俗に樺太葡萄と称する紅い果みのフレップと紫の果のトリップとが一円に野生していて、自由に人の来て摘むに任してある。極楽園である。フレップもトリップも躑躅つじによく似た葉の細い小さい灌木である。舟が着いて上ると私たちは皆二時間ほどをその灌木林で悠遊した。いい日和であつた。私たちはフレップを摘み、トリップを探してまた心ゆくままに味い、かつ夢みた。そうしてまた耀かがやかで涼しい風と光と色と音とをもまた十分に新鮮に食らい過ぎるくらいに食らつた。セーニヤは盛んに跳ねまわっていた。何と黄色いカナリ

ヤであつたらう。イフエミヤはその許嫁の従兄と時おり出会つたり、離れたりして摘み耽つていた。彼女は円みのあるいい声の持主であつた。暑い暑いといいながら、両手で胸の乳房の上を抱き締め抱き締め、彼女はよく歌つた。静かな、しかも強い日光の下で、恋々綿々として彼女は歌つた。何という情感的な牧歌であつたらう。

帰航の時、私たち一行の舟は右岸のしらかばばやし白樺林の前に散在するオロチヨン人の部落の前に差しかかつた。土人たちは幾つかの煤色の天幕テントの前に簇むらつていたが、私たちの舟が通ると盛んに色々な布きれを頭の上でうち振つた。私たちもこれに応えた。万歳あかあい、万歳あかあい。見ると赭あかつちやけた魚の干物が幾並びも棚

に掛けられてあつた。その魚の干物にも日射しが移りつつあつた。

「金太郎、金太郎。」

と、セーニヤが伸び上つて手を拍いた。

「おおそうか、金太郎がいるのか。」

「金太郎万歳アい。」

と、またひとしきり舟の中ではざんざめいた。そうして休憩所の前に著いた頃には、もうそろそろ日の光も黄色くかげり初めていた。

風も出て来た。こうして敷香の夏の一日も、雲がまた薄く低迷して、うそ寒く、寒く暮れてしまうのである。私たちはまた一旦上つて、ちゆうじきしよ中食所であつた旅館の一、二へとりどりに鞆や土産物をそろえに急いだ。

それから小半時の後、私たちはまたランチに曳かれて本船へ帰ることになった。敷香の有志やオロチョンギリヤークの土人たちも一同うち交つて、その河口の石垣に立って見送つた。クルグツクの婆さんも女の子マツチョ、ウンノツク、ムンムツクたちも赤や黄や藍の更紗の冠りで並んでいた。

例の肥つたベエリヴェヤワのママは左右を眺め眺め、さも名残惜しそうに、それでも眼では笑っていたが、舟の出しなに、いきなり大きなスカートを舞わして飛び込んで来た。送つてゆきたい、高麗丸の船室を是非見せてほしいというのであつた。イフエミヤも続いて飛び下りた。許嫁の青年も、これは軍隊式に身軽くすぽつと飛んだ。続いてまたセーニヤが人々を掻きわけると、両手を

後ろに拵げて、いざと身構えした、ちようどその時、「駄目駄目あぶないあぶない。」という声が岸と舟とに起つた。

「セーニヤ、セーニヤ。」とママが呼んだ。

だがランチは旋廻し初めた。濛々として黒煙くろけむりが靡なびき、とどろくエンジンの音が人々を息ぜわしく焦立たせた。セーニヤは幾度か飛び込もうとして、支えられた。石垣と舟との距離が一間けんになり二間になり三間になった。セーニヤはしきりに母を呼び姉を呼んだ。だが、最早やどうにもならなかつた。「乗せてやれ、乗せてやれ。」と私たちも叫んだが、今はそれも危険で近寄れなかつた。と突然、火のようなセーニヤの泣き声が起つた。セーニヤは両腕を犄ひしとその顔にあてた。

ママは何か大声で呼び続けた。たぶん牡牛を家へ連れて帰るよ
うにとでもいいつけたことと思われた。

高麗丸はこの沖合ではいかにも壮麗に、またいかにも文明の高
貴な象徴であるかのごとく眺められた。そうして船室ケビンの灯が一斉
に点いた明るい美しさといったらなかつた。星、星、星、星、星。
ママやイフェミヤは眼を輝やかして手を拍つた。彼女たちには高
麗丸が大貿易港神戸の一部であり、神戸はまた高麗丸の延長であ
るかのごとく思えたに相違なかつた。

日が赤く円く、それでも鈍く寒く、今はオホーツク海の遙かに
沈みつつあつた。はてしもない北方の夕焼けが次第に空には濃く
なつて来た。

セーニヤは泣き泣き牛のいる傍まで駆けて来た。

「セーニヤ、さようなら。」

「セーニヤ、さようなら。」

セーニヤと黒い牝牛とが、ぽつりぽつりと、砂浜の叢くさむらに残され
てしまった。いつまでもいつまでも黒く突立つったっていた。

海豹島 その一

さあ、いよいよかいひようとう海豹島だ。

読者諸君。

私はもうじりじりしていたのだ。旅程が長くて、いつまでも私の筆はこの目ざす一大驚異境に達しなかつたからだ。

来た、来た。今度こそは縦横無尽だ。

飛躍、飛躍。

海豹島こそ見物みものだろうと人はいった。私にしろこの樺太旅行の眼目は全くこの海豹島だと期待していた。恐らく三百の観光団員

総てがそうであつたにちがいない。

この海豹島は眼前にあるのだ。

ブラボウ、ぼうぼうぼうぼうと汽笛が吼^ほえる。

八月は二十日の黎明、オホーツク海の暁色。

黒だ——島だ。

一溼。

万歳。

青だ。ああ、透明だ。——赤だ、樺^{かば}だ、雲だ。

あ、小さい太陽、朱だ。北だ。

波、波。紫紺の波、波、うねり波、

光、光、光、光、金の閃光、運動、

かつきりした水平線、

鳥だ、あ、ロツペン鳥だ。ちよう

飛ぶ、飛ぶ、飛ぶ。

飛ぶ、

飛ぶ、

黒、白。黒、白。黒、白、白、白、

白、白、白、白、白、

黒、

黒、黒、

ひりいりい、ひりいりい、ひよう、

ひようと来た、

何と、世界より大きく見える翼、

一羽が来た。

鳥鳥鳥鳥鳥

鳥鳥鳥鳥鳥

鳥鳥鳥鳥鳥

鳥鳥鳥

鳥鳥鳥

鳥鳥鳥鳥

鳥鳥鳥鳥

鳥鳥鳥鳥

鳥

驚く。驚く。

円の、^{えん} 双眼鏡の端から端まで、

黒上衣の、白胴衣^{チヨッキ}の、佇立^{ちよりつ}した、密集した、幾段々になつ

た、

鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥なのだ。

ロツペン鳥の懸崖、岩壁——断層面。

いや、島自体がロツペン鳥の断層なのだ。

正面きつた。

と、展開、第一光景となるのだ。

第一光景

島は小さく低かった、頂上は平坦で。

ちようど、四六版の本を横に見た形だ。

まだほの暗い、藍鼠の背皮せがわ、その背皮は懸崖だ。

赤い、豆の太陽の南、影になつた懸崖の残雪、

と観たが、違つた。

生きている、生きている。

動いている、動いている、動いている。

生長し、生殖し、受胎し、産卵し、展望し、喧騒し、群立し、

思考し、歡喜し、驚異し、飛揚し、ほんやく翻躍し、——島そのものから、ああ、島そのものからすばらしい創世紀にあるのだ。

こちらは高麗丸の右舷、中甲板の欄干てすりに総出そういで、かなしいかな、人間人間人間なんだ。

「いったい、何羽いるんだ。」

「三十万。」

「ほう、三十万。」

「わかりやしないさ、計算できるかい。」

「坪で計るんでさあ、坪で。」と水産課だ。

「ペンギン鳥とはちがいますか。」

「ちがいます。似てはいますがね、うみがらす海鴉うみがらすという奴です。」

「直立しているんだね。ありや、おもしろいな。」

「あれで卵を一つずつ両股の間に挟んでいるんですよ、みんな。」

「へえ、どんな卵です。」

「それは綺麗ですよ。青磁いろで、黒い斑^ふ入りで、円錐形に近い楕円で、大きいんです。」

風だ。

光だ。

飛ぶ。

飛ぶ。

飛ぶ。

飛ぶ。

飛ぶ。

「やあ、飛んでる、飛んでる。」

岩壁の縁が、縁から、はがれて、飛ぶ、飛ぶ、

白光、

赤光、

紫金光。

閃々光だ。

「あ、啼いてるようだな。」

飛沫、^{しぶき}飛沫、

「こりやひどい、とても上陸^{あが}れませんよ。この波では。」

「決死隊だな。一番やつつけるかな。」

飛ぶ、

飛ぶ。

飛ぶ。

飛ぶ。

飛ぶ。

飛ぶ。

第二光景

「坊や。」と私は心で叫んだ。

どうしたんだ、いつたい、私は。

竹林ちくりんだ。紅い芙蓉ふようの蕾だ。

藁壁みみずくの木、兎みみずくの家の窓から顔が出る。——円い眼だ。あ。

「君、君、白秋くうん、そのお、おつとせい 臙膈おつとせい 獣は何処おつとせいにいるんだね。」

「臙膈おつとせい 獣かい。」

そうだ、此処は海豹島なのだ。

オホーツク海は樺太の東海岸北知床岬の南方十海涯かいりだといふの

が、この海豹島の確かな位置とされている。その海豹島は長さ
二百五十間、幅が三十間のほんの小さな岩島に過ぎないのだ。そ
れを白い白い砂浜が四周に繞っている。私たちはその西側に直面
して、今は僅かに五、六町の沖合まで近々と寄せて機関の運転
を止めた高麗丸の船上にあるのだ。

晴天だ、すばらしい。

何とこの微塵光の新鮮さ。ああ、朝はすでに爽かに笑ってい
るのだ。

岩壁に密集したロツペン鳥の風景は、空の明るに従っていよいよ
よ細かに黑白分明し、その飛行はまた耀く風の幅となり、川とな
り、旗となり、帆となり、吹雪となり、波濤となり、無数に白く、

また、黒く紫に、また白く白く擾じょうらん乱して底止ていしするところを知らないのだ。

汽笛が吼える。巨大なあらゆる通風筒の耳、

噴き出す湯気、大煙突。

海上の一大宝塔——高麗丸。

その汽笛のぼうううは島と空とに緩ゆるく深く響いて、遠心的に白く広く拡がってゆく。

空腹だ。ぼうううう。

パパ、おまんまアアアア。

私は涙が流れかけた、双眼鏡の下からだ。

「や、日の丸だ、おい。」

島の最高部、柱が天を摩まして一本、日章旗だ。日本だ、日本だ。

「膾炙獣は見えないかね。君。みんな騒いでるがね。」

「待ちたまえ、や、赤い家が見える。」

「見えてるよ、さつきから。監視人の小舎こやなんだろうが、膾炙獣

がいねえ。」

「膾炙獣は向うかわつ側にいるそうです。」と誰やらが前から振り返った。

「なるほど、変だと思った。」

「いる、いる、ほら、あれがそうらしい。」

黒い点々々、

右の砂浜の尖とっばな端、

あ、ざんざら波、

一面の反射光。

銀、銀、銀、銀、

天気晴朗なれども浪高し。

ところで、白い帽子の白詰め襟の老ボーイ、食堂の入口に現れるなり、^{さんらん}燦爛と、さて悲しげに笑ったが、左に銅鑼^{どら}、右に撥^{ぼち}、じゃん、じゃらんらん、らんらんらんらん。

「一杯やるか、^{ビール}麦酒でも。」

「祝杯、よかろう。」

——麦酒、正宗まさむね、サンドウイツチ、サイダア、牛乳、餡パン、
マツチ、新聞、——

あ、坊やの声だ。隆太郎りゅうたろう、隆太郎。

第三光景

赤塗りの羽目板の家はたしかに監視人の小舎であつた。

ほんの掌^{てのひら}ほどの畠、刺身のつまほどの菜っ葉。

塩漬肉の貯蔵庫、

撲殺人の粗末な宿所、その外の砂地に散乱した白い獣骨、鬱^{うこん}金の岩菊。

此処まで上陸するにはそれこそ一通りの騒ぎでは無かつたのだ。迎えのモオタアボートが伝馬^{てんま}を引つ張つて来て辛うじてロツプを投げる。ブリッジが激しく上下する。凄まじいブリュブラツク

の波の凹^{くぼ}み、その凹みの底にひたと吸いついた欄干^{てすり}の眼、眼、眼。

米領「プリビロフ」露領「コンマンドルスキー」そうしてこの日本領の海豹島（露名、チュレニ島、ロツペン島）。世界に三つしかない膾^{おつとせい}炙^{せい}獣^{じゆう}の蕃殖場だ。絶海の孤島であるこの海豹島には人間のための伝馬などは二隻と用意されてあるはずもなかった。だから一組二十人として十五回に分乗することとなった。一同が上陸しおわるまでに半日はかかる。と、それぞれの見物の時間は極めて短縮されてあらねばならなかった。にもかかわらず、私たち二人は特別に最初から渡つて最終まで居残らしで貰おうというのだ。危険な瀬踏^{せぶみ}も承知の前である、真つ先に私がブリτζを駈け降りると、続いて庄亮、その他のロツペン団員がおなじく斜め

の飛沫しぶきで濡鼠になりながら、パツパツパツと伝馬へ躍り込む。

「万歳。」と上から歡呼した。

たちまち、波濤が溪谷になり、丘陵になった。

「やつ、海豹あざらしじゃないか。」

頭のぬめっこくて円い、黄色い頬つぺたの、眼の柔らかな、髭の目だつ、人魚のようなのが上半身を出すと、またすぽと潜もぐつてしまった。

「行けつ、スピード。」

私は、そうだ、全く胴ぶるいを禁じ得なかつたのだ。

海豹島、幾万の膾炙獸と、海豹と、海驢あしか。

想像だも及ばぬ未知の世界がもうすぐに私たちの眼前に展開さ

れるのだ。

と、横合から、なだれが、波飛沫が滝のように落ちかかつて来た。私たちは外套をひつかぶった。

それからどうにか伝馬を着けると、ひらひらと板子いたごの上を駈けて渡った。それからのことである。

前にいった赤い木造の監守小舎の横から、島の上へとつけた道がある。登りかけたところで、

ぎやお、わお、がお、うわアああ、わお、

ぎやおお、うわうう、ぎやお、わあ、わお。

囂々ごうごうとして、騒々として、漠々として、瞑々として、恢々かいかいとして、

して、何ともつかぬ無数の肉音にくおん声しょうが、蒼い蒼い向うの麗光の

空から吼えとどろいて来た。いや、東の空いっぱいに響き返して、まだ見えぬ岩壁の下から下から湧きあがって来た。耳も聾するばかりのその怒号、吼哮。

愕然として佇ち留つたは私ばかりではなかつた。

と、蒼蠅だ、緑金の点々々が真向から目を撲ち、頬を撲ち、鼻を撲ち、口を撲ち、たちどころにまた紫の螺旋の柱となつて襲いかかつた。

私たちは夢中に駈け上つた。有頂天で。

岩角へのしかけて、三方に板を囲つた見張り櫓。二人ぐらしか並べない樋のような監視所、その板囲いの隙間から、直下の砂浜を差し覗いた——この驚駭、この動顛、この大畏怖、この寂光。

何とこの無人の、原始の、海獣の渾沌世界の、狂歡の、争鬪の、蕃殖の、赤裸々の、瞬間の、また永遠の眞実相であろう。

無慮三万の膾膾獣、

と聞いた。

「あつ被服廠だ。」

肉眼で観た、全く。

累々とした被服廠の死屍、まるであの慘憺たる写真のとおりだが、これはまさしく現実に活動し、匍匐ほふくし、生殖し、吼哮する海獣の、修羅場しゆらじょうの、歡樂境の、本能次第の、無智の、また自然法じねんほ爾うにの大群集である。

ぎやお、わお、がお、うわアああ、わお、お、お、

ぎやお、うわうう、ぎやお、わお、わお、おう。

この不可思議な、この世のものとも思われぬ光景は、このグロテスクな黒褐色の群棲の集団は、言語にも想像にも絶したこの北海の膾炙獣の生活は。

私は観た。右を、左を、前方を、下を。

左の岩壁には、頂上には、密集した黒と白とのロツペン鳥が幾層積を成して、規律正しき燕尾服の紳士行列を作っている。また進行しつつある。

岩菊、浜菜、もるちの花はなむら叢、藜あかざに茅萱ちがや、

黄だ、黄だ、黄だ、緑だ、金だ。

その下の砂浜一帯の海獣の裸臥像である。

また遠浅の遊泳群の擾乱である。飛沫しぶきである。

頭、

頭、

頭

頭

頭、頭、

頭

である。

何とまた空は蒼く、海は無際限に黒く、日は燦爛と明るいこと
だ。

見ろ、この膾膾の集団を。

ぴたぴたと潮に濡れた膾膾は頭が円く、毛がなめらかに、いかにもその後ろ姿までがしなやかに見える。黒い魚のような皮膚の光沢をしている。

だが、陸に上って既に日に乾いたものは熊のように黄褐の毛が逆立ち、頬の髭が強く張って、いかにもねいもう獐猛な巨獣の相を現す。

牛のごとく吼ゆるもの、

凶体の憎々しく大きく、群獣をぬいて高く怒号するもの、

うそぶき、笑い、闊歩するもの、

かよわ孱弱く疲れていざり寄るもの、

ごろりと仰向きに臥おすている牡、右の前ひれ鰭で、はたりはたりと煽いでいるもの、

(暑いんだな、あいつ鰭を団うちわ扇あふにしているんだ。)

へとへとに熟睡しているもの、

乗しかかって噛み合い、吼え合い、

血を流し、また荒れ狂うもの、

逃げるもの、追いかけるもの、

悠々と独歩し、離れてまた幽かすかに遊んでいるもの、

爛らんらん々と睨み、

驚いて救いを求め、

阿諛あゆし、哀願し、心身を他たの蹂躪じゅうりんに委せて反抗の気力も失

せはて、氣息また奄々えんえんたるもの、重なり重なり乗り越え、飛び越ゆるもの、

乳児を抱き、哺乳するもの、

匍はい寄り啼き寄る幼獣、

また、強きよう者しやに虐殺された死屍、腐れて啄つまれる胴体、

砂をかけ合う無邪、

旺盛な精力、実にすばらしい生殖慾、

母愛の権化ごんげ、

煩惱、嫉妬、反噬はんごう、

頭と頸とを重ね、

口を寄せ、

また無関心に蹲うずくまり、眼を瞑つむり、

急に驚いて鰭ひれを振るもの、

海に飛び入り、

連れて飛び入り、

跳躍し、潜水し、駛走しそうするもの、

泳ぎ返るもの、

子を泳がせ、また突き落とし、

魚群をしきりに追いつめるもの、

鳥の毛の飛ぶふわふわを捉えんとしては身をすくめるもの、

鳥の毛といえは、こうした真夏の岩壁寄りを幽かに風に吹かれ

て飛ぶものもある。

白いのは千鳥ちどり、

群獣の中にあるのは雪のようだ。

おいらんがもくちばし
華魁けい鴨は嘴が黄色く、頬が白く、羽は褐色である。その鴨も

いる。

うみしぎ
海鳴もいる。

黒い鵜うの鳥も岩の角には巣喰うっている。

ロツペン鳥も下りている。鴨はまた膾膾う獣の棄てた胎盤をもら

うのだ。

そして、また、

飛ぶ、

飛ぶ、

飛ぶ、

飛ぶ。

ぎやお、わお、がお、うわアあ、わお、おお、
ぎやお、うわうう、ぎやお、わお、わお、おう。

吼える、

吼える、

吼える、

吼える、

吼える、

ぎやお、わお、がお、うわアああ、わああ、おおおお。

遅ましく牡牛のような巨獣の王が、また
首を高くもたげて仰いだ。

太陽は空にあるのだ。

海豹島 その二

読者諸君。

私は監守の小舎を訪ねた。

先客にはすでに白髪はくはつはくぜん白髯はくぜんの和製タートル老人がいた。監守

は相当の年輩に見えた。黒の制服をつけ、謹直な、素朴な態度で彼に應對していた。

粗末なガランとした室内、大きなテーブル、椅子四、五脚、多少の器具、雑書、壁に引かけた帽子、外套、極めて簡素で単純な色彩であつた。

私は一いちゆう揖して、タゴール老人の傍に坐った。話題は無論この島におけるおつとせい膾膾の生活以外のものであるはずはなかつた。私が今現像しようとしている幾多の映画は眼前しよくもく囑目の大驚異に、加うるに監守の某氏の談話と樺太庁内務部の発行にかかる印刷物「海豹島と膾膾」とより得たる知識に基づいたものであることをいって置く。

そこで映画「ハーレムの王」となる。

ハーレムの王

序画

うわおう。

天を仰いで咆哮する巨大な海獣一頭、

髭荒く、牙鋭く、頭毛逆立ち、眼光爛々らんらんとして、高く上半身

を起した。

膾おつとせい膈せいぼ獣の成牡せいぼ（ブル）、年齢八、九歳、体重八十貫、牡牛おうしの

ごとき黒褐色の巨軀きよく、

ハーレムの王である。

うわおう。

再び彼は咆哮した。

堂々たるその勇姿、絶倫の性慾、全身の膨脹、悪戦苦闘の恐るべき忿怒相ふんぬと残虐性こつふん亢奮こうふんとは今や去つて、傲然たる王者の勝利感と大威力とに哄笑げんしし快笑し、三度また頭を高く、激しくうち振つた。開いた前肢あぎけ、嘲り嘲り、巨軀を搔き、また搏はたきうつ後肢こうしの鰭ひれ。

砂上だ。

背景は燦々さんさんたる白光はっこう、

飛沫ひまつ黒き波濤の連続、オホーツク海の水平線。

来る。 来る。 来る。 来る。 来く。

一

うわおう。
ぎやお、わお、がお、
うわアああ、わああ、
おおおお。

来る。 来る。 来る。 来る。 来る。 来る。 来る。 来る。 来る。 来る。 来る。

点々と、

団々と、

騒々と、

ぞくぞく
簇々と、

先駆し、雁行し、競走し、

密集し、乱擾し、軋轢し、潜航し、

跳躍し、

跳躍し、

跳躍し、跳躍し、跳躍し、

ああ、燦爛、冥々、燦爛、陰々たるオホーツク海一面の反射と

影、影、影。

飛沫、ひまつ

飛沫をあげ、

飛沫をあげ、

飛沫をあげあげ、

すばらしい海獣の群、

おつとせい 膾炙獣

の成牡（ブル）の水雷、黒褐の

無数の肉弾。

千頭、二千頭、三千頭、五千頭、

と、

飛んだ、

宙に大きく近く、

ロツペン鳥ちようだ。

耿^{こう}として白く、また黒く、燕尾服の、

両翼を張つて、ひらりと、

画面を横断して、

消える。

と、

飛ぶ、飛ぶ、

飛ぶ、飛ぶ、飛ぶ、

飛ぶ、飛ぶ、

飛ぶ、飛ぶ、飛ぶ、飛ぶ、

飛ぶ、

飛ぶ、

「キイキイキイ、待つてた。」

「キイキイキイ、来た来た。」

「キイキイキイ、万歳。」

「キイキイキイ、万歳。」

「キイキイキイ、ハーレムの諸王万歳。」

時は五月の中旬、珍らしい晴天、

ロツペン鳥渡来後一ヶ月、

樺太は東海岸、北知^{しれとこ}床岬の南方十海^{かいり}湮、岩島は海豹島の前面、

東方。

「ロツペン鳥万歳。」

「万歳。」

「異変ないか。」

「無し。」

よしと、先駆の海獣、

挺身した、高く高く、

一飛躍。

二

岸壁の断層——数万羽のロツペン鳥、

画面を斜めに仕切った砂浜、

波打ち際の

噴水のごとき飛沫ひまつ、飛沫、飛沫。

来た、来た。

黒褐の肉体の波、波、波、重く、濃く、滑らかに、張り満ち膨れて、弾力性の、眼の光る、髭の立った、重なり重なり打ち寄せ押し寄せ、後から後からと部厚に部厚にうねりうねり、盛りあがり躍り立つ、——おつとせい 膾葜おつとせい獣の波、咆哮、奔騰ほんとう、

がばと上陸した、

一頭、

二頭、三頭、四頭、数十頭、

我勝われがちにと、ずぶ濡れの頭をうち振ると早くも背後をふり向き、

牙を鳴らし、前脚をはたいた。だが、

来る。来る。来る。

後から後からと続いて来る。

飛ぶ、飛ぶ、ロツペン鳥ひるがえがひるがえ飛ぶ。

「ハーレムを、ハーレムを。」

彼ら成牡（ブル）の大群集はかくして海豹島の東面の砂浜に上陸する。自己のハーレムを形成すべく第一に地位の先取権獲得、次ついででは生存の上の決定的優勝が各自に期せられてあらねばならぬ。生か死かである。

排他、脅迫、防禦、突進、乱闘、流血、

ぎやお、わお、がお、うわアああ、わお、お、お、

ハーレムとは一の成牡せいぼ（ブル）を中心として成せい成ひん成ひん牡ひん（カウ）

の多くは百頭三百頭の集団である。

見よ、見よ、如何なるブルが最勝の最大のハーレムの王たり得るかを。

英雄児よ、来れ、^{きた}

肉弾中の肉弾。

飛ぶ、

飛ぶ、

ロツペン鳥は飛ぶ。

濃霧だ、

月光だ、

陰惨たる岩島、

画面を黒く、真直ますぐに截断した岩壁の一角かく、

鳥。

冥々、闇々、

咆哮、

悲鳴、——血、血、血、

あ、蒼白い月光、たちまち、

薄らぐ霧、

海獣、海獣、海獣、

肉迫、乱闘、乱噬、
らんぜい

ぐわう、ぐわう、がおかお、

わわわわ、わおわおわお。

濃霧だ、また、

岸壁の一角、

鳥。

四

曇天、

びようびよう

渺々たる黒い水平線、

時として閃々たる白光。

進む、進む、

画面は左へ左へ。

点、

点、

点。

海獣の頭だ。

あ、潜もぐった。

いる、いる、いる、

無数の廃残者、

海中の遁走者、
おつとせい
 膾葜獣、

弱者、負傷者、

老大獣、

力尽き溺るるもの、波とともに盛りあがる、死屍、腐爛した頭。

再び跳躍し、潜行し、

飛沫ひまつをあげ、

飛沫をあげ、

海浜ちかく泳ぎよるもの、

あらた
新に突き落され、噛み落され、抵抗し、諦めず、血みどろに狂
い、のたうち、もがき、必死に狙い窺い、匍はいあがり、

また噛み合い、飛び越え、
動どうてん顛し、

仰臥し、

乗のしかかり、

と、

灰黒色の大きなひれ鰭。

殺やった、

あ、ブラボウ、

巨大な、若い英雄、ブル。

くわつとあけた口、

上顎、舌、

両頬の髭、

眼光。

五

砂上、黒雲の影、いよいよ盛んなる乱闘、

幾千の成牡（ブル）入り乱れてまさに修羅場しゅらじょうの壮観となる。

こっかつ
黒褐、黒褐、黒裾、黒褐、黒褐である。

占領、奪掠、突撃、死守、

悶絶、再襲、

ああ、しかもまだ彼等が争闘の主因たる成牝（カウ）たちは遙かな遙かな水平線の向うにいるのだ。

ブルすなわち即情慾である。彼らは本能そのものなのだ。衝動は自然だ。全身をあげて彼らは搏うつ、生きるがためには、

惨害——自己と地位の確守だ。

勝て。

弱者は畢ひっきよう 竟するに弱者に過ぎないのだ。

勝て。

その外ほかは死だ。

眼、

眼、

おそろしくねい凜もう猛な二頭が向き合った。

六

岩壁の一角。

鳥。

成牝^{カウ}が来た。

キイキイキイキー。

無数の

飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ、ロツペン鳥。

晴天、

六月の上旬、成牝^{ブル}の来島に遅ること、二、三週後。

ああ、とうとう成牝^{カウ}の大群が来た。

聴け、海豹島の地響きを、動悸を。

九千九百の、

いや、一万、二万の花嫁が来たのだ。

七

新らしき曙あけぼのの波濤に乗り、オホーツクの海うなぎか阪を越え、渾沌と
して黒く漂う浮き脂の大いなるうねりに幾万となく群集して膾おつと
膾せいの花嫁成牝カウらは来る。

しかもまた雲霞のごとく後から後から押し寄せるのだ。

北海の黎明である。

雲は微茫のうちにあつて暗く、霧は涯しなく吹き満ち、水平線のかなた遙かに澄みとおる紫の空が透く。

その遙かな、太陽の生るるところより、生まんがために成牝^{カウ}らは来る。

彼女らは総てが懐胎しているのだ。

身は重く、しかも心は強く、世界の母性として、彼女らは万里の波濤を越え、風雨に堪え、陣痛の苦と新生の輝かしい希望とを懐^{いだ}いて、永く忍び、永く忍びつつ、しかも衝^つき進むべくして衝^つき進みつつ、ああ、彼女ら成牝^{カウ}の大群が来る。

渺^{びよう}たる岩島海豹島こそは彼女らの光荣ある産^{さん}褥^{じよく}であり、新

らしき、また盛んなる蕃殖場である。

飛沫だ、
ひまつ

飛沫だ、

飛沫だ。

おお見よ、また、

朝ちやうとん 暎
すでに朱なりだ。

八

黒く、青い、ささべり縁のみ光った、全面の光らぬ波濤、

しかも重厚なうねりの盛りあがり、また雪崩なだれて、見るまに丘となり谿たにとなる。北海の荒海である。その海豹島の波うちぎわ。

「花嫁が来た。」

一斉の咆哮、

驚天動地の大喜、世界の情慾。

それと見た幾千の膾おつとせい膾せい獣けいの成牡せい（ブル）はその波うちぎわに殺到する。鈍重な巨軀の逸はやりに逸った匍匐ほふくの醜態が今、一時にまた光り輝くばかりの黒褐の毛のなだれとなり、地響きとなり、奮いたつ香炎の放電体となる。

気き早はやなのは海中に飛び入り飛び入る。

驚くべき俊敏。すばらしい身みがろ軽さ。

飛沫が立つ、立つ、立つ。

砂上の乱闘。咆哮、咆哮、咆哮、

ぎやお、わお、がお、うわあああ、わお、おおお。

既に見よ、海浜に近づいて却つて怯々として悲しく泳ぎ、恐れてもぐ潜り、驚いてしりぞ退きつつ、ひたすらに上陸する隙をすき窺うて容易に果せぬ成牝カウ、

何と、あの顔のさびしさ、素直さ、

あつ、また波から

出した、出した。

あの眼、あの眼、

人間の母性に見る最も貴い、崇高なあの眼、あの眼。

やつ、飛びつく、飛びつく、

血みどろな、敗れてもなお弾はじき立つ情念、老いてもまだ衰えぬ

生存慾、力尽きて海中に噬かみ落された弱者、老大獣の必死の争奪
戦。

あつ、四方から挑みかかる、躍りかかる、

無慙むざん——女じょ獣じゆうは引つ裂かれたのだ。

一頭、また一頭、

英雄よ救え、ハーレムの最大の王たるべきブル。

ぎやお、わお、がお、うわあああ、わお、おお、

飛び入る、飛び入る、飛び入る。

しかもその時、牡牛のごとく猩々熊のごとき巨大なブル、
たちまちにして天を仰いで咆哮すると見るや、※然ぜんぶとばかり飛
び入った、たたた。

万歳。

だが、だが前から前からと襲走する。後あとから後からと挟撃する。
容易に上陸できそうにないのだ。

飛沫、飛沫、

なんと悲しい女性。

だが、だが、激しい陣痛の兆候は来る。生まれんとする者は胎内に張りつめる。何としても、死んでも生まなければならぬのだ。

必死のカウの上陸となる。

たちまちまた、波うち際の、前にも増した肉弾戦、咆哮、乱喰。^{んぜい}

むしろ凄惨な男性の性慾、暴力、所有慾、茲^{ここ}にしてまた引つ裂かれる女性の犠牲死体が、じりじりと日光と砂熱とに焼け爛^{ただ}れるのだ。

飛ぶ、飛ぶ、

飛ぶ、

ロツペン鳥。

や、や、処女獣の大群が来た。あの中にこそ未だ汚されぬ、しかも愈々いよいよ花のごとく成熟した女性が、真の花嫁がある。

九

同じく砂浜、

岩角、監視所の下、

ハーレムの諸王万歳、

ハーレムの小なるも大なるも、既にその位置に拠つて形勢され
た。

小なるは二、三頭のカウを、大なるは幾十のカウを、更に最も
大なるは、百頭のカウを、それぞれに収容し、また神聖なる処女
獣の幾頭をその保護の下もとに置いたハーレムの諸王たち万歳。

大洋は渺々びようびようたり、日光は燦爛たりである。

咆哮せよ、

汝らは勝つたのだ。

警戒せよ、

弱きはまた、追われ、殺され、盗まれるのだ。

不眠不休だ、ああ、これから愈々。

岩角、監視所、

木の囲いの上から大きな人間の顔が出る。

十

巨大に引き伸ばされた おうごんしよく 黄金色の岩菊の花、
 その岩壁の下の はなむら 花叢、

太陽光は輝々としてその花叢にある。

びふう 微風が花卉を動かしました耀やかす。

七月の静謐せいひつ、

黒と白との寛洪な燕尾服の紳士、ペンギン鳥の従弟いとこ、ロツペン鳥が、その上の岩壁の突処とつしよに立っている。

横向いて、なんと長閑のどかなそのまるい眼だ。おりおり岩菊の蕊しべを覗き込む、

蟻の黒い大きな触角が動く。

と、すばらしく拡大された幼獣のなめらかな黒い頭と前肢まえあしの両つふたの鰭とが幕面の右下から匍かいあがって来る。

なんとその面かおの眼の可憐なことだ。

微風が花卉を動かす、また耀やかす、

膾炙えいじの児はすでに生れているのだ。おそらくは生後一ヶ月は

経つていよう。彼らの母は上陸すると間もなく輝やかしい産褥に就いた。ハーレムの王たる英雄ブルの絶大の愛と保護とによつて生れたものに幸さいわいあれ。

微風が岩菊の花弁を動かし、また輝やかす。

何か深く聴いている

巨大な蟻の触角である。

十一

ここで、諸君、かつて記した海豹島第三光景となる。この「十一」の映画は惜しいかな、前に切り取って映したのでここには復

写せぬ。が、とにかく、三万頭の膾炙獣により成る数千百のハーレムにおける割^{かつきよ}扱、争奪、保護、飛血、生殖、哺乳の大歓楽境^{だいしゅらじょう}大修羅場を現出する。悪戦苦闘のブルどもは不眠不休、飲まず食わずしかも絶倫なる精力はその残虐と流血と肉弾戦の間にも驚くべき性殖力を発揮する。

殊にハーレムの王中の王、その最勝王ブルは三百頭の成牝^{カウ}と交接し、その懐胎するに到るまで続けて抱擁し、その三百頭ごとごとくを懐胎せしむる。そうして、ようやくにしてハーレムを解放するのである。

成牝^{カウ}の体臭。

想像だも及ばぬ生きた「被服廠の死屍」さながらの、累々たる

黒褐の、頭の、凶体の、鰭脚の、本能次第の、無智の、性慾そのものの、阿修羅の、また自然法爾の大群集、その大群集を見よ。

ぎやお、わお、がお、うわアああ、わお、おお、

ぎやお、うわうう、ぎやお、わお、おう。

ぎやお、わお、がお、うわアああ、わお、おお、

ぎやお、うわうう、ぎやお、わお、おう、

ぎやお、わお、がお、うわアああ、わお、おお、

ぎやお、うわうう、ぎやお、わおおう。

だが、これらの強大なハーレムも遂には分裂する。何れは三、^{いず}

四ヶ月の間だ。十月十一月、寒風の吹き荒むとともに、懐胎したカウの大群集は成長した幼獣、処女獣と南方に向つて去り、半^{はんせ}成^{せい}牡^ぼも去り、そうして、かの絶倫なる諸王、ブル中の英雄たちも、不眠と絶食と間断なき性交とに、疲労困憊^{きよく}の極は、へとへとによるよろになつてようやくに後から後から蹶^ついて去るのだ。ああ、だが、今は今は歡樂^{たけなわ}の酣^{たけなわ}である。

十二

同じく海豹島は砂浜の南端、群棲場の光景。

哀れなるかな、激烈なる生存競争に敗れて氣息奄^{えん}々^{えん}たる、一

頭の成牝カウ若くは処女獣をさえ収め得ず、小なる小なるハーレム一つ創り得ずに止む永遠の孤独者、または昨の英雄、かつてのハーレム中の獐ねい猛者もうしや、しかもまた老大奮わぬ今日こんにちの悶々者、かつはまた既に煩惱の兆して、未だ力弱き半成牝。

恥さらしの、孤独地獄の、しかもまた累々たる半死の膾膈獣の群棲場。

北の、砂浜つづきのすぐ近くには盛んな蕃殖場、咆哮、生殖、大歓楽。

眺めては眺めては悲しそうな、悔しそうな、諦められぬ、どうにもなれぬ、死しぬにも死なれぬその眼、眼、眼、眼。

彼らをこそまた、監視所の人間どもは撲殺してまわるのだ。暁

天に、月夜に。

しかもまた、彼らの群棲場には一羽のロツペン鳥すら、ああ、頬の白くくちばし嘴の黄色いおいらんがも華魁鴨の姿すら、小さな海うみしぎ鴨さえ、飛んでも来なければ、羽ばたいても遊ばないのだ。

今さら蕃殖の能力なき彼ら、彼等は早晚撲殺されるのだ。撲殺されて毛皮は売られ、肉は塩漬けにされ、また野師の手に買われてしまう。

「ええと、皆さん、ここもと御覧に入れまするは、樺太海豹島は膾膾たるの塩漬け肉でござい。何々ピン以上の滋養強壯剤、陰萎、腎虚の大妙薬、物はためし、効能靈驗、万病の持薬、このごろ流行の若返り法などとは論外、ええ、膾膾たるの腎蔵——。」

波も嘲る。^{あざけ}波も嘲る。

沖には処女獣、

ひらひらとロツペン鳥。

雲は白い白い。

十三

群棲場の前の波、波、黒い波、

小さな岩、

岩の上には小さな黒い頭の膾膾^{おつとせい}の幼獣がいる。

一頭、

また匍いあがる一頭、

二、三頭、

波が来る。つるりと滑り落つる幼獣、あっはっはっは、これはおもしろい。

三方四方からまた匍いあがる。

また波が揺り越す。

また滑り落つる。

なんと可憐な小供であろう。彼らは嬉々として遊ぶ、遊びを遊ぶ、日光と風と波とに。

何たる無邪、何たる永遠相。

ああ、また飛沫^{ひまつ}をあげ、飛沫をあげて、澆刺^{はつらつ}と泳ぎ、潜り、

また跳りはぬる三、四歳の小供ども。

海は彼らに笑っている、永遠にもかなの愛しく。

説明者、

『童謡「北の海」を御紹介いたします。』

黒くて光らぬ

オホーツク海の波は

ざんざんざぶりこと

岩うつばかり。

岩へとあがるは

おつとせいのこども、

ざんざんざぶりこと

波が来ておとす。

またまた、顔出す

おつとせいのこども、

ざんざんざぶりこと

波が来ておとす。

いつまで遊ぶぞ

おつとせいよ、波よ、

ざんざんざぶりこと

お月さまあがつた。

幕面の光景、次第に月明げつめいになる。

蒼茫とした岩のうえの幼獣の群れ、

霧が幽かに飛ぶ。

十四

第「一」の一頭の巨大獣再写。

天にうそぶけ、

ハーレムの王中の王、その最勝最大の王たる英雄第一のブル。

十五

波濤、波濤、波濤、

渺たる海豹島の遠景、

暁天、

たちまち、

幕面を斜めに切つて映つたロツプ、

大汽船の鉄欄^{てすり}、

半側だけ見える巨大な通風筒、

と、ゆらりと、葉巻を啣^{くわ}えて出て来た支那服の北原白秋、

その顔が大きく微笑すると、微笑しつつ、いよいよ大きく、更にいよいよ大きく幕面いっぱいになる。

「ハーレムの王」
 畢^{おわり}。

卷末に

大正十四年八月、私は鉄道省の主催に成る樺太観光団に加わつて、二週間に亘る汽船高麗丸こままるの航海を楽しんだ。横浜から小樽、国境安別あんべつ、真岡まおか、本斗ほんと、豊原とよはら、大泊おおどまり、敷香しくかと巡遊して、最後にその旅行の主要目的地であつた海豹島かいひょうとうの壮観に驚き、更にオホーツク海を南下して北海道の稚内わっかないで一同と別れた。そうしてまた旭川でアイヌの熊祭を観、札幌に淹留えんりゆうし、函館より海を越えて当別とうべつのトラピスト修道院を訪ねた。ただこのフレップ・トリップは主として樺太における収穫である。観光団解

散後の北海所見はいずれ機を得て稿を改めるつもりである。この
 行は初めより歌友吉植庄亮君と伴であつた。

フレップ・トリップ。樺太葡萄の紅い実と黒い実。

八月の日光、南風、波濤、

丈余の落ふきと虎いたどり杖、

パルプと断截機、

燦爛たる榆にれの微笑、 火焰菜かえんさいと燕麦、 緬羊めんようと白樺、 驟雨、 驟

雨、 驟雨、

黒とどの原生林、

露人の家々、

ツンドラ地帯の極楽園。

ああ、海豹島、三万の膾膾おつとせいとと三十万のロツペンちよう鳥う。
今思うても実に愉快な旅行であつた。

若かれと私は叫ぶ。

若かれ、若かれ、若かれと。

青空文庫情報

底本：「フレップ・トリップ」岩波文庫、岩波書店

2007（平成19）年11月16日初版第1刷発行

底本の親本：「白秋全集 19」岩波書店

1985（昭和60）年6月5日初版発行

初出：「女性」プラトン社

1925（大正14）年12月号～1927（昭和2）年3月号

※「蹂躪」と「蹂躪」の混在は、底本通りです。

入力：kompass

校正：岡村和彦

2012年10月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

フレップ・トリップ

北原白秋

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>